

悠 遊 第七号

悠
遊

第七号



企業OBペンクラブ

平成十二年三月二十九日

企業OBペンクラブ同人誌

《第七号》

目次

Ⅱ 特集・ミレニアムに思うⅡ

◇ 大河の彼方

「マ・ワラ・アンナフル」へ……………三枝 享 4

◇ ミレニアム愚考……………北田 純一 7

◇ 絵画の発展と足跡……………新井 進 9

◇ 二十世紀の光と闇……………本田 克夫 12

◇ ミレニアムに思う……………今川 確郎 15

◇ 倫理はいずこへ……………岡 政昭 17

◇ 再考すべき現場教育……………森田 茂 20

◇ 私の二十世紀―年寄りのたわごと……………野村 嘉彦 22

◇ リーダー待望……………岩崎洋一郎 24

◇ 老人とネット社会……………高橋 孝蔵 27

◇ 離婚願望の女たち……………アブドルカーター栄子 30

◇ ガリシア便り……………大野 晃 32

◇ ゆとり礼賛……………藤岡 豊 35

◇ 本が変わる 本屋も変わる……………多田 修 37

◇ 二十一世紀における国家……………櫻井 清治 40

◇ 「ミレニアム」と言うけれど……………衛藤甲子郎 43

◇ ミレニアムに思う……………今村 亮 45

◇ 二十一世紀はどうなるかの勉強……………杉浦 右蔵 47

◇ 言葉はどう変わるだろうか……………中川路 明 50

◇ 新千年紀の展望……………中村 爽 53

◇ 教育改革は新千年紀スタートの課題……………竹内 京一 56

◇ ミレニアム偶感……………児玉 忠雄 59

◇ 「日本経済再生・飛躍」に思う……………芦刈 克 61

◇ 二〇〇〇年元日のテレビを見て思うこと……………三宅 劭 64

◇ 長寿時代のミレニアムに未来像を想う……………大島 義 67

◇ 宗教心と青年……………折戸 常司 69

◇ 「新千年紀」新春ゴマメの放談……………吉井米三郎 72

◇ ミレニアム年頭にあたって……………松浦 武弘 75

◇ 中国黄山山頂で迎えたミレニアムの夜明け……………柴垣 復生 77

◇ 性悪はびこるミレニアム……………石川 正達 79

II 自由テーマII

◇痴呆の告知……………	榎本喜三郎	83	◇紅茶物語……………	亀井 弘次	129
◇「桃太郎伝説」は中国起源？……………	志田 渉	86	◇死にたくない……………	小林 正憲	131
◇身代わりハスキー……………	岸本 義生	87	◇お墓……………	都甲 昌利	133
◇与謝野ギャラリーと川端記念館……………	中洲 靖雄	90	◇あえて尊厳生（死）に……………	新山章一郎	136
◇中国河南省……………			不真面目に挑む……………	新山章一郎	136
◇国有塗料会社訪問記……………	吉嵩 清巳	92	◇シンガポール繁栄の陰に……………	莊司 忠志	138
◇遺伝子を確認して満足……………	八木 大介	95	◇抹殺された星の国―日高見国……………	齊藤 勁	141
◇女房の囲碁……………	宮川 政一	97	◇マイコレクション始末記……………	福井 律	144
◇漢詩と詩吟を愛して六十年……………	黒崎 昭二	100	◇私の見た十五世市村羽左衛門……………	関谷 裕彦	147
◇龍の髭考……………	上澤 準一	103	◇生涯の宝もの……………	吉葉 芳彦	150
◇晩秋の最上川……………	遠藤 俊也	105	◇一九九九年極月妄言……………	水谷 汎	152
◇師走の京都を行く……………	深尾 嵐山	108	◇現代「高札」考……………	木下 洋介	155
◇白寿、米寿、喜寿……………	中川 十郎	111	◇バスクという名のカップル……………	小島 博志	157
◇T先生……………	藤井 長治	113	◇短歌サロンの状況……………	細川 謙三	161
◇大学の授業……………	西川 永幹	116	◇ペン俳句の一年……………	平間真木子	164
◇アルジェリアでは、いま……………	石井 正紀	119	◇企業OBペンクラブのあゆみ（年表・年史）……………		169
◇英霊タクシー……………	西島 力	121	◇執筆者名簿……………		175
◇泰緬鉄道と捕虜……………	玉山 和夫	124	◇事務局から……………	西川 知世	177
◇シベリア鉄道と日本（二）……………	大塚 滋	126	表紙の絵……………	新井 進	
			カット……………	吉井米三郎	

大河の彼方、「マ・ワラ・アンナフル」へ

語学学習の限りなき旅を続けて

三 枝 亨

十月半ばになると、カラクム砂漠の朝は肌寒い。街角には、綿花摘みに動員された男たちが、背を丸めポケットに手をいれて、トラックを待っていた。このような光景を眺めながら、われわれの観光バスは、古代のシルクロードの上に作られたハイウエーをひたすら走る。

早朝に古都のヒワを出発して一時間半ほど経ったころ、古い橋に出くわし、この橋を渡り十分ほど走ると、滔々たる流れの河畔に出た。すると、アラビア語学習の女性仲間の一人が、両手を挙げて叫んだ。

「アムダリア。私の念願の大河よ、やっと来られたわ。サラセン帝国の名将、クタイバ將軍が中央アジアに遠征する途中、この河畔に立って『おお、マ・ワラ・アンナ

フル』（大河の彼方の地との意味）と叫んだのよ。今、その気持ちがよく分かるわ」と。彼女は、十三年間ほどアラビア語を習い、ようやく古典に手が届いたので、これからも続けると意欲的である。

大河、アムダリアは、東西を結ぶシルクロードを横切る。古代から、西よりはアレキサンダー大王、東よりはチンギスハーンなどの英雄が、この大河を渡る。東洋の人々は西方にあるという楽土を、西欧の人は光の灯る東方に希望を求めて、たがいにシルクロードを往来してきた。

目を瞑ると、大河の彼方から吹いてくる風が、玄奘法師やマルコポーロなど先人の囁き声のようなものを運んできて、耳元をかすめる。それは、心に願いを秘め、その願いを求めて大河を渡りゆく祈りであろうか。

先人の余慶にあずかれるよう、大河に向かい合掌した。「アラビア語が上達して、新世紀には彼岸に到達できますように」と。

アラブとの縁は、二十年ほど昔、中東に駐在した時に始まる。その折、アラブの歴史書や旅行記などを読んだ。だが、英語で書かれた書籍か、日本語訳などの間接的な資料であつたので、何となく物足りなさを覚え、何時かアラビア語を習い、内側からアラブを学びたいと思った。そして、定年後にはじめた。

アラビア語の文字は、ローマ字より三つ多い二十九字からできている。学びやすく見えるが、なかなか難しい。西欧語とは文法構成や表現様式が全く異なるので、西欧語に慣れた我々は、よく戸惑い、今なお悩まされている。英語などと比較しながら、アラビア語の特性を二―三説明しよう。

文法は「動詞、名詞そして小辞（前置詞や疑問詞など）」という三本柱からできている。これをベースにして多岐多様な文法の体系が展開する。文法は、規則正しく英語のごとき例外はない。その辺、むしろドイツ語に近い。

品詞のうちでは動詞が中核である。動詞の原形は、原則的に三子音から構成され、「三人称男性単数過去」を表す。奇妙だが、これが「語根」である。例えば「KT

L」の三子音は、「カタラ」と読み、「彼は殺した」を意味する。この語根をベースに一人称や二人称また現在形、そのほか多様に変化する。

アラビア語文には、よく主語が省略されている。それは、動詞が人称と性、数などにより変化するので、その変化形をみれば主語が分かるからである。すなわち、前記の「KTLL」は、本来「彼は殺した」であるから、主語の彼「フ」は言わなくてよい。しかも、これだけでワン・センテンスだ。

アラブ人の強い自我意識は、民族の伝統であるが、その強烈な民族性に矛盾する主語無しの没我的な表現様式の由来は、いまだよく分らない。

次に特色として「母音の変化」がある。例えば、前記の「KTLL」を「クチラ」と受動形に読めば「彼は殺された」となる。ところが、スペルは同じである。動詞の多様な活用も、母音の変化を主体に接頭辞や接尾辞がついて展開する。初心者にとり厄介なのは、同じスペルが何通りにも読まれ、各々意味を異にすることである。そこに、文法の知恵が必要である。

また、語彙は豊かで、これが苦勞の種である。なかでも、アラブ独特のものがある。例えば、遊牧民の友「駱駝」については、単語が千ほど沢山あるといわれる。さらに「友」という単語も西欧語に比べて非常に多い。砂漠で孤独な生活をする遊牧民は、話し相手の友を必要とし、かつ友人をなによりも大切にすること、これらの反映ではなからうか。

アラブ流の発想かと思われるものに、例えば「K S B II カサバ」という単語がある。「勝利する」と「儲ける」を意味する。儲けることが即人生に勝つこと、すなわち、アラブ民族の商業性を表して面目躍如たるものがある。

アラビア語は、西欧語とは異なる別世界を展開している。そこに流れているアラブ流の精神や発想を求めて、新世紀もまた旅を続けてゆきたい。

ウズベキスタンの町々にあるモスクやミナレットなどの遺跡は、ほとんどが馴染み深いサラセン文明のもので、アラブにいるような錯覚を覚えた。

サマルカンドで聖者の墓のあるモスクを訪ねたときで

ある。狭く薄暗い通路で年輩男にすれ違い、アラビア語で「サラマレコム（今日は）」と挨拶すれば、「ワレイコムサラム」と応えが返ってきた。

年輩男は墓所の鍵番であった。この聖所を訪ねると、中に入つてよいと手招く。仲間も続いた。アラブを離れた中央アジアで、異教徒でありながら、アラビア語という絆により恩恵を受けることができた。聖者の墓に賽銭「百スム（邦貨二十五円）」を供え、アラビア語の上達を祈願して旅を続けた。



ミレニアム愚考

北田 純一

この千年の特徴はネイションの発明に尽きる。だが、地球との折り合いがなくなかった。つぎの千年はナシヨナリズムの後始末に終始することになるだろう。

キリストは再び甦り、悪魔を封じこめて千年王国を築いてくれるという。だから、キリスト教徒にとって一〇〇〇年という数字は意味がある。キリスト生誕二〇〇〇年目にあたるミレニアムは、単なる暦年の切れ目ではなく、まさに祀るべき時なのである。

だが、日本人にとってミレニアムは暦の切れ目に過ぎない。しかも西暦そのものがほんとうにキリスト生誕から起算されているか疑わしいとなれば、なぜそんなに大騒ぎしなければならないのかピンとこない。

通常、日本人が口にする歳月の長さは、喜寿米寿白寿

などほぼ人生と同じ一〇〇年が限度である。それを超えると一足飛びに千代に八千代に、十万億土（極楽に至るまでに通る国の数）、千載一遇（載は十の四七乗）など、ほとんど無限大を意味する大数になってしまう。つまり、日本人には千年王国のように一〇〇〇年を単位にもの考える習慣がなかった。ミレニアム（千年紀）は慮外のことだったのである。

年表によると、西暦一〇〇〇年ごろの日本は藤原道長の最盛期、藤原氏による国家壟断のど真ん中である。しかし、この時代は同時に枕草子（一〇〇一）や源氏物語（二〇〇七）が著された良き時代でもあった。だが、かりにあの王朝絵巻の時代に生まれていたら、われわれ庶民はどんな暮らしをしていただろうか。大かたは泥田で這い回るどん百姓だったに違いないが、たとえば宮仕えしていたとしても、せいぜい貴族の牛車の綱をとり、夜な夜な主人の浮気のお供をして涎を垂らすのが関の山だったろう。食物だつて強飯（こわい）がご馳走だったのだから縦飯、横飯、中華、何でもござれの方がずっとよい。

ところが、早くも一一九二年には鎌倉幕府が成立して

いる。幕府とは戦場の幕舎、つまり前線司令部を意味する。平氏の残党という反乱軍掃討の最中だから、軍が全権を掌握し戒厳令が敷かれたわけである。驚いたことに、この戒厳令は以後七〇〇年も敷かれっぱなしになる。明治維新も、結局は徳川幕府にかわり薩長軍閥が権力を掌中にしたにすぎない。ほんとうに戒厳令が解かれ、日本人が解放されるのは、つい先ごろの敗戦のときである。

奇妙なことに、日本人は敗戦によって幸福になった。外圧のたびに豊かになった。理由は簡単、国家中心主義を捨て民主主義に衣替えしたからである。おかげで日本国民はまさに歴史はじまって以来の豊かさを享受している。

しかし、民がのさばるのは為政者にはかったるい。隙あらば昔の栄光を取り戻そうと画策する。最近、復権運動と思われる法案がいくつか議會を通過した。日の丸、君が代によって下地をつくり、国家中心主義を復活させた上で、易々と民の上に君臨しようとの悪巧みに違いない。

国家である以上、官と民が並存するのは当然だが、日

本の官僚は位が上がり上がるほど自らを臣と呼びたがる。臣とは王の家僕を意味する。王を權威に仕立て上げ、その笠のもとに民に君臨しようという魂胆だろう。民に王は不必要だが臣には王が不可欠である。民たる者、民たらんとする者は、臣たらんとする官僚の陰謀をしつかり見張っていないければ、せっかく手にした豊かさを失う結果になりかねない。

そもそも臣と民が分離したのは律令国家成立の結果である。中国伝来の律令とは臣の身分法、いわば公務員法とでもいべき公法である。ヨーロッパでも先に成立したのは公法である。一〇〇〇年前といえばヨーロッパに封建主義国家が生まれたころである。そして、これらの国が絶対主義化したころ、専制君主を抑えるため公法が誕生している。

私法が生まれたのはフランス革命以後のことで、わずか二百年の歴史しかない。私法とは世界を沸騰させた産業資本主義にうまく乗っかるため、民に自由裁量を認め、民の活躍を促すためのガイドラインである。

産業資本主義はネイションを発明した。資本主義市場

ミレニアムの回顧 Ⅱ 絵画の発展と足跡 Ⅱ

新井 進

拡大のため、人種でも言葉でも文化・宗教でもない理由で国境が定められ、多くのネイション・ステイト（近代国家）が生まれた。経済学者は個人が儲けることは結果的にネイションの利益に繋がるとブルジョアジーを焚きつけた。誰もが後先のことを考えず儲けのため無我夢中で働いた。経済成長にあらずんば死をと言わんばかりであった。先進国には膨大な富が集積された。

しかし、成長を重ねてみると、最初は無限大だと思っていた地球が実は有限の星であることに気がついた。有限の上に無限の成長はあり得ない。必ず壁にぶち当たる。栄光のミレニアムは地球の限界に突き当たった。果たしてキリストは現れるのか。キリストが封じ込めてくれる悪魔とは何を指すのか。そして、肝心の千年王国は実現できるのか。これは他人事ではない、全地球人の運命にかかわる重大問題なのである。

（1）近代絵画の歩み

西洋美術の代表的な様式は、ご承知のようにルネッサンスである。十五世紀から十六世紀にかけて「自然にかえれ」「古代にかえれ」の回顧主義が澎湃として起きてきた。そしてこの時期、遠近法が確立され、理性に富んだ空間を表現する。当時の代表的作家はレオナルド、ミケランジェロ、ラファエロである。

十七世紀に入ると、その反動としてバロック主義が勃興する。具体的な特徴として、作画的ポーズ、劇的な明暗、不自然な人体描写、過剰な装飾が生まれる。それは従来の宗教的な絵画の否定であり、市民的絵画の隆盛をもたらした。レンブラント、リューベンス、グレコらが代表的な画家である。

十八世紀初頭にかけて、新たなロ可可芸術様式に移行

する。その語源は建築装飾用語からのもので、人工の洞窟を飾るロココ（草花の一種）である。

十九世紀に入ると、前世紀後半に起きた産業革命の影響を受けて多くの主義、派が発生する。即ち「新古典派」「ロマン」「写実」「アールヌーボー」「印象」である。

新古典派は、バロックやロココの装飾過剰な宮廷趣味に対する反動で、英雄的なりアリズムを表現した。

ロマン派は、前期新古典派の生命感のない「描かれた彫刻」からの脱出を図る情熱と異国情緒を主眼とする。

写実主義は、新古典派とロマン派に共通する芝居がかった空想からの脱却を図ろうとする様式である。後世の印象派とともに、日本では馴染みの画風である。

象徴主義は、原典を示されない、言葉に翻訳できない純粹な視覚的な表現を目指す。

アールヌーボーは、工業社会のための新しい装飾美術様式を目指し、日本の浮世絵や工芸品が影響を与えたといわれる。

印象派は正式には、第一回「印象派」展が一八七四年にパリで開催されたことに始まる。すでに写真が発明さ

れており、この展覧会が写真対絵画の対決の場であった。単なる写実という意味において写真の新技術にその地位を譲らざるを得なかった絵画が、人間の手による画面であるゆえに、もっている優位性を強調することにより、写真では得られない魅力を持つことが証明された。その後、尖鋭的な画家が写真という新技術から得られる成果を取り入れ、その模倣がかえって絵画の造形的な独自性を自覚させた。もっと分かりやすく言えば、自然のなかで過ぎ行く束の間の印象をとらえて、視覚者に深い感動を与えようとする表現である。そして数多くの歴史的な風景画が残された。代表的な画家は、日本でも馴染みのターナー、モネ、ピサロ、シスレー、コロ、ルノワール、セザンヌである。

（2）今二十世紀の動き

今世紀の動きは前十九世紀の多種の主義分派を統合して、次の三主流を形成する。「表現」「抽象」「幻想」といわれる。

表現主義は、世界に対する、また自分自身に対する感情的な態度を重要視し、自己を最大限に表現しようとする

る主義である。従来の規範とする作品を離れ、強烈な色彩と大胆なデフォルマシオンを特徴として、急進的な様式を表現しようとする。この傾向が発表されたのは、一九〇五年のパリ展覧会といわれる。「まるでフォーブ（野獣）だ」と、保守的な評論家は非難した。この表現方法を、別名フォービズムとも呼ぶ。代表的作家はマチス、ルオー、カンジンスキーである。

抽象主義は、構造に重点をおき、線、形、空間、色彩を構成する必要最小限の要素にまで単純化しようとする様式である。ピカソ、ブラックらに代表される。

幻想主義はその名の通り、外界を観察するより想像力という「心の眼」で視ることに重点をおくもので、シャガール、キリコ、ジュシャン、ダリらが著名である。

（3）日本画壇の流れと動き

日本には伝統的な古来の写実主義に徹した、線と色彩の淡泊を重んじた日本画が定着している。明治政府が確立されると、西欧文明を積極的に取り入れることになり、油絵が紹介された。若い意欲的な画家は欧州、特にフランスに留学していった。浅井 忠、黒田清輝、藤島武二、

藤田嗣治、佐伯祐三らは、西欧正統派の画風を学び、帰国後はいずれも東京美術学校（現・東京芸大）の教授となり、後進の育成に尽力した（佐伯は現地で夭折）。

前述の先輩組を第一世代と呼ぶと、第二世代は安井曾太郎、青木 繁、梅原龍三郎、須田国太郎らで、日本の独特の風土を背景に、西欧的感觉の融合の上に立つて新しい分野を切り開いていった。現代は第三世代と呼べよう。

戦後、一時期を経て日本美術界も復興のきざしをみせるが、西欧美術の一つの流れをくむシュールレアリズムが一世を風靡したことがある。しかし、最近では具象画が大衆の注目を引いているようだ。

今後の二十一世紀を展望する時、「具象」「抽象」に大別されるのではなからうか。日本画に裏打ちされた具象画は永久に日本人の共感を呼ぶであろう。しかし、具象に飽き足らない観客には抽象画が提供されるであろう。最近、CGが新しいメディアとして進出してきた。前述の写真のインパクトでないにしても、筆で表現できない空想的な空間や色彩を表出することができる。二十一世

紀には、絵画とCGの融合による新しい分野の美術作品が生まれるかも知れない。

二十世紀の光と闇

本田 克夫

ミレニアムといっても、キリスト教徒でない私は別段、心を躍らせることもない。しかし、西暦二〇〇〇年は二十世紀の区切りでもある。今世紀の四分の三を生きてきた私にとっては、これがどんな時代だったのか、その光と闇について考えてみるよい機会だろう。

私が西暦二〇〇〇年という言葉を知ったのは小学校四年のときである。先生に教わったか、本で読んだかだろう。「なんとか二〇〇〇年まで生きたいものだ」と子供心に願った。当時は九歳だから、まだ六十四年も先だ。戦前は平均寿命が短かったから、半ば無理な気もしたが、めざす二〇〇〇年は科学の発達したすばらしい世界のはずであった。

毎月の『少年倶楽部』には、空想科学の世界が描かれていた。林立する高層ビル群の、どてつ腹を貫通して高速鉄道のレールが伸び、ビルの屋上には小型機がぶんぶん飛び回る。人造人間（ロボット）がある日突然、人間に反逆して目から殺人光線を放ち襲いかかってきたり、マッチ箱大の原子爆弾一つで戦艦一隻が簡単に沈んでしまふ。少年たちは、わくわくしながら、そんな未来世界を夢想していた。

その二〇〇〇年が、あつという間にやってきた。あのころ絵空事でしかなかった文明の道具が、かなり現実となつてわれわれの生活に深く関わっている。飛行機、新幹線、マイカーなどによって行動範囲が大きく広がり、コンピューターの発達で、居ながらにして世界中の情報を集めることも可能になった。このように、人間生活を豊かにしてくれた科学だが、なかには原爆のように人類絶滅の凶器となりかねない鬼子も混じった。

医学の進歩についても同様のことがいえる。私がホームドクターから毎月もらっている血圧降下剤は、五十年前にはなかったものだ。戦時中の米大統領、ルーズベル

トは高血圧に苦しみ、ヤルタ会談のときには最高三〇〇、最低一七〇まで上昇して、ふらふらの状態だったという。しかし、降下剤はまだ開発されておらず、結局これが彼の命取りになった。

今日、血圧降下剤は、名もなき庶民でも簡単に飲むことができるし、ペニシリンや内視鏡などの開発がいかに人々の命を救ってきたことか。科学文明の恩恵は計り知れないものがある。科学は、二十世紀の光の側面であつた。

しかし半面、ひどい戦乱の世紀でもあつた。長い戦争は過去にもあつたが、今世紀ほど世界中が血まみれになつた時代は、かつてなかった。なぜ科学が発達し、理性的なはずの今世紀に、世界中で、のべつ戦争が繰り返され、大量虐殺がおこなわれたのか。後世の人々は歴史を読んで、なんとひどい時代だったことよ、とあきれるに違いない。

世界大戦が二度も起きた。日本だけでも、日露戦争、第一次大戦に続くシベリア出兵、日中十五年戦争、太平洋戦争と休む暇なし。戦後の世界でも朝鮮、コンゴ、ベ

トナム、カンボジア、アフガン、イラン・イラク、湾岸での戦争や内戦、近くはルワンダ部族紛争、旧ユーゴの民族浄化、東チモール大量殺戮など、世界にはいまでも流血が絶えない。

いつの時代も戦いは凄惨である。しかし、十九世紀までの戦争は、プロフェッショナルな軍人同士の間略と武勇の争いであり、降参者は礼儀をもって待遇された。騎士道（武士道）がベースにあった。今世紀初頭の水師營の会見では、まだ武士道がみられたし、第一次大戦の戦場でも騎士道の気風が残っていた。

ところが、潜水艦無差別攻撃や毒ガスの登場によって、戦いは仁義なきものになった。さらに第二次大戦になると、国民ぐるみの国家総力戦となり、非武装の民衆まで巻き込むようになった。そのうえ、ヒロシマ、ナガサキ、アウシュビッツ、中国大陸での日本兵の暴行など、神を恐れぬ非人道行為が平然と行われるようになった。これこそ、二十世紀のもっとも恥ずべき暗黒面だろう。

どうして、戦争がこんなに残酷になったのか。私はこの原因として、十九世紀半ばから誕生した民族国家の性

格が今世紀の戦争に大きく影響していると思っている。

中世ヨーロッパの戦いは、貴族同士が傭兵を使ってやるもので、民衆にとってはどちらの貴族が勝とうが関係なかった。貴族同士だから、戦いに騎士道のルールがあったのだ。しかし、中世の領主的国家から脱却した民族国家は世界中に広がり、群雄割拠の戦国時代さながら、蜂の巣をつついたようになってしまった。卑弥呼が統一するまで百余カ国に分かれて争っていた、あの邪馬台国時代のように。

民族国家は、それぞれ垣を高くして軍備を固め、民衆も兵士として組み込まれた。それにつれて民衆の声は高くなり、為政者も世論の動向を無視できなくなった。

二十世紀の戦争をみると、世論が興奮して暴走し、これに煽られた為政者がブレーキをかけられないまま戦争に突っ走る場面がしばしばみられた。また情報宣伝によって敵への憎悪が増幅され、人々の理性が麻痺し、残虐な行為も平気で犯しはじめるようになった。二十世紀の戦争の狂気である。

幸いなことに、戦後は国連はじめEUやASEANな

どが緩いながらも国家間の連携を保ち、民族国家の上に位置するグローバルな権力が出来上がりつつある。国同士がお互いの国内問題に口をはさむだけでなく、コソボ空爆や東チモールへの軍事派遣、国際法廷で人道の罪を糾弾する動きが出るなど、民族国家の主権は次第に狭まりつつある。

来る世紀には、こうしたうねりが

United States of World（世界連邦）へと高まっていくに違いない。二十世紀の最後になって、ようやくその曙光が射し始めているということか。少年時代に夢見た未来世界、次の世紀にはどう展開するのだろうか。



ミレニアムに思う

今川 確郎

ミレニアムとは、カトリック教会の百年ごとの聖年がたまたま西暦二千年となったので、キリスト教以外の人々にとっても、歴史的節目として注目、重視されている。

カトリック教会の第一回聖年は、千三百年に教皇ボニファチオ八世によって執行された。千四百年にボニファチオ九世がローマのサン・ピエトロ寺院正面にある「聖なる扉」を開いて以来、百年ごとに教皇による開扉式が行われることが慣例となった由。

今年は十二月二十四日、聖ペトロ大聖堂でのクリスマス・イブ深夜ミサの際、現教皇ヨハネ・パウロ二世により開扉式が行われるという。キリスト生誕二千の聖年ゆえ、明るい年であることを願っているが、今後百年間に世界はどう変わるので

あろうか。

(1) 大きく変化するのはユーロが誕生した欧州だろう。過去何世紀もの間、欧州各国は流血、残酷な争いを繰り返し、二十世紀には二度の世界大戦を経験した。「これ以上戦争をしたら欧州は破滅する」と各国が痛感し、欧州統合にこそ将来があると考えようになった。七十年代にブレトン・ウッズ体制が崩れ、また各国間の資本移動が自由になるにつれ、為替相場の不安定は不可避免となった。その結果、欧州各国は単一通貨の必要性を感じるようになった。

一九九九年の初めに欧州中央銀行が設立され、十一カ国が欧州通貨単位のユーロに加入したが、現在は非現金取引のみに使用されている。現金の流通は二〇〇二年の年初から始まり、各国通貨は同年六月末までに回収され、七月一日からはユーロが唯一の通貨となる。

単一通貨圏内では資本、労働が自由に移動するはずだが言語、歴史、伝統、習慣が異なる欧州各

国間では、労働の移動性は低いと予想されている。

将来、EUの参加国は二十六カ国、総人口四億八千万人に拡大する方向にあるので、米国以上に強大な政治、経済圏が実現し、歴史と文化の豊かな地域となるであろう。

二十世紀前半までは国際基軸通貨だった英ポンドに替わり、第二次大戦後は米ドルがその座を占めて支配的となった。しかし、来世紀は、早い時期にユーロが米ドルに匹敵する国際通貨となるであろう。

(2) 米国は豊かな資源と変化の多い広大な土地に恵まれ、言葉は一つ(米語)の国家である。更に、二度の世界大戦でも、本国は一度も戦禍を被らなかった。二十世紀後半、特にソ連邦崩壊後は、軍事、政治、経済の面で世界のリーダー国となったのも当然だ。

半面、伝統、歴史が浅いので「文明度は世界一高いが、固有の文化に乏しい」とまで言われるのも止むを得ない。

白人と(大部分が低階層の)黒人が大多数を占めていた米国は、第二次大戦後、アジア各地域からの東洋人と、メキシコを主とする中南米諸国からの移住者が急増し、人種の坩堝と化した。特にヒスパニア系の増大は著しく、二〇二〇年代には総人口の半数以上に達するとも予測されている。

一方、コンピュータ産業の発祥地シリコンバレーでは、インドを含めた東洋系の先端技術者が過半数を占めている由。今後ともベンチャー企業における多人種化は一層進むことであろう。

(3) 他地域で最も望まれることは宗教間の共存である。旧ソ連内の中小共和国間の争い、旧ユーゴスラビア国内の民族紛争は、ロシア正教、イスラム教、それぞれの唯我独尊の信仰が根源となっている。中東、特にイスラエルでは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教が相互に対立して多くの人命が失われた。これら宗教の起源は同一で、以前は共存していたとのことだが、互いに「エルサレムは神から授かった我が聖地」として、血で

血を争う排他主義に走っている。この争いも、米国、フィンランド、穏健な中東諸国が仲介して和平解決に努めているので、いずれは終結して宗教間の共存が実現するだろう。

(4) アジアでは中国がWTOに加盟するので、ASEANの一層の強化が期待される。同一民族たる南北朝鮮の統一もいずれは実現し、アジア全域での緊張緩和、平和の実現も遠くはなからう。

日本は戦後半世紀続いた米国一辺倒から脱却し、アジア各国は勿論のこと、統一化される欧州との各方面にわたる関係強化を一層進めるべきである。

(5) 世界的規模においては、人類滅亡に導く核兵器の使用、製造の禁止、地球環境汚染に直結する排気ガス、廃棄物の処理、抑制が新世紀早々にも実現することが強く望まれる。

日常のビジネス、一般庶民に直接関連する問題としては、度量衡と温度の単位がある。英米両国及びその旧植民地では、ヤード、ポンド、ガロン

を固守している。半面いまだに英国女王を元首とする豪州では、二十年以上前にメートル法と摂氏方式に変更された。

カナダは現在のところ両者を併用しているが、いずれは豪州同様となるであろう。英米両国でも改革論者が多くなっているようだ。特に英国はEU諸国との関係で早い時期に変更されるであろう。道路交通の面では、英国及びその旧植民地と、日本のみが左側通行である。それほど急ぐ問題ではないが、あらゆる面で単一化が進む来世紀には、右側に統一されるであろう。

倫理はいずこへ

岡 政 昭

ミレニアムばやりである。多分に商業主義の臭いもあるが、キリスト教徒にとっては千年に一度のお祭りであ

る。宗教的要素を除いても、百年単位の世紀を二十代重ねて二十世紀の末年に新千年紀に入り、一年後に二十一世紀を迎えるという人類史上の大きな節目である。

大方の日本人にとって、クリスマスの聖歌と街飾り、正月の初詣では歳時記の一つであり、除夜の鐘に來し方、行く末を思い、新年の抱負を語るならいは、今年とても同じであろう。しかし、二〇〇〇年には、世界觀といったものに、おのずから格別の思いが湧くのではないか。

「われ思う、ゆえにわれ在り」か、「われ在り、ゆえにわれ思う」か。これまでに明らかにされてきた地球と生命の起源、生物と人類の進化、社会と文化の発展の中で、時空を超えて考えることのできる自分の存在——今ここに生きている大きな偶然に感動する。

なお膨張を続ける宇宙に、地球が太陽系の一惑星として出現したのが四十六億年前、地殻や海洋の変動により原始生物が光合成を営み始めたのが三十五億年前、最古の人類とされる猿人が四百万年前、現世の新人が誕生したのが四万年前ぐらいからという。

先史から古代文明の成立へ、そしてグレゴリ暦という一世紀に始まったキリスト教は、伝道によりローマ帝国に広まり、ついに国教の地位を獲得した。日本が後漢書に倭と呼ばれ、弥生時代から邪馬台国を経て大和政権の成立をみたころである。

十一世紀に入り、封建時代の西ヨーロッパでイスラム対キリスト教勢力の抗争——十字軍があった。日本では中国、朝鮮を経て仏教が伝来、朝廷の庇護を得て国教化、主仏從神の神仏習合が起こった。信仰上の彼岸的な天国と浄土、さらに終末觀と末法思想が対比されよう。

中世、すでに東西文化の交流があった。ルネサンスと宗教改革による教会からの人間解放後、開花した科学と哲学は自然法思想と啓蒙主義を生み、市民と産業の革命は近代文明と現代社会を作った。民主政治と資本主義、量子と遺伝子論、情報技術と市場經濟の發展が著しい。

人類は二十世紀において、主權国家による二度の世界大戰を経験し、平和の探究と生態系・環境の保全を二十

一世紀への課題とした。生きとし生けるもの個体の維持と種族の繁栄は、資源有限のなかで自然との共存、他者との共生のうえではじめて可能との認識を共有した。

発展段階の格差はさておき、産業社会の高度近代化は脱産業、脱物質主義と価値観の変化をもたらした。知識社会への移行とともに、経済成長の効率から環境保護の厚生（企業のコスト内生化）へ、官僚組織型集団規範から自己実現型個人自律の管理へ変身がみられつつある。

宗教への需要も、来世から現世へと世俗化の方向が強まり、教権的なものから自己の精神性を高めるものへと多元化してきた。無常観にたち、万人の救済を願う仏教と、隣人愛を説き、神の国は信ずる人の心にあるとするキリスト教の相互交流が今日の話題を呼んでいる。

観自在は、我執を捨てて自由（輪廻からの解脱）を得んとする仏教的実践である。直線的に現在を「すでに」始まっているが「いまだ」完成されていない緊張関係とし「永遠の今」ともみるキリスト教の神学に通底して、「随所に主」との倫理感を醸成し、自助の精神を貫く。

脳科学では脳幹が命の座であり、大脳辺縁系の中間層

に心の座、皮質に知能と行動の座があるという。平均寿命はローマ時代の二十歳に対し、現在は八十歳に近い。長寿化を成熟社会の元気とするため、脳の統御機能たる心と知能の座・細胞を善玉代謝する「医」を望みたい。

一方、コンピューターの発明で、モデルの演算が楽になった。とりわけ因果的法則性が支配する自然科学、たとえばエネルギー・環境の分野では、温暖化、需給関係など各種要因の統合による全体像が定量的に把握され、経年変化の未来像がかなりの確度をもって予知される。

社会、政策科学の分野でも、経済などマクロ、ミクロの予測が盛んだ。ただし仮説の有効性については、足下の日本の景気対策一つをとっても流動性の罫など、疑問が多い。ゆらぎでの選択が人間の主体性（心）にかかるとき、「未知」に対する一義的な予測は不可能と思われる。

しかしながら、二十一世紀以降を展望したSF物が千年王国論と同様、マスメディアを賑わしている。宇宙移民や異星人の来襲もスターウォーズよろしく取り上げら

れ、キリスト再臨もノストラダムスとないまぜに語られる。夢物語がアニメとなり、仮想現実が既視観となる。

これに対し、コスモ空間と称される宇宙での衛星都市建設、ナノ空間ともいうべき極微での遺伝子操作などを対象に、従来の国家基準、人類中心の規範を越えた行為者自身の個人、関係集団の責任をもとめるエコエティカ（生態倫理学）が先駆的に提唱されて共感を呼ぶ。

さらに思いが続く。人間の性たる自己顕示の欲望や嫉妬心（脳幹の命の座に近い本能的機能？）は容易に変えられないし、科学技術は遺伝子操作も含め、環境、道具に過ぎない。ガン化した性による道具誤用で、環境を破壊する日本発の人災は何としても回避しなければと。



再考すべき現場教育

森田 茂

昨年は多くの深刻な事故が起きた。東海村民を巻き込んだ原子力臨界事故、新幹線のトンネルコンクリートの相次ぐ落下事故やH2ロケットの打ち上げ失敗などは特に衝撃的とも言える。

このように「本来あつてはならないこと」が発生するとき、偶発的なものとして片付けるわけにはいかない。「あつてはならないこと」だから「あり得るはずがない」と考えるとすれば、この種のトラブルは絶えることがないだろう。

一つのアクシデント（事故）の背後にはたくさんのインシデント（軽微な事故）があり、そのまた背景には更に多くのイレギュラリティ（異常）なことが潜んでいるとの定説があるが、往々にして直接的な問題だけの解決策に終わってしまうケースが多いようだ。仕事のプロジェクトは大きければ大きいほどマネジメントと現場の技

術の重要性が増すものである。したがって、それに関連する潜在的要素や環境条件を考察する総合的な視点が欠けてはならない。

日本の最近の現状を考えると、グローバル化に伴い、ものづくりの多くの企業が人件費の安い外国に移っていく上に、長引く経済不況の中で企業の収益が低下し雇用不安が深刻になっている。

言うまでもなく、素材資源に乏しい日本が生きていくためには、来世紀も技術立国の道しか残されていない。

ところで、毎年開催されている技能五輪で、すばらしい成果を上げてきた日本の昨年のメダル獲得数は、台湾、韓国、スイスに及ばなかった。日本の「ものづくりは世界一」の言葉がいまや死語になりつつあるが、それは現場教育が疎かになってきた証左ではないかと危惧している。

事故などの背後にある多様な兆候を見つめて、一つひとつ対処する基本動作こそ、ものづくりの現場では尊重

されなければならない。

メーカーで、それらがきちんとできる人を育てるには、実地教育が不可欠である。技能や安全設計は、ものづくりの現場でしか育たないからである。

大企業は今でこそ「小さな本社」を試みつつあるが、従来、「現場に飛ばされる」という意識が強く働き、優秀な人材は現場を敬遠する傾向があまりはしなかっただろう。これからのメーカーは、現場あつての企業でないと生き残るのが難しくなるだろう。

新しいミレニウムを迎え、日本が国際社会で重要な役割を果たし続けるためには、ものづくりの現場教育の基本を徹底させ、実務に基づいた技術立国を再構築すべきであると強く主張したい。

私の二十世紀―年寄りのたわごと

野村 嘉彦

私は一九一七年九月二日、南大阪の小さな貿易会社の社長の長男に生まれた。時は第一次世界大戦の最中で、日本はいわば火事場泥棒のように、貿易といっても何でも売れて儲かった。しかし、間もなく大戦の終了と共にすさまじい不況が来た。

父の会社はたちまち倒産した。そしてある大雪の朝、四歳の私は両親と共に家を放り出された悲しい思い出がある。

それから八十有余年生きながらえて来た。あと数百日で二十一世紀がやって来る。長いようで短かった過去を振り返り、今一九〇〇年代を終わるに当たり、その思い出のうちの強烈なものを二、三拾ってみよう。

一九一七年はロシア革命の年である。ソビエト社会主義共和国が生まれた。それ以来マルクス・レーニン主義が世界に横行した。

更に私の生まれた九月二日はベトナム民主共和国（現在のベトナム社会主義共和国）誕生の日である。一九四五年九月二日にホー・チ・ミンはベトナムの独立宣言をハノイで行った。ベトナム解放、独立は日本の敗戦がきっかけであった。

私の半生をかけたアジア社会主義各国との経済交流五十年、特にベトナムとの交遊四十年、北朝鮮との交流五十年も、何かの因縁によるものかもしれない。

（一）三井物産入社

当時の大阪商科大学では、軍国主義の台頭で京都帝大を追われた優秀な学者たちを、河田学長が喜んで引き取った。我々は良い講義を聴くことができた。その基調はマルクス主義の学習にあった。財閥の発展は国家経済にとり問題があると理解していた。その自分が、あえて三井物産を選んだのは、つぎのような理由からである。まず幼児のころの悲しい体験により、いつか大きな資本で貿易をやりたい、三井物産はつぶれそうにない、学閥が無い、帝大と三商大出身は他大学卒より初任給が高いことなどが私の自尊心をくすぐった。

入社試験でわが理想を書く欄で「すべての働くものが
正当な対価を得て幸福で平和な生活を営むことが出来る
社会の実現」と書いたのが試験官の目に留まり、「君は
共產主義者か」と質問されて、「違います。今ドイツの
第一流の学者ゴットルの経済理論です」と答えたが、試
験官ご本人はゴットルを知らなかった模様で、「要する
に共產主義では無いのだな」との一言でかろうじて合
格したのである。

三井物産は意外に自由奔放で、若造に大きな仕事を任
せてくれた。同業、例えば三菱商事では私と同様な仕事
を支店長代理程度の方が担当していた。もともと相次ぐ
召集で若手が少なかったのが主原因だったとも思われ
る。

(2) 日本の敗戦

昭和二十年の春先から、会社から大本営参謀部へ佐官
待遇で出向を命ぜられていたが、八月十五日、急遽本社
に来るように言い渡されて出社した。そして、三井の本
館の一隅で昭和天皇の玉音放送を聞いた。涙がとめども
なく流れ落ちてひたすら悲しいというより情けなかつ

た。

(3) 海軍への出向

その翌日、部長から、今度は海軍省大臣官房への出向
を命じられた。勿論、陸軍と同じく佐官待遇で、大臣官
房には高松宮はじめワシントン帰りの若い将校たちがい
た。主な仕事は、やがて降伏調印のために来日する米艦
ミズリーからの来電の処理であった。

そのうちに横須賀の米軍捕虜収容所へのつらい訪問に
行かされた。この記録はいずれ文を改めて書くことにす
る。ほろ苦いというより、煮え湯を飲まされた敗戦国民
の悲哀を味わった。

(4) 三井物産の解体

昭和二十二年七月三日、青天のへきれきのような覚書
が総司令部から出された。われわれは敗戦後、被占領国
民としてさまざまな制限を甘受してきた。だが、以下の
内容は、過去において、どの敗戦国の一民間会社と社員
が受けたことのないほど過酷極まるものであった。

A、三井物産の役員ないし部店長以上の役職にあったも
のは二人以上が一つの会社に所属してはならない。

B、三井物産の社員であったものは百人を超えて一つの会社を設立したり、一つの会社に雇用されてはいけない。

C、三井物産の建物は新会社で使用してはいけない。

また、いかなる会社も三井物産の名称を使ってはならない。

つぶれない会社へ入社した自分がこんな目に遭うのは、やはり自説としている『うん、どん、こん』のうち「うん」がなかったからだと感じた。やがて東西対立で米国が、日本を潰すより防波堤にする政策に転向したので、いつの間にか三井物産は強力な存在となり、日本経済は発展し、日本国民は豊かになった。

今、世界は巨大な米国の一人相撲にかき回されている。日本もその余慶を戴いているようだ。目の黒いうちは、せめてこのままのぬるま湯に浸っていたい。

(一九九九年十二月二十三日)

リーダー待望

岩崎 洋一郎

西暦二〇〇〇年は、区切りの年である。私自身にとって、長年住みなれた都心の一軒家の生活を切り替えて、ケア付きマンションで迎える初めての正月である。

もう一つ、青春を送った旧制成蹊高校が創立されて七十五年の年であり、そして旧制高校が廃止されてから満五十年の年でもある。

占領軍の勸奨で、教育制度がアメリカ型になり、第二次大戦前に比べて高等教育を受ける人口が飛躍的に増大したのは新教育制度の長所である。これが日本経済飛躍の原動力の一つになったことを認めるのにやぶさかでない。しかし、追いつけ・追い越せの足並みそろえて先進国の後追いモードが行き詰まり、自主創成型に時代が変わった現在、これでよいのかの疑問が生じる。そこで、これまでと本質的に異なった道筋への模索が急務と取り沙汰されている。

「温故知新」なる四文字熟語ではないが、先人の智慧を拝借するのも悪くはないか。旧制高校は、本来中学と高校の一貫教育を目指し、卒業生のほとんど全員が一流の国立大学および私立大学に進学した。その代わり、高校の入学は、全国の俊英が集まる非常に狭き門であった。換言すれば、旧制の学制はあえてエリートをつくり、かつ鍛える場であった。

鈴木孝夫氏は、その著書「日本人はなぜ英語ができないか」で、今の日本の英語教育が間違っていると指摘している。要は、一般の人はそんなに英語を話し、聞き取ることに精力を注ぐ必要はない。ただし、一部のエリートは、ビジネスや政治の世界で列国のリーダーと互角に渡り合えるだけの高い英語力を身につけるべきである、とする。そのためのエリートへの英語学習は従来の表面的な低いレベルでなく、もっと高い目標を設定すべきである、とする。自分の考えや主張を相手に的確に伝え、かつ相違点については徹底的に議論して論破できるコミュニケーション技術を習得すべきであると論じる。勿論、話すコンテンツが、粗末で論理的でないと意味もない。

手段と内容は車の両輪である。

ちなみに、あの英語嫌いといえられるフランスのエリートたち、即ちエコール・ポリテクニク等の卒業生は皆、英語を自由に操る。聞いてみると、英語は世界の国際語であるから、我々エリートは身につけるのが当然と嘯いている。フランス語を大事にすることは、別の問題と割り切っている。中国でも、出会った政府の要人は、英語がネイティブのように上手であった。小学校の成績が良かった彼は、選ばれて中学時代から英語の教育を徹底的に仕込まれた。今や、国を代表して政策を決め、世界を舞台に列強のつわものどもを相手に国の進むべき方向をきめている。

日本を活性化するには、日本を代表するリーダーを養成し、サポートすることが急務であると信ずる。こういうリーダーの出現を、袖手傍観して、ただひたすらに待てばよいのであろうか。私の考えでは、やはり積極的に育成すべきであらう。そのためには、教育制度の見直しが必須である。旧制高校を、そのまま復活させるのが最善とは思わないが、エリートの創造には、現制度より

は適していると思う。七年間の一貫教育。男子校にして親元を離れて寮生活による、お互いに切磋琢磨する生活。かなり高度な授業内容と競争。半面、各自が自分の興味を持つている分野への傾倒を許す雰囲気。選ばれたものとしてのプライド。何しろ、一緒にいる時間が長いので、裸の人格と能力が仲間の目にさらされる。ごまかしが全く効かない。

ローマ帝国の歴史を研究している塩野七生女史は、日経ビジネス誌(平成十二年一月三日号)で、単科ごとの点数の高さを競う今の学制を批判し、「昔の旧制高校でいわゆるリベラル・アーツを学んだ人たちが戦後の復興をリードしたと述べ、「さまざまのことを関連して学ぶこと」の必要性を説いている。不測の事態に対処できるのが、リーダーの必須条件とする。それができないのが今の日本の指導者であると憂慮し、その原因は間違った尺度で優劣を決める現在の学校制度であると嘆く。

今、法曹界では、米国に倣ってロースクールを設置する方向に動いている。それはそれで結構。しかし、青春期の人格形成期に力をいれることの方が専門知識を磨く

よりも肝要ではないか。人間はすべての面で同じであるわけがない。そんな議論こそ、個人の人格を無視した話と思う。日本という国は資源は無いし、唯一あるのは人間である。その中でリーダーにふさわしい金の卵を大きく育てて、激しい競争社会を生き延びることを真剣に考えるべきであろう。

二十一世紀の入り口に立っている今日、次の一千年はみえてこない。いや、百年先でさえも想像を絶する。識者によれば、人間の体も具合の悪い個所は、自動車の部品を取り替えるように、簡単に取り外して付け替えられるようになる。老化も、単に止めるだけでなく、かえって若返らせるようになる日も近いらしい。不治の病の癌や、エイズの特効薬の開発も進んでいるとか。大いに結構であるが、それらすべては、しょせん人間の作り出した産物である。物質文明が発達すればするほど、それをコントロールする人間が重要となろう。また、いずれは、国境なるものが消えるとしても、それまでは、日本は二大強国、米国と中国の狭間(はざま)にあつて生き延びなければならない。日本国民の幸せのために、国際舞台で大いに辣(さく)

腕を振るう人材を養成する必要があると信じ、かつそのためには、現在の教育制度にメスを入れることが急務と考えている。その目的を実現するための手段の一つとして、旧制高校の制度の見直しを提言したい。

老人とネット社会

高橋 孝蔵

ミレニアムから二十一世紀初頭にかけてのわが国のキーワードは、間違いなく「IT（情報技術）革命」と「増大する老人」であると思われる。IT革命がどう進行していくのか。IT革命が作り出す新しい社会―ネット社会―に老人、即ち高齢者がどう適応し、組み込まれていくかが大きな問題となり、課題になるう。

『文明の衝突』の著者である米ハーバード大ハンチントン教授は「日本が高齢化や人口の減少が原因で、世界における役割や影響力は低下するだろう」と述べている。

こうした懸念は彼一人だけのものではない。高齢化により、企業や個人の活力は衰え、経済成長率は鈍化する。一方では増大する高齢者の社会保障費を、減少する若年者の経済力によって支えることは困難であると日本の将来を悲観的に考える専門家は少なくない。

果たしてそうなのであるうか。高齢者をバランスよくとり組んだ政治、経済、社会の新しい活力のある仕組みを構築できないのだろうか。

国連では高齢者を六十五歳以上と定めている。さて、わが国の六十五歳以上の高齢者人口は二千五十一万人（一九九八年十月現在、総務庁）、総人口に占める割合は一六・二％（高齢化率）となる。今後も高齢化率は急ピッチに上昇を続け、二〇一五年には国民の四人に一人以上が六十五歳以上という超高齢社会が到来すると予測されている。日本の高齢化スピードは他に例がない。二〇〇〇年には日本は世界一の高齢国となり、その後、諸外国を引き離していく。因みに二〇〇五年の日本の高齢化率は一九・六％、これに対し、ドイツの一七・八％が一

番近く、アメリカに至っては二・四％に過ぎない。久しぶりに聞く「世界一」の声だが、このケースでは、世界に冠たる老人国家日本という話だ。年齢を下げ、六十歳で計算すれば、国民の十人に二人以上は既に六十歳以上である。五十歳以上ともなれば成人人口の半分を占める。恐ろしいほどの頭でっかちの人口構造である。

高齢社会は高福祉・高負担である。高齢社会対策関係予算（高齢者雇用助成金など。九八年度）は九兆九百三十二億円。高齢者関係給付費（年金・老人保健給付など。九六年度）は四十三兆七百八十五億円である。そして、経費は高齢者の増加と共に着実に増えていく。

これら老人向けの「社会保障費」は国民が元気に長生きして暮らすために必要なコストだが、誰が負担できるのだろうか。巷で見かける茶髪・顔黒・厚底靴のレディ一族にはとてもお願いできるものではない。年金を積み立てても、十分な見返りは期待できないと諦め始めた若きサラリーマン族にも無理かも知れない。そこで、移民を迎えようという論議がでてくるのも不思議ではない。この辺の事情は、わが国に続々上陸して来る外資系情報

産業の邦人社長の話を聞けばよく分かる。日本では四年間遊びほうけた大卒が多く、たとえ一流大学であっても雇用できるものではない、と彼らは悲憤慷慨する。目的意識を持ち自分の専門があり、やる気がある若者といえど、残念ながら韓国、インド、フィリピン等の外国人だという。例えば、従業員百名未満でも社員の国籍は十カ国になる。高成長を期待できる先端産業では移民は実質的に始まっている。だが、大量移民ともなると話は別だ。わが国にはそういう文化もなければ、国情でもない。

一方、わが国の高齢者の就業意欲は強い。統計数理研究所によれば、毎回の調査で、「一生暮らせるだけのお金を貯えても、ずっと働く」という回答が常時六―七割を占める。働くのは経済的理由ではなく、年をとっても引き続き働きたいのが日本人。また、経団連も遂に「高齢者を活用しないと日本の労働構造は持たない」と認め始めた。だからといって、いよいよ老人の出番と考えるのは早合点。まず、高齢者が入っていけるような諸施策が必要と思われる。

年齢差別のないエイジレスな雇用形態、年功的な賃金

でなく成果に対する報酬制度、高齢者の希望する都合のよい時間に勤務できる仕組みなどである。昨春の電気通信審議会中間報告では高齢者を活用する最も良い方法はテレワーク（情報通信機器を使い、遠く離れたところで仕事をする）であると答申している。当然、高齢者に情報リテラシー（利用能力）を身につけさせる教育を生涯教育の一環として組み入れることを施策の中に入れねばならない。

それでもキーボードは真つ平ご免という高齢者がいるに違いない。音声認識を含む、高齢者にやさしいインターフェース、端末を早急に開発する必要がある。開発者には大きな見返りがあるはずだ。世界のトップを走る日本の高齢者市場で開発に成功すれば、間違いなく世界市場を席巻出来る。いずれにしろ我々老人の出番が増えることは確実だろう。

更に、情報リテラシーは私生活の幅を格段に広げる。コミュニティ作りにはインターネットが最適の手段であり、コミュニティは急成長する、とビル・ゲイツは説く。ネット上で趣味やボランティア活動を行い、友人の

輪を広げ、生き甲斐を見出すことが可能だ。

また、老人は消費者としても有力な存在であることを忘れてはならない。富士総合研究所の調査では個人金融資産千二百兆円強の四七％を六十歳以上の高齢者が保有している。家計消費市場のシェアでは、六十歳以上の高齢者は現在二四％に過ぎないが、二〇一〇年には三分の一に膨れ上がると予測している。日本経済新聞特集記事「始まった消費の逆世代交代」では、消費の主役になりつつあるのは五十歳以上の層だと指摘する。

私たち老人は生産者側にも参加でき、有力な消費者であり、ネットを通じて新たな生き甲斐も見出し、生き生きとした人生を送ることが出来る。ネット社会に有意義な存在である。もし、ネット社会が私たちを疎外し、「浦島太郎」のような立場に追いやるならば、新しい社会は間違いなく活力を失うだろう。

さて、各国政府ともさまざまなスローガンを掲げ、ネット社会に対する果敢な取り組みを繰り広げている。その中にはネット社会の本質を簡潔に掴んだ素晴らしいキ

ヤッチフリーズがある。英ブレア首相のビジョンがそれだ。「新たなネットワークによってもたらされる変化は、農業革命、産業革命に匹敵する」、「情報を持たない者がいる社会は不公平だけではなく、不効率である」。

離婚願望の女たち

アブドルカーダー 栄子

女たちの離婚願望は例の「亭主元気で留守がいい」の合言葉が流行しだしたあのころからである

男は外、女は内の性別分業のあのころ、男たちは徹底して会社人間だった。毎日の残業は当たり前で夜の夜中に帰宅、週末も返上、たまの休日には疲れきって一日中眠りこける夫を目にするだけだった。「おい、ふろ、めし」が彼ら夫婦の唯一のコミュニケーションで、しかも子育ては、一方的に女の方に押しつけられた。子育て上の相談を持ちかけても夫は「疲れてんだ」の一言で撥ね

のけた。まさに男たちは、妻とじゃなく会社と結婚していたのである。

女たちは、朝、企業戦士を送り出すと、とたんによろとよろけた。さびしかった。まるで銃後の守りそっくりの彼女らは体の芯からさびしかった。

そして女たちはアルバイト先を見つけてきた。さびしさを少しでもまぎらわそうと。ところが男たちは顔をこわばらせて言い放った。「俺が働いて食わしてやってんのに何が不服なんだ。アルバイトなんかせんでもええ」

彼らは妻が外に出て働くことを極度に嫌がったのである。女は内、夫に任せ、子供の世話をしつてりゃいいんだ、何をわがままな、と。一方の女たちは、女としても満たされず、ひとり前の人間としても扱ってもらえない悔しさに震えながら、腹の中で男たちをののしっていた。

「どうせ私はあなたのおい・ふろ・めしにすぎないんですよ。私をあなたのお手伝いさんにしておきたいんですよ、それとも母親代わりかしら」

開き直った女たちはさらに続けた。

「わかりました、わかりましたとも。あなたに家にい

られたら一日中こき使われるばかり。留守がいいわ。亭主は元気で、そうそう、おカネさえ運んでくれりゃあね」

それから何十年、いや何年もたたなかった。が、急激な時代の波はまず女たちを変えていった。女たちも外で働くことが当たり前、つまり、共働き時代の到来である。亭主元気で留守がいいと、おカネさえもらえばで我慢していた女たちはもう我慢しなくなった。夫ひとりの稼ぎでもなんとか暮らしていける女たちさえ、男と伍して働く道を選んだ。「人間の働く権利」を主張して。

彼女らはお茶汲みや小間使い程度の仕事をバカらしいと思いつつ、耐えた。「残業はしぶるし、生理休暇だなんだって休むし、女はまったく使いものにならん」と男たちに見下された。が、じつと耐えた。

しかし、勤めを終えた彼女たちには家に帰ってからの「子育て」と「家事」がどっさり待っていたのである。

勤め帰りのその足で保育園に預けた子を連れ帰り、夕飯の仕度をし、風呂に入れ、食事を与え……。まるで戦場そのものの日々が続くこととなったのである。

夫の手助けがほしい、ねえ、お願い、男女共生の世の中なのよ——と女たちは悲鳴をあげた。だが、夫の側からの手はさしのべられなかった。彼らは、旧態依然たる労働条件の下で働かざるを得ず、帰宅時間は以前同様、まったく遅いからだ。それに第一、男たちは何十年と住み慣れてきていたおい・ふろ・めしの温床を抜け出したくはなかった。その温床のぬくもりは彼らの骨の髄までしみついてしまっていたのである。そう、けっきょく時代の波に乗り切れずに。

一方、すでにスタートラインを切ってしまっていた女たちは後に戻れないのだ。男女を問わずヒトは働きたいし、その要求は満たされて当然である——というゴールをめざして、走り続ける。髪をふり乱し、体がよれよれになろうと。「ええい、男なんて、マザコンの男なんてもう不要じゃ」。ひたすら走り続けつつ、彼女たちはとうとう真剣にリコンを考え始めたのである。ああ、離婚願望の女性たちのなんと多いことか。夫婦間にこれだけ亀裂が生じては「子育て」もへったくれもない。

(二〇〇〇年一月六日)

ガリシア便り

大野 晃

《一九九九年七月二十六日、ポンテヴェドラより》

K子さん、

一九九四年から五年ぶりのサンチャゴ詣で。ノストラダムスが予言した九九年の七月も終わろうとしています。彼はアンリ二世の暗殺やフランス革命を予言したといわれています。

この七月を無事に過ごしたとしても、八月十一日の日蝕、八月十八日の太陽と惑星が十字の位置に並ぶグランドクロスも近づいています。前回の八二年には、地震活動が盛んになりました。日本でも、ロケットで有名な糸川英夫博士は「九九年に重大な環境変化が起こる」と予言しています。

実は、このポンテヴェドラの街は、これらの予言と深いかかわりをもつ街なのです。

ノストラダムスの予言について、たくさんの著書のあ

る五島勉氏は、九九年の破局について、「これがファティマの第三の予言と深いかわりがある」と書いています。

ファティマの予言とは、リスボンの北々東約百十キロのファティマで、一九一七年五月十三日、羊を追う三人の子供たち、ルチア、フランシスコ、ジャシントの前に、聖母マリアが現れ「これから十月十三日まで毎月十三日にここでお前たちの前に現れよう」とのお告げがありました。そして、その最後の日に、三つの予言が告げられました。

第一は、第一次世界大戦は間もなく終わる。

第二は、それから二十年してまた大戦争がはじまり、恐ろしい被害を出して四年後に終わる。

さらに、あとしばらくたって、三番目の大きな出来事が起こる。しかし、この内容については他言してはならない。その内容は、今もローマ法王庁の安全庫に封印されている、といわれます。

しかし、いつのころにか、ファティマの人々は、二〇〇〇年にアドヴェント、つまりキリストが再臨すると信

じるようになりました。

この街には、そのルチアが修道女としてサンツアリ
オ・デ・ラス・アパリチオネスと呼ばれる修道女の家に
滞在したことがあり、その礼拝堂でやはり彼女の前に
聖母マリアが現れたと伝えられています。

僕も今その礼拝堂を訪れて、この小さなバールからお
便りしています。ポルトガルとスペインと国は違っても、
ファティマとこの街とは大西洋沿いに百キロも離れてい
るのでしょか。

この街にはもう一つ面白い言い伝えがあります。トロ
イのテューサーによって作られた。ここから北へ百キロ
ほどの大西洋に臨んだ港町、ラ・コルーニャには「ヘラ
クレスの塔」という灯台があり、彼が作った町と信じら
れています。ホメロスのトロイ戦争の英雄たちが、その
昔この辺りを舞台に活躍したと信じられているのです。

少し話が脱線しますが、イギリスでは、キリストが大
工をしていたと信じられ、十二使徒の一人サンチャゴが
この地に布教した、といわれるのも、その昔の地中海の
船人は、自由に陸にそって大西洋を北上したのではない

でしょうか。この地で気にかかることは、サンチャゴが
ローマ、エルサレムと並ぶカトリックの三大巡礼地であ
るにもかかわらず、ミレニアムについて何の準備もして
いないことです。

二〇〇〇年、あるいは新しい世紀には何が起るのか、
不安と期待をこめてお便りしています。

《九九年十二月二十四日、ラ・コルーニャから》

K子さん。

明日はいよいよクリスマス。キリストが生まれて二千
年になろうとしています。

九四年の夏、やはり聖なる年に、この町で大西洋を眺
め「世紀末にはどんな思いでまた大西洋を見るのだろうか」
と、物思いにふけてからあつという間に五年の歳月が
流れました。

今の僕は、完全な失業者です。

JICA（国際協力事業団）では、六十五歳以上を専
門員として採用しなくなりました。シニア・ボランティア
という制度はありますが、給与がぐっと下がります。

民間の会社でも、六十歳から六十五歳の高齢者を採用すると国から補助金が出ますが、六十五歳になると打ち切られます。僕の失業も国が決めたこの制度と関係がありそうです。二十一世紀に向けて最大の差別といわれる「エイジズム」を最も積極的に進めているのが日本政府とは驚きです。

それで、仕方なくヨーロッパへ流れてきたのですが、当地の日本企業も元気がなくて、通訳の仕事も資格のない僕には回ってきません。

ノストラダムスの予言の方は、まだ何も起こっていませんが、八月十八日のグランドクロスの影響は、トルコでの二度の大地震、台湾の大地震と少しの日数のずれはあるものの八二年と同じように地震の多い年でした。

この二〇〇〇年を挟んで、何か起こるという予言は何もノストラダムスだけではないようです。マヤ文明では、最後の周期は二〇一二年に終わることになっています。そして、前にも触れたファティマ第三の予言とは何なのか。

ミレニアムに向けて、一向に燃え上がらないこのガリ

シア地方を見ていると、何かが起こりそうに思えてなりません。四月には、ミレニアムのローマを訪れますが、それまでに何が起こるのか。

今、僕はこの欧州の中に、何か未来に希望を与えるものがないかと探し訪ねています。

高齢者が疎外されて働く場がなく、物価も高い日本を離れ、「大量生産、大量消費、大量廃棄」という地球の破滅に一役買っているアメリカ的な文明へのアンチ・テーゼが強く出てきた欧州にいる幸せをかみしめています。

いまだに「もの作り」を美德と考えている日本は、今、世界で声高く叫ばれ始めた「サステイナブル・デヴェロプメント（持続可能な開発）」というテーゼを何と考えているのでしょうか。限られた地球の資源の活用、それはハードからソフトへの転換と思います。

ゆとり礼賛

藤 岡 豊

ニューヨークの冬は寒い。一面雪で覆われたマンハッタンは見た目にすごくきれいだが、道路を歩くのは大変な苦勞である。

そんなある日のこと、同じオフィスで働いていた田井君に起こったトラブルは、今でも私の記憶に新しい。彼は同期で入社した社員の一人で、私より二年ほど遅れてニューヨーク駐在となり、資材部の一員として毎日仕事に走り回っていた。

彼の下で、現地採用の若いアメリカ人が仕事をしている。名前を忘れてしまったが、仮にジョンとしておこう。その日田井君は一人残業をして、溜まっていた書類の整理を始めた。当時はまだコンピュータも普及しておらず、時間が掛かった。ジョンの書類をチェックしていた時、トータル金額が異常に多いのに気がついた。そんなに高額な契約が取れたはずはないので、発注書を限な

く調べていたところ、一つの書類に誤りがあるのを発見した。なんとケタを一つ間違えていたのである。

会社に与える多額の損失を悟った彼は、一瞬真っ青になったものの、その取引先はとくに営業を終えていてどうにもならない。

眠れぬままに一夜を過ごした彼は、翌朝一番にジョンを呼びつけた。自分のミスを素直に認めた彼をつれて取引先へ向かう。小雪の舞う中を苦勞しながらやっと辿りついた。先方の担当者は赤毛の若い女性であった。早速書類を取り出して調べた結果、

「あらホント、一ケタ違ってらわ」とケロツとしたものである。

訂正した発注書と取り替えてもらい、何とか損失を出さずに済むことができた。しかし、これに早く気付いたからよかったものの、もしあのままで済んでいたらどんなことになったかと思うと、やりきれない気持ちであった。

それにつけても彼が驚いたのは、相手の女性もさることながら、ジョンが特に悪びれる様子もなく平気な顔で

していることであつた。これがもし日本なら、済みませんでした、と平謝りに謝るところである。溶け始めた雪に足を取られながら、割り切れぬ思いでオフィスに戻った。

その夜、田井君は私のデスクにやって来て、一杯呑もうと言う。この一部始終を語った彼は、まだジョンの態度に納得がいかない面持ちである。多少なりともアメリカ生活に慣れてきていた私はこう言つた。

「こちらでは、ミスは当たり前だとされているんだよ。つまり人間である以上、ミスはつきもの、物は壊れるのが当然という感覚なんだ。我々には理解し難いことだけど、それが自然なのかも知れないじゃないか」

私たちは小さいときから、過ちを冒してはいけない、物を壊してはいけないと、厳しくしつけられてきた。その言いつけに反すると、こっぴどく叱られ、罰を受けたものである。しかしその結果はどうであらう。ミスの少ない人間にはなつたものの、その半面、鷹揚さとか寛容さというものが失われてしまったのではなからうか。

戦争に敗れ、ゼロからスタートした日本は、「急げ急

げ、ミスは悪、無駄も悪、競争に負けるな」の掛け声のもと、驚異的な復興と発展を遂げ、今や先進国、経済大国の地位にまで登りつめた。ところがその煽りを受けて、私たちは人間として最も大事なものの、人間らしさを失っているような気がしてならない。

田井君といえば、真面目な性格の、堅実な考え方をする優秀な男であつた。それでいて面白いのは、結構マージャンが好きで、私も何度か付き合つたことがある。誰かが大きな手をしていると、一〇〇〇点で上がつて蹴飛ばすのを得意としていた。蹴飛ばされた相手が悔しがるのを見て密かにほくそ笑んでいたのだろう。自分がまだ負けているのに、何故わずか一〇〇〇点で上がつてしまふのか理解できなかった。多分敵に大きな点で上がられるよりは、たとえ一〇〇〇点でも自分が上がった方が得という計算があつたのだろう。勝負ごとと言つてしまえばそれまでだが、余裕の無さがなせる業には違いない。

日本人はエレベーターに乗るとすぐに「閉」ボタンを押す。途中で誰かが降りると、またすぐボタンを押す。ドアは自動的に閉まるようになっていゐる。それを二、三

秒早めたからといって、何の儲けになるのだろうか。

最近日本でも午後にはコーヒーブ레이크をとる会社が出てきたそうだが、結構なことである。朝から晩までミスを冒すまいと一心不乱に働いているようでは、斬新なアイデアや素晴らしい発想が生まれるはずがない。

かつてアフリカ中南部の諸国を訪れた折、街の子供たちの表情が意外に明るいのに心を打たれた。世界の水準からすれば極めて貧しい生活、恵まれない環境にありながら、子供たちの顔つきは決して暗いものではなかった。要は経済的なゆとりではなく、心のゆとりであると感じさせられたものである。

西暦二〇〇〇年という新しい千年紀を迎えた。かといって何もかも新しく生まれ変わる訳ではない。しかしこの世界が、そしてそこに住む人間が、過去の一〇〇〇年から着実に変わりつつあるのは事実のようである。心のゆとりがそれを支えているように思えてならない。田井君も、マージャンの蹴飛ばし料を二〇〇〇点にまで嵩上げするのではなからうか。

本が変わる 本屋も変わる

多田 修

どこの本屋に行っても新刊本が氾濫している。

四十年以上も前になるが、東村山の丘陵にある療養所で、毎日読書に耽っていた。そのころ、図書室にある名作をほとんど読んだ記憶がある。当時は名作の数も限られ、同病の人たちと、それについて大いに議論したものである。

あの休養期間がなかったら、その後名作を読む余裕はなかった。仕事に追われ午前様の毎日、時間どころか自分の余裕もないのに読書する雰囲気もまるで湧いてこなかった。

リタイアして、本を読む時間は充分ある。自分の視点が多様化したこともあるが、当時の図書室が平面とすれば、今では立体化した本屋を探し回る感じがする。壁を背にした本棚を左から右へ目を移すだけですむころは、本屋を出るとき一番好い本を探したと安堵感があつた。

昨今は、雑然と並んだ本棚を回っていると、見忘れた本棚がないか心配になる。背表紙が似ていて、見たような気分になる錯覚もある。絵や彫刻を見に行つて、陳列順のわかりにくい展示のようにイライラ感が興味を削ぐのと同じだ。案の定、不安ながら買った本を読みすすむにつれ、気に入らなくなるのもしばしばである。

本屋も、市場という目で観るとあじけない。読者は消費者である。本屋も出版社も流通である。この流儀で見れば、作家は生産者ということになる。昔ならこんな考えはご法度であつたろう。顧客満足どころか、読者に迎合する作家は軽蔑の目でみられたと聞いている。

ペンクラブの中でも、電子出版を目指そうという意見がしばしば出るようになった。CD音楽と同じように、何枚売れるかが勝負の世界で作品を扱われてもいいのだろうか、疑問が残る。電子出版になれば同じ作品でも本とは形も質も表現も変わると割り切るのか、最後はきれいな装丁の本にして本棚に飾られるのがいいのか。

半面、二十一世紀になれば、「太陽と北風」の物語のように、力でねじ伏せるのではなく、読者が魅力に惹か

れ集まってくる作品がベスト・セラーになるといわれる。そんなソフトな社会の作品に相応しい電子出版はどんなものになるのか。

ある期待をもった読者と、その期待に応える作品の出会いこそ大切にしたい。電子出版がまず解決しなければならぬのは、この出会いをもっと確実なものにするのではないだろうか。

CD音楽を売る店に行けば、あちこちの壁や柱に好みのCDを選択して『試聴』できる装置がおいである。対象をある程度絞つた後には、この装置が有効であろう。しかしその前に、読みたい作品の概要を問い合わせ、それに近いものを何冊か選び出せるシステムが欲しい。世に言う『あいまい検索』である。

これこそ、パソコンが他に比べて優れている機能である。我々の秘書役を勤めるプログラムと思えばよい。「何年か前に、学会に提出した論文で、こんな概要のファイルを持ってきてください」といえば、膨大なファイルの中から選んで、その論文を持つてくる秘書のことである。

『あいまい検索』と『試聴』があれば、読者は欲しいものにたどり着ける。試聴するには、もう一つワープロで書いた文章を『朗読』するサービスも必要である。ナレーション用のプログラムである。

ミレニアムの言葉とともに、ＩＴ革命が起こると世間はうるさい。読んで字のごとく、情報通信技術のことである。今、革命という過激な文字が躍るのは何故か。

世間では、他人の話を聞くより自分から話したい人が多い。インターネットは訥弁の人も気の弱い人も公平に仲間に入れてくれる。個人が情報を発信することで、自ら社会に参加する時代になれば、新聞、ラジオ、ＴＶで情報を見聞きしながら受け身で参加していた社会とは趣が異なる。

ＩＴが情報バリアを除き、人が情報発信の機会を生かして誰とでも会話を気楽にできるようにすれば、データだけでなくノウハウやシンパシーを伴うコミュニケーションが可能になる。その結果、互いに共鳴し自己組織化がすすむ。

インターネットのお陰で、世界に散在している同志が

接触する機会がふえた。対話が容易になったので、遠地にいても求心力のあるグループができあがる。その上、異文化相互の交流を加速させる効果は計りしれない。

従来からあったトップダウン型の組織ではない。かつては組織になりえなかったほど分散し、ばらばらな存在であった同志の糾合である。これまで周辺から受け入れられなかった意見でも、国境を越えバリアを超え一つのグループの共通ビジョンとなって組織がき上がる。

ＩＴ革命後の作家活動や作品形態はどうなるのだろうか。アマゾン・ドット・コム時代は、先に本ありきから始まった。単に本の流通革命であった。取引経路の短縮で、取引コストを下げたに過ぎない。

インターネットは取引対象を大衆から個人に代える。個別対応に手間をかけても読者情報が集まるから次のを絞って企画ができる。愛読者が分散していても世界から集まればその数は多い。Ｅメールで嗜好別の配布リストを使えば無駄なく「個客」にＰＲができる。

ネット取引は単に流通コストを下げるだけでなく、読者と一対一の信頼関係を築き、広い世界に常連の客を作れる。

しかし、どんなにIT革命が成功しても、言葉が通じなければ同志の糾合は難しい。『個の時代』というが、日本語が『孤の時代』になってしまわなければならないのだが。

二十一世紀における国家

櫻井 清治

世界をあげて祝賀ムードのカウンタダウンの中で、二十世紀最後の年である新ミレニアム西暦二〇〇〇年が明けた。懸念されたコンピュータ二〇〇〇年問題にかかわる深刻なトラブルが起きずにすんだのはめでたいことである。それにしても何故キリストが生まれたとする年にはじまる西暦二〇〇〇年を世界がこぞって祝うのだから。

うか。これもグローバル・スタンダードの一つかと感じた。私がまだ若いころ、日本では国をあげて紀元二六〇〇年を祝い、愛国心をあおっていたことを思い出しながら、二十一世紀には国家の役割はどう変わるのかを思った。新年における世界各国首脳のメッセージは、ほとんどが「グローバル化と二十一世紀」をテーマにしている。人権・人道問題、市場経済のグローバル化、地域連合の動きなどの世界の流れの中で揺れる主権国家について考えてみたい。

グローバル化する人権・人道問題と市場経済

二十世紀の前半に資本主義体制と併存して機能していた社会主義体制が崩壊したことは、民主主義と対立していた社会主義イデオロギーが崩壊したこともある。社会主義は、人類の夢を実現するものとしての進歩的なイデオロギーとされていたが、対立の終結により社会主義イデオロギーもグローバルな市民民主主義、人権擁護に形を変えることになる。これが世界の流れとなり、国際安全保障の重点は国家間の対立より、民族や宗教の対立

により多発する人権・人道問題への対応に移っている。

人権はもともと個人や集団がその普遍性を自国の権力に対して主張してきたものである。これに対し国家は、自国存立の正義という立場から国内問題として処理してきた。しかしこれからは、国家権力の自国民に対する人権侵害や非人道行為についての国際社会の目はより厳しくなる。昨年三月、ユーゴスラビア連邦ミロシェビッチ大統領政権によるコンボ自治州のアルバニア系住民に対する「民族浄化」のすさまじさに対し、NATOは人権・人道擁護を大義名分に、国家主権侵害との反発を招きながらも、ユーゴに対する激しい空爆を行い、六月にはNATOの示す空爆停止条件を全面的に受諾させることになった。このとき英国のブレア首相は、民主主義に基づく人権・人道問題は国境をこえる「新国際主義」と唱え、NATOの軍事介入を擁護した。これに対し台湾統一問題をかかえる中国は「新干渉主義」だとして、国家主権の尊重と内政不干渉の原則を主張したが、結局NATOは国連の承認をとることなく空爆を強行した。同じころ、英国上院でチリのピノチェト元大統領の

拘束を正当とすることが議決された。

さらに昨年、人権侵害の続いたインドネシアの東チモールの独立が承認された。これらは国家の主権を絶対視しない、時代の変化を示すものである。ガリ前国連事務総長は、これからの世界には五百の新独立国家ができ、大きな国際問題になるとしている。

グローバル化する市場経済についてみると、冷戦終結後の世界は、高度に発達した情報・通信技術と、新しく開発された金融理論と技法による激しい競争を伴うグローバル市場経済の時代となった。市場を規制するのは国家ではなく、テレコム、格付け機関、監査法人、会計法人などである。市場の主役である企業については、国境をこえた巨大企業の合併、提携が広く行われている。かつて重視された自国産業や自国企業という概念はゆらぎ、企業の利益と国家の利益がかけ離れ、この意味でも国家の主権はゆらぐことになった。

世界はいまグローバル化と共に、地域別に国家が統合する方向にもある。EUでは昨年、加盟十一カ国により、国家主権の大きな要素の一つである各国通貨を放棄し、

欧州単一通貨であるユーロの発足を行った。国家主権のもう一つの大きな要素である軍事力についても、昨年末の首脳会議で、それぞれの国の軍隊を保持しつつも各国が兵員を出し合つての共同部隊創設の基本的合意を行った。

超大国アメリカと中南米を含む米州圏では、ドルを統一通貨にとの動きがある。いずれアジアほかの地域もこの方向に進むであろう。これにより国家主権の概念も大きく変わることになる。

二十一世紀における国家の役割

二十一世紀においては、多くの分野において個々の国家よりも、地域連合や国家主権の主張のための集りではない機能をもつ国際機関の果たす役割が大となる。しかし依然として国家の果たすべき大きな役割もある。

市場経済の効率性については、二十世紀後半において実証済みであり、二十一世紀においてもグローバルに存続することは間違いない。問題はグローバル市場経済につきまとう世界的な階層化と不平等化という「負の部分」

への対応である。昨年六月のケルン主要国首脳会議ではじめてヘッジ・ファンドや短期資本移動の監視や規制が認められ、重債務貧困国のもつ公的債務削減の合意もなされ、国際機関による対策が始まった。

一方、EUでは加盟十五カ国の中十三カ国が中道左派政権である。これらは市場経済を歴史の流れと受めとめながらもアメリカ流の競争主義より少し距離をおき、市場経済の負の部分を社会民主主義政治により補完しようとの国家の役割のあることを強調している。

地域連合の動きのある一方で、人権・人道問題よりくる分離、独立を目指す集団も多くなる。民族・宗教と人権・人道問題を適切に処理して「民族自決」による自立能力のない独立国家の続出を防ぐことも国家の大事な役割となる。

さらに、グローバル化の中で、国の文化を保持し、国家のアイデンティティを失なうことなくグローバル化への調整を計るという重要な役割がある。

その意味でも日本には、それぞれの国家の主権との調和を図りつつ、まずは地域統合の進んでいないアジアで

の共同体構築を積極的に推進する役割のあることを認識すべきであろう。

『ミレニアム』と言うけれど

衛藤 甲子郎

西暦二〇〇〇年の今年は『ミレニアム』と呼ぶそうだ。三十数年も商社に勤務して、その三分の一を海外で生活したというのに、宗教心が薄い無頼の徒は恥ずかしながらこの単語を二年前まで知らなかった。

慌てて辞書を引いて、聖書からの引用によってキリストが再臨するという至福千年の意味であるとか、千年祭や千年紀あるいは千周年を指す場合もあることを学んだ。

指導者のほとんどがキリスト教徒である先進諸国の人々にとっては史上二回目の千年紀なのだから、二〇〇〇年になると同時にこの記念すべき時世を祝うのは当然

のことであろう。八世紀の「大宝」から「平成」までの千三百年間連綿と独自の年号を踏襲しているわが国でも、この世界的ムードに便乗して新千年紀を慶祝する記念行事を計画中と伝えられる。事実、時の流れに敏感に反応する人も多いらしく、普段なら平成十二年元旦と書くはずの年賀状も、今年ばかりは全体の約三割が二〇〇〇年一月一日と西暦の日付であった。

それにしても、昨年の大晦日は例年とは全く趣が違って、張りつめた緊張感に溢れた異常な雰囲気の一晩だった。

・・・・空襲警報発令と同時に急いで防空壕に駆け込み、身じろぎもせずにラジオの放送に耳を傾ける。いよいよ敵機の来襲か。最悪の事態を覚悟して、改めて備蓄の品を点検してみる。・医療箱、飲料水を入れた水筒と一升壺、食糧となる乾燥イモの包み等々。非常袋の中には通帳と印鑑、そして下着に縫い付けた物入れに現金と米穀通帳が納まっているのを両手で確認して、やっと少し落ち着く。あとは家族が肩を寄せ合い、息をこらし

で一瞬でも早く時が経過するのを待つだけである。全員が押し黙って口を開こうとしないが、誰かの息づかいが荒くなるたびに蝋燭の焰がゆらゆらと揺れる。……

二〇〇〇年へ時が移る瞬間から数分あるいは数時間の間にどんな事態が発生するのか、測りしれない不安に怯えながら固唾を呑んで新年を迎えた人たちに、五十年前の国民の姿を重ねたのは呆けはじめた老いらくの幻想だったのだろうか。

近代文明の象徴であり、人間の幾百倍もの演算力や記憶力そして伝達力を持つ電子機器も完全無欠なものではないと判った時、その欠陥が引き起こす社会的影響の大きさを誰も予測できずに、世界中が周章でふためいたのだ。万能の神と信じていたコンピューターが一九九九年の翌年を一九〇〇年と誤作動する恐れがあると知らされてからは、元旦零時の時報と同時に全国的に停電が起きるだろうとか、水道やガスの供給も止まってしまい、空飛ぶ飛行機は墜落し電車も制御できなくなるかもしれないなどという情報が流れたので、食糧や水の備蓄に奔走した人も決して少なくなかったのである。

幸いに大きな惨事の一つも発生しなかった。政府はかつての大本営を思い出させる対策本部を官邸に構え、災害に備えて十万近くの自衛隊員を待機させたほか、官と民とを問わず多くの人々が深夜勤務に就いていたが、太平洋の日付変更線が一月一日の零時になってから二十四時間経過して地球上のすべての国と地域が二〇〇〇年を迎えても、日本をはじめ世界を揺るがす事故が無かったのは何よりだった。

コンピューターの誤作動は一過性の問題だろうから、システムが順調に作動し始めれば恐らく二度と今回のようなトラブルは起こるまい。二〇〇〇年に突入する直前の避けがたい障害といわれていたY2Kに係わる諸問題はこれですべて解決したと思って、肩の力を抜いて一月三日の新聞を開けば、もう元旦の不安などすっかり忘れたかのように紙面のキーワードは『ミレニアム』に変わっていた。

かくして新年の雰囲気は劇的に一変してしまったのだ。しかし、ちよつと待てよ。今年即ち二〇〇〇年は二

十世紀最後の年ではないか。すでに何年も前から『世紀末』が指摘され警告されていたことは、いかに頭の悪い私でも忘れてはいない。

一般に世紀末といえど誰もがヨーロッパの十九世紀末の懷疑・絶望・享楽が充満した頹廢の思潮を思い浮かべるのが常識だろう。確かに、ここ二・三年の日本の社会はそれを暗示するような世紀末にふさわしい状態であった。更に昨年、ノストラダムスの予言があったという七月を過ぎてからは、オカルト集団による不可解で猟奇的でもある教義と思想に基づく事件が逐次あばかれていくので、真の世紀末に当たる今年は特に国民心理に動揺を与える素地があるのは否定できない。だからこそ、時代の先取りが商売繁盛の要諦と心得るキャバレーやパチンコ屋が手回しよく、『新世紀』などという看板を掲げて客を呼ぶのだろう。『世紀末』の惨めな世相を危惧したチエ者が、暗くなりがちな庶民の目を明るい方向に導こうとして『ミレニアム』を強調しているのも同じ発想によるものと思われる。

慶祝ムードの『ミレニアム』と頹廢的で厭世観が潜在

する『世紀末』と、二〇〇〇年のわが国ではいずれが国民世論の主流となつて後世の評価を受けるだろうか。

予想外に生命を長らえて二十世紀の最後の年まで到達してしまつた以上、あと暫らく余命を大事にして、わが国の今年中の政治と經濟の動向を見届けてからあの世に旅立ちたいものである。

ミレニアムに想う

今 村 亮

1 チルドレンズ プロミス

ミレニアムを単なるお祭り騒ぎに終わらせない多彩な記念事業が国をあげて立案計画されている。私は国家単位ではなく、国境を越えた記念事業をインターネットで探してみた。全世界を網羅してはいないが、海を越えた連携プランが一つ見つかった。チルドレンズ プロミスと言う。一九九七年、英国のデパート、マークス ア

ド スペンサーの会長リチャード・グリーンベリ卿が発案し、これに現ブレア首相が共鳴して広がった。各労働者が一時間の給与を事業に寄付する。雇用者経由でも直接でもよい。スペンサー卿は「人はミレニアムで、自分がどんなことをしたか、いつまでも忘れまい。チルドレンズ プロミスは明日の子供たちを励ますと同時に我々の喜びを倍加しよう」と述べている。運動はまず、アイランドに飛び火、ついで英国系のオーストラリア、ニュージーランドに、さらにフィリピン、サウスアフリカに広がった。スローガンはGive an hour. Change the future である。

2 自然対人間

銀河宇宙カレンダーを見た。ビックバンを元且とする太陽系地球の誕生は十月はじめ、生命の芽生え十月末、最初の恐竜が十二月二十八日、絶滅同三十日、最初の人類は実に同三十一日大晦日であった。キリスト降誕午後十一時五十九分五十七秒、仏教のはじまり同五十八秒、アポロ月面着陸同五十九秒。紀元前に始まる人類の歴史

も、このカレンダーではあつという間、それこそ映画ジエラシックパークではないが、恐竜と出くわしても、さほど驚くこともない次元となる。新来者のはずの人類が、ごく短時間に地球を闊歩し、月への飛行までも実現した。来る二十一世紀は人口増加がますます加速度を増し、人口集中の結果、二千万人都市が、特にアジアに多く誕生する。人類が棲息する地球の自然界は、乱獲、破壊、汚染、温暖化と警鐘が鳴り続く。人間は、恐らくこれままで生存していたと思われる動植物の九九パーセントを絶滅させてしまった。

3 エコ ライフ チャレンジ

司馬遼太郎著「日本人への遺言」の中に「琵琶湖を語る」(一九八四年)がある。当時の武村正義滋賀県知事との対話で終始する。

司馬 五百年、琵琶湖がもつかどうかとなると、知事さん、あなたは請け負いますか？

武村 請け合えませんか。

司馬 私は百年だろうと思いますよ。百年で京阪神―つ

まり日本を支える重要な地域は減びると思っています。

これだけ、はっきりと明言できる人は、まず、いないと思う。河川状況はどうか？ 黄河、ナイル、ボルガ、ガンジスいずれも危うい。世界河川の半数近くが飲料水に不適、渇水がち。人類のふる里ともいう森林とて、一九八〇年―一九九〇年の十年間に一億五千四百万ヘクタールの森林が消滅した。一日当たり、約五百カ所のゴルフコース相当分が消滅した勘定だ。環境面での国際的協力は地球温暖化防止対策等でのサミット会議上の政府、NPO、NGO機関の活動だが、ミレニアム警鐘の発信を大いに期待したい。

4 アース プロミス

読売新聞が「残したい県内市町村の財産」と題し、福岡県行政広報担当者を対象に行った調査結果が発表された。約百点の財産のうち、五十点は各地の伝統的な祭りと遺跡、あとの五十点は温泉、焼き物、古木（いちちょう、くすのき、大ふじ等）、桜並木、棚田、げんじぼたる、鳴き砂、ぼた山等があった。有形無形の文化財に加え、

特有の自然保存を希望していた。日本人の共通の願いとしては、国中が緑に覆われ、きれいな海に囲まれ、変化に富む日本の自然の保持と考える。自然あつての人間。この自然保存のために、前述のチルドレンズ プロミスの理念を取り入れ、アース プロミス運動を提唱する。一時間の労働報酬相当を全国民が寄付すれば相当な基金が集まる。また実労働でも貢献できるよう図ろう。このアース プロミスの思想をアジア全域に広げよう。韓国にも、中国にも。アジアでもりあがれば、チルドレンズ プロミス同様、全世界にも波及しよう。スローガンは Give an hour. Preserve the Earth としよう。

二十一世紀はどうなるかの勉強

杉浦 右蔵

NHKは昨年十二月末に二十世紀の映像記録を十一回連続して放送した。百年の記録を八百二十五分に纏めた

ものだから無理な圧縮もあったが、良い作品だったと思う。また十二月号「ナショナルジオグラフィック」が見た二十世紀の日本の暮らし」は明治から大正そして昭和の日本人の暮らしを素直に捉えている。

昨年十一月初め、韓国から留学生で来て滞日十七年に及ぶ作家の呉善花先生に「日本の瀬戸際」というお話を伺い懇親会で親しくお会いして、先生の表題の本を購入した。この本の出版は昨年一月。もっと早く読めば二極化の著しい上昇株の波に乗れたかも知れなかった。次に最も新しい本として昨年十二月出版された広瀬隆さんの「アメリカの経済支配者たち」がある。世界を動かす七つのメカニズムから歴史的事実を証拠に過去の歴史を説明して今後の動向を推測している。

東京大学先端経済工学研究センタの児玉文雄先生は、現在進行しつつある第三期ミレニアムはデジタル革命だと言っている。人類の有史上特筆される時代に来ていることは間違いない。

トランジスタが発明されてからマルチメディア時代の到来かと期待された時期が何回かあったが技術が伴わず

本物ではなかった。しかし今回は本物だ。Trの発明からIC化LSI化と僅か四十数年ちよつとで高密度化は極限近くまで急進歩した。

しかし、一方で地球の環境は二十世紀後半の五十年で急速に破壊された。人類の有史以来驚くべき対数的な急上昇で破壊が加速され、自然の浄化作用に必要な時間に比し、人間の対策の実行は余りにもスローで現在も破壊を進めている。二十世紀末期の急進歩と環境破壊の浄化速度はアンマッチで、この両者がバランスして元へ戻るまでのアンマッチ解消期間、地球上の全生物は苦しまなければならぬであろう。二十年前に読んだ文庫本で、スイスのホテル経営者デニケンという人が「人類は十年の周期で滅亡発展を何回か繰り返している」と述べていたのを覚えている。

さてヨーロッパ人がアメリカ大陸を略奪定住してから二百有余年が経過した。このアメリカ大陸の資源の富、アフリカの資源と奴隷を基として財閥が誕生した。アメリカの場合人口1%の少数が全米の36%の金融資産を持っているのだ。そして財閥のほとんどがヨーロッパ財

閥と姻戚関係にある。財閥の資産は一九八九九年を基点として四千倍。一九四九年を基点として換算して、アメリカの富豪の資産は七十倍、億万長者の資産は十二倍、金持ちの資産は七倍になっていると言う。これに比べ日本の庶民は定期預金で低利率に喘ぎ、五十年後に株は百万円が二千百円と目減りするそう。現在ビルゲイツが超資産家と言われるが、各財閥の資産に比べると三十分の一に過ぎない。この欧米の巨大財閥が長期戦略で世界の金融、証券、投機、石油、金、銀、ダイヤ等を支配している。日本を含めたアジアを牛耳るのは赤子の手をひねるより簡単だろう。この巨大財閥はG7で日本に公式に資金提供を約束させ、BIS規制で日本の銀行を地獄に落とし、為替操作でインドネシア・タイ・韓国等を叩き、IMFへの隷属を実現させ、日本の債権を焦げ付かせ、日本国家とアジア全体の金融崩壊を主導した。

さて二十世紀の後半第二次大戦後アメリカは三つの戦略を成功させた。その一は食料の世界制覇、その二はエネルギーの世界制覇、その三は情報の世界制覇である。田中角栄がエネルギー政策に反骨を見せると直ちにロッ

キード・ピーナッツで蹴落とした。

最後に二十一世紀はどうなるかを推測してみたい。
(日本人よ戦略を持て)

一、願望 ①ペリー来航以来欧米に舐められ続けていることを解消すること。②香港、マカオの植民地が返還されアジアから植民地は無くなったと言うが、欧米の海外県や信託地は残っている。③アジアは欧米の支配から脱却しアジアAUとして統合し第三勢力として欧米と対等になれないか。④日本人は金融と生活経済を混同せず、外敵金融暴力から大惨事を未然に防止せねばならない。

二、近年に起こり得る対策 ①金融市場は金の暴力に変わってしまう。二極化した株の上昇あとのバブルが恐ろしい。次は日本の個人金融資産千三百兆円が狙われる。政府は確定型拠出年金の運用方法を堅固にし外国の略奪から守れ。②通貨の金銀本位制の罠に気を付けよ。③自国民の食料自給を確保せよ。④エネルギー供給の自国自給を確立せよ。⑤日本の全財閥の資金を合計してもアメリカの財閥に遠く及ばない現状を直視し、政府は国民の資産擁護保全に力を入れよ。これ以上外国財閥に掠め取

られたら日本の再浮上は困難となる。⑥アメリカの優れたテクノロジーは利用しても、その道具を使った曖昧なニュースに惑わされてはいけない。⑦新年NHKのETV深夜館対談で大学院生井庭崇さんの複雑学の話聞いた。新世紀は間違いなく複合組み合わせの時代となる。その効果も単純和以上になることが期待できる。しかし、マルチメディアソフトやインターネットだけで世界は成り立たない、基礎科学の原理探求と充実、特許を含めての製法技術の先行確保、合理的な生産技術の探求など、日本の工業立国基盤を大切に守り育てることだ。

三、悪夢の推測 二十世紀は日露・日清・第一次世界大戦・第二次世界大戦などが前半の五十年に起きた。後半の五十年は大戦でなく局地的紛争に形を変えている。また世界の大国から小国まで各国政府は起債による借金で運営されている。二十一世紀前半は一九九八年に端を発する金融暴力が猛威を振るうと予測する。世界中の各国政府公共機関は借金だらけで動きが取れなくなる。この結末を次世代の二十一世紀で決着を付けるには、財閥が太って大衆庶民に犠牲を強いる形となるだろう。その結

果、不景気による庶民の犠牲、局地化紛争が拡大頻発し、インフレが発生するかもしれない。そしてインフレの助長で借金解消をしようとするかも知れない。人類世界の破滅に至らないことを祈りたい。

最後に一言、米国・ロシアは人間の片足を奪う二〇〇g地雷の空中大量散布を止めるべきだ。今までに散布した何億個の地雷の回収を自らの手で実行して欲しいものだ。

言葉はどう変わるだろうか

中川路 明

キリスト教国では、千年王国の教え「千年紀」の節目を迎えた。書店で「老後の輝きと収穫のために」や「天寿を全うした人々」などの字に目を惹かれるようになった私も、この節目に、いまの子供たちがどのように変わるのだろうかと思いを巡らした。

戦後の生活環境により、私たちの孫世代はからだや脳にも変化が生じている。第一は、ほとんど胸で呼吸するらしい。我々はかなり腹でも呼吸している。私の大切な健康法の気功では腹式呼吸が要である。子供は腹式呼吸という言葉すら知らない。しかし、その子に五分間腹式呼吸を教えた前後を比べると、ある種のホルモンの分泌が促進されて持久力がつき、キレル現象が少なくなるという。学級崩壊対策としてぜひ実施してほしい。

第二に、最近の子供は勉強しなくても、生きていけると澄ましたものである。しかし、英語の歌を歌うとびつくりするくらい上手だ。発音が違う。英語の「r」と「l」はともに三つの音波の合成であり、そのうちの一つだけに差がある。その一つの差を認識する脳細胞を訓練すれば、「r」と「l」は簡単に聞き分けられる。子供は歌の意味が分からないから、音だけを一所懸命に聞くのでこの細胞が発達し、音感も向上するという。

からだの変化はこれくらいにして、言葉はどう変わるのだろうか。

大野晋氏は言語と文明は密接で、国に新しい文明が入

ると言葉は変化すると言う。弥生時代に、タミルから稲作、金属、機織りの文明とともにタミル語が来た。共通点が多いからタミル語が日本語の源流であるという。

六世紀ごろから遣唐使などを通じて中国文明が入った。大陸から渡来した漢字・漢文によって、日本人はじめて文字や文章の存在を知った。漢字・漢文を読むだけでなく、それらを利用して日本語を書き表す方法を考えた。漢字の意味に基づく「訓」の読み方や、漢字の意味を無視して発音を使う「万葉仮名」である。古事記は漢字で書かれたが漢文でなく仮名として使っており、日本書紀は漢文で書かれている。万葉仮名を母胎とする「片仮名」、それに続く「平仮名」という便利な表音記号をもって、漢字と仮名の交ぜ書きへと、日本語の表記法は広がった。

このように漢字をうまく取り入れたから、古代の日本語と現在の日本語は基本的に変わっていない。日本が外患を受けない島国であるという地理的条件も大きいだろう。先人は刑罰や法律を定める律令や宗教という中国文明の原理だけをしっかりと採り入れ、以後中国と離れて千

年近く閉ざされた世界で独自の文明を築いたわけである。

十九世紀に入り、明治の開国とともに蒸気機関をはじめ近代文明の摂取に努めた。同時に入ってきた英語は発音の難しさが受け入れられず、すでに根づいていた漢語に翻訳して消化された。このとき言語の崩壊がなかったことで、日本は急速に欧米に追いつくことができた。ついで、日本語は占領時に一波乱があった。占領軍は「日本人が負けると分かっている戦争を必死に戦ったのは、あの難しい漢字を使った新聞が読めるはずがないからだ」と誤解し、日本語のローマ字化を計画した。外国人に日本語をいじられるのは耐え難いと山本有三氏らが国語審議会で引き受け、当用漢字、教育漢字と漢字の字数を制限することにより、占領政策から日本語を守ったといわれる。

二十世紀末、英語を主体とするコンピュータ文明が怒涛のように到来した。明治時代はヨーロッパ語が日本語を変えるはずだったが、漢字がクッションになって防がれた。いま街角にもマスコミにも、広告や映画の題

名にも片仮名英語が氾濫し、ローマ字英語も増え続けている。若い人は漢字より受け入れやすいようで、背景となる社会観念も戦後五十年にして明らかに変わってきた。大野氏は、日本語を残したいと思うなら世界に負けない文明を生み、二十一世紀の技術を日本語で発表することしかない、と言っている。

情報通信の進歩で世界は一つになってきた。一つの共通言語が必要であり、恐らくそれは英語になるだろう。アメリカ文明がリーダーシップをとっているからである。ドイツではドイツ語で書かれた医学論文は二流扱いであり、英語嫌いといわれたバりに英語学校が続々建っている。共通語の英語が主役になって、日本語も固有の文化を残すだけの言葉になってしまうのだろうか。

井上ひさし氏は、日本語は悲しいことに英語との間でピジン (pidgin) 化し、さらにクレオール (creole) 化していった、一つの言葉が変わるのに要する三百年後の日本語はそうなっているだろうと書いている。ピジンもクレオールも文明の移転とともに生まれる。たとえばアフリカの植民地に侵入者が入ったとき、現地人も母国語

新千年紀の展望

中 村 爽

でなしにその場限りの侵入者の単語を使う。これがピジンである（占領時のパンパン・イングリッシュも）。その黒人がアメリカに連れてこられて、センテンスまで取り入れられるのがクレオール化である。そしてアメリカで使われている英語に同化（脱クレオール）してクレオール英語を話すようになった。

日本で氾濫している片仮名英語も、単にファッション関係者やライターの好みでなくピジンであり、世代交代とともにクレオール英語になると説明している。氏は三割も片仮名英語を使う文章で小説は書くことができないと言っている。

言葉は時とともに乱れ、変わっていくという。私は大和言葉のよき時代を悠々と楽しみたい。次の世代の人たちも新しい時流のなかで、その時代の会話や文章を楽しむことだろう。

二〇〇〇年が明けて新しいミレニアムが始まった。日ごろ日常生活に埋没した頭を切り替えて、新千年紀の展望をこころみた。しかし、そこは凡人の悲しさ、二十一世紀の百年間だけでも見当がつけにくいのに、とても千年先まで見通すことなどできそうにない。ただこの変化の激しい時代、次の二十一世紀だけでも、前千年紀に匹敵する数の問題が世界で起こるに違いないと考えた。そして人類がこれにどう対応するかによって、これからの千年紀の様相はまったく変わってくるはずだ。

今でも人類が直面する問題は山積している。なかでも最大の難問は、環境破壊と資源の枯渇による、人間をはぐくむ地球の劣化である。来世紀にかけて、人類はこの事態にどう対処していくのか、これこそ新千年紀の世界の姿を定めるものであり、人類の生き残りを左右するものと言える。年の始めにあたり、この古くて新しいと言

える問題についてあらためて考えてみることにした。

この二十世紀、めざましい科学技術の発達で人類の生活の質は格段に良くなった。だがこれにともなって、地球の環境は傷み、資源は減ってくるというマイナス面が現れてきた。ここで地球と人類が生き長らえるためには、世界の人びとが過度の生産と消費を抑制し、この状況にブレーキをかけざるをえないということになる。

この問題については世界レベルでさまざまな議論がなされてきたし、課題別の国際会議もたびたび開かれ、世界の関心を集めてきた。しかし、現実には諸国家間の政治的な思惑に人間の欲望やエゴがからみ、全世界がすぐに足並みをそろえて対応策をとることがなかなかできないでいる。

たとえば、過去には貴重な地球の資源をあさりまくり、汚染をまきちらして発展してきた先進工業国が、今となって環境保全を理由に、後から追いつこうとする途上国の足を引っばるのはけしからぬという声も出てくる。その一方で、資源が有限なことを知りながらも、今日の暮らしの快適さと生活レベルの維持と、またその上に一層

の向上をもとめる自己中心的な人びとが多いのも事実だ。このような南北格差にもからんだ議論を見ていると、次第に悲観的になってくる。

今後世界の人類は、本当に一体となって資源の節約と環境の保全のために自己の欲望を抑制し、持続可能な社会を築いていけるのだろうか。それとも行きつくところ、それぞれの国なり、民族なりが、本能的に自己防衛に走り、資源獲得のための全面戦争をひき起こし、その結果弱いものから次々に滅亡して、この千年紀が人類最後のものとなってしまふのだろうか。

しかし、いずれにせよ、遠い未来を予知するのは神の領域のことで、とても人間の知恵のおよぶところではないと考えた。いまこの時に生きている人間としては遠い未来がどうなるかを思い悩むより、こうあってほしいと希望し、その実現にむかって努力するしかないのだろう。人間はこの地球上に現れてこのかた、時にはお互いに争ったり、殺し合ったりもしたが、長い間かけて各地ですばらしい文化を産みだし、かがやかしい文明を築いてきた。地球をとりまく自然はまだまだ美しい。これがいつ

までも残ってほしいと思う。人類はいつかは絶滅する宿命にあるとしても、その時が考えられる近さにあるとは思いたくない。そして多くの人が手をこまねいて世界の終わりを待つほど無能ではないし、英知も良識もあると信じたい。いずれは技術がもっと進歩して、地球規模的な天然資源のリサイクルや再生可能な資源の開発も可能になってくるに違いない。

ともかく、人間自身の身から出たさびで地球の破壊が加速され、そこに住む人類とともに学問、芸術、宗教など人間の精神が創り出し、われわれに感動をあたえてくれているものが一切消え去ってしまうとしたら、想像するだけで耐えられない気持ちになる。われわれ人類は生きのびるための努力をしなくてはならないと切に思う。

だが正直なところ、こうして思うのはたやすいことだが、実際に世界規模で地球環境の保全と資源の節約を推し進めるのは容易ではない。たとえ人類の生死をかけてという旗印がかかげられても、広い範囲で強い抵抗があるのは間違いない。人間の欲望は時には死を超えるほど強いのである。日ごろ大量消費に慣れそまった人びとに

自己抑制を強いても、納得させるのはそう簡単ではないだろう。

消費を刺激して生産を高め、景気を好転させるのが経済政策の狙いであつたわが国のような政府などは大変な方向転換を強いられる。また、生活レベル向上への欲求が発明発見を促し、ひいては人類の喜びと経済社会の高揚発展にむずびつくという考え方も、その意味を変えざるを得ない。そこで必要なのは、金と物に依存した生活の価値観を変えろという大事業をすることなのだ。それには世界各国の指導者の強力なリーダーシップに加え、法的規制も必要となる。

こうしてますます国家の管理は厳しくなり、全体主義化が生じ、個人の自由もかなり束縛されることになるかもしれない。資源の有限性が国家の形態を変えたり、国家間の争いのもととなる恐れは常にあり得るのだ。あるいは厳しい食料不足の社会では、老人や弱者はごくつぱしとされてしまい、「檀山節考」の悲劇が再現される事態も否定できない。このような可能性を認めても、あえてやるべきことはやらなくてはならないのだろう。

こうして年頭の考えは、悲観から希望、そして現実の厳しさの認識からまた失望、と揺れ動いてしまった。はじめに記したように、あまり先のことは見当をつけようにも、らちがあきそうにない。どうもこれは穏やかな元日にふさわしくない話題のようだ。今年は前向きに、そしてあまりむずかしく考えずに、まず身の回りから浪費をさけ、文明の利器はできるだけ排除し、ごみは出さないようにしよう。そして今のようにあわただしくなく、平穏で豊かな時間が流れていた子供のころの生活に少しでも戻れるように祈り、地球の傷の回復を待つことにしたいと思うのである。

教育改革は新千年紀スタートの課題

竹内 京一

先ごろ、愛知県内の高校教師らを中心にした教育研究グループ、愛知県実践教育研究会に招かれ講演し、チャ

ーター・スクールをめぐって話し合う機会を得た。

チャーター・スクール (charter school) は、米国でスタートした新たな公立学校の制度のことだ。一九九一年にミネソタ州が立法化して以来瞬く間に全米に広がり、クリントン政権もその設立を後押ししている。日本の中でも教育改革の有力な手法として米国のこの制度を取り入れようという意見が広まっている。

「チャーター」とは設立認可のことで、教師のグループが地域のニーズなどを踏まえ、教育目的を明確化し、州や各地区の教育委員会などから公立学校としての設立認可を得て、学校を設立する。既存の市学校施設を使う場合もあるが、教育方法や学校の運営管理は設立認可を得た教師たちに任せられる。反対に教師たちは教育目的に沿った結果についての責任 (アカウンタビリティ) も負うことになる。当然、所期の目的を達成できない場合は、設立認可は取り消され、学校は廃止されてしまうのだ。

いかにもアメリカらしい制度だと思うのだが、例えば文盲率の高かった地域で生徒の学力レベルを全米平均以

上に上げるのに成功したスクールの例もある。こうした点が落ちこぼれの児童・生徒の救済に頭を悩ます日本の教育現場で注目され、熱心な教師たちを中心に米国の新制度の導入に新たな学校教育の活路を見いだそうとする動きにつながっているようだ。

講演に招かれた愛知県実践教育研究会も、日本の教育の現状を変えるために努力を重ねており、こうした米国の教育現場の視察も行った。講演後の懇親会の席での立ち話ではあったが、彼らは職員会議を「仲良し会」と自嘲して話す。そして生徒の個々の学習成果の到達度に頓着することなく、押しつけられたカリキュラムを無難にこなすことに終始する現実の教育現場を深く嘆息しているようだ。だからこそ教育目的と成果に教師たちが責任を持つことになるチャーター・スクール制度の導入について、「ぬるま湯に浸った日本の教師たちにとって格好の刺激になり、教育者自身がうかうかしていられなくなる」などと肯定的に受けとめる意見が多くなるのだ。

教師たちが手を上げ、地域のニーズや父母の要求にそった目的を宣言し、生徒を集める。そうしたチャータ

ー・スクールの制度では、教育目的がニーズに合うか、ニーズに応える教育ができたかどうかで、教師たちが地域社会からふるいにかけられる。教育者にとって緊張感あふれる制度で、それを肯定するということは、現在の教育システムに日ごろから感じている行き詰まりとの裏腹の関係なのかもしれない。学級崩壊から学校崩壊へと、荒廃の度を増した教育制度の現状に教師たちも悩みは深いのだ。

だから、神奈川県藤沢市では小学校教師らが中心となり「湘南に新しい公立学校を作り出す会」を発足させ、チャーター・スクールを設立しようと運動を進めるようになってもいる。その学校は藤沢市内ならどこからでも通学できる公立小学校で、最低入学年齢（六歳の四月以降）と最終卒業年齢（十二歳の三月三十一日）のみを設定した無学年生、四月の進級はなく、カリキュラムも学年に応じたものでなく個々人に応じたものとし学習を進めるなどの基本構想を持つ。児童個々の学力差が歴然とし、個人レベルの埋め合わせに応じきれなくなった義務教育の現場を改革しようと、現場の教師たちが実際に動

き始めたのだ。

政・財界も、こうしたチャーター・スクールを日本の教育現場に積極的に導入しようと後押しする。昨年七月には社団法人・社会経済生産性本部の社会政策特別委員会（委員長、堤清二セゾンコーポレーション会長）が教育改革に関する報告書「選択・責任・連帯の教育改革——学校の機能回復を目指して」を公表、そのなかでチャーター・スクールについて「多様な公立学校を新しく生み出し、選択の幅を広げるのによい方法」と教育改革の一手法として評価、参考にすべきと打ち出した。

続いて八月には自民党・チャーター・スクール構想等研究グループ（座長、保岡興治衆院議員）が「学校教育の個性化・活性化に向けた方策について」と題した報告書で、いわば「日本版チャーター・スクール」の推進を提言した。文部省もこの自民党の提案に乗り気だという。

社会には偏差値優等生がはびこり、決められたことはできるが、創造性は著しく欠如したエリートが多く、排出“されている。一方で教育現場では、生徒が教師をナイフで刺し殺す事件があったかと思えば、逆に破廉恥事

件を引き起こす教師も多く、教育問題の矛盾が至るところで噴出している。日本の社会にとって新たなミレニウム（千年紀）のスタートにあたり、教育改革が重要な課題であることは衆目一致するところであろう。

だが、チャーター・スクールが日本の教育改革の決め手となるかは別物である。すでに米国では成果とともに失敗例もあったことから、制度の見直しを求める論議が起き始めている。もちろん原点で成功、失敗を談じることはできないが、チャーター・スクールのような制度だからこそ、日本の風土にあったものに咀嚼し導入することが必要と言えないか。

アメリカで流行ったことは五年後に日本でも取り入れられる、といわれ、セカンド・ミレニアムは経済の停滞で締め括らざるを得なかった日本。新たなミレニアムのスタートにあたって、こうした単なる模倣から脱却したものである。ましてや一国の基礎を支える教育問題である。チャーター・スクールは良い手本ではあるかもしれないが、取捨選択しながら日本の社会が求める教育システムを模索する努力をしたものだと思う。あとひと

ひねりが、ポイントになる。

ミレニアム偶感

児 玉 忠 雄

二十世紀最後の年を迎え世界は新たな千年紀（ミレニアム）に入った。そして今世界は世紀末という言葉が相応しい状況にある。世紀末という概念はダンテが十三世紀末の北イタリアや欧州の政治・思想の状況を憂い「世紀末的」と初めて表現したのである。二十世紀末の状況は、有名な十九世紀末と比肩しうるほど大きな政治・経済・社会・思想の混乱と変動に見舞われている。日本は特に深刻で広範に及び、そのインパクトは明治以来最も厳しいものがある。

日本にとって九十年代は「失われた十年」という指摘が多い。マクロ政策の失敗・構造改革の遅れ・少子高齢化への不安が重なり暗い閉塞感が充満している。すで

に進行しているグローバル化・情報革命等環境が激変するなかで、経済・経営システムだけでなく戦後日本を支えてきた社会の仕組みや国民の文化・気質も多くの面で変わりつつある。

このような混乱のなかで私は昨年、会社の顧問となり二十一世紀初頭には会社を退く。四十余年も続いた会社人間から肩書や名刺を失って一介の社会人間・裸の人間になるのである。生活・生き方の激変により否応なく来し方・行く末を考え、人生の見直しをせざるを得ない。世紀末から新世紀へ転換の関門にあつて、この「疾風怒濤」の時をどう生きていくのか、ミレニアムに因んで思い惑いの一端を綴ってみたい。

まず「ミレニアム」冒頭の「ミ」は実・身みのミである。国家も個人ももう背伸びはやめ身のほどを知り身丈みだけに合った生き方に専念することである。まず自身の棚卸しを行い学歴・職歴・肩書といった風袋に覆われた実質・實力を再確認する。その上で先行の環境の変化を見極めそれに対応した生き方を考えるのである。「悟我知彼応変」

孫子の兵法は何も戦争用ばかりではない。この処方箋は個人に留まらず日本国家・社会にも当てはまると思うがどうだろうか。

次の「レ」は礼節のレである。古来「衣食足りて礼節を知る」という格言がある。今や倉廩も実ち筆筭も溢れているというのに、過ぎたるは及ばざるが如しである。子供は身勝手・したい放題、親は経済成長第一主義で仕事人間の家庭無視で躰も失われた。個人・企業ともに犯罪は増加し凶悪化した。政官財三つ巴のモラル崩壊・自信の喪失で日本丸の舵取りも怪しい。その乗員大人子供も節度・節制を失い埒を越えることが多い。もう初心・原点に立ち返り、礼節・モラルの回復を図らねば行く末が思いやられる。

さらに「ニ」は貳のニである。日本は明治以来脱重入欧の追いつき追い越せをスローガンに富国強兵策をとってきた。第二次大戦後は経済重点主義で産業経済つまりは金を軸に成長路線を突っ走った。ジャパン・アズ・ナンバードワンと煽てられ、もう外国には学ぶものはないなどと騙った。やがてプラザ合意からバブルの狂乱そして

悪夢の崩壊その後に続く重苦しい閉塞状況でトンネルは長く暗く未だ出口の明りは見えない。日本は経済マラソン競争で一時世界のトップに立ったが、バブルの崩壊とともに大幅に順位を下げた。おまけに自信まで失ってしまった。まことに驕る平家久しからず、諸行無常なのである。これからは身のほど知らずな一番手は目指すまい。常に二番手を目指し、それをキープすることが、ベスト・ポリシーである。これは出世競争でも同様なのだが、大方のエリートにとっては後知恵で後の祭りであることが多い。マラソンのトップランナーや高い樹には風当たりが強いのである。

そして「ア」は今や何と言ってもITのアである。新しい「知恵の時代」「情報の時代」がIT（情報技術）革命に加速される形で始まった。この正月、企業のトップは、年頭訓示で事業再構築の徹底とITによる経済社会の変化が最大の商機をもたらすとして攻撃の経営に大きく舵を切る姿勢を鮮明にしている。

わが家でも昨年暮れ、突然情報革命が起きた。子供にパソコン一式と東急CATVを導入されてしまったので

ある。今までは何となく敬遠し拱手傍観してきたが、家内外の攻勢に抗しきれず、ついに私もワープロ、パソコン、インターネット、Eメール等のIT事始めに洪々着手せざるを得なくなった。しかしこの関門を何とか通過しないと二十一世紀情報社会の落ちこぼれになってしまう。六十の手習いだがやってみよう。千里の道も一歩からだ。

さて最後の「ム」である。ムは無・夢のムである。日本漢字能力検定協会によると「二十世紀の日本を表す二字熟語」の第一位は「激動」であった。戦争から平和に、高度成長から不況・没落へとこの激動をもたらした所以は、過度の発展志向、つくり過ぎ、やり過ぎにあったのではないか。二十一世紀は、その反省に立って、夢幻を追わず無理、無駄、ムラをやめ節制による減速運転を心掛けるべきではないか。個人の生き方としても無為自然をモットーに流水のごとくありたい。

二十一世紀を目前に耳順の齢となり晩年を迎えている。がむしやらに生きてきて未だ余力・余熱もあるが、

そろそろ死生観をもつべき時期に来ている。美しき晩年を迎えたいものである。それは多くの美しく楽しく満たされた想い出に少しばかりの未完で悔恨の想い出の入り混じったものではないだろうか。チャップリンが「ライムライト」で語るように「希望」と「勇気」と「サムマネー」をもってミレニアム・二十一世紀へ歩みだそう。今年は龍の年である。小淵首相は「蛟龍昇天」と願ったが果たしてどうなることだろう。

「日本経済再生・飛躍」に想う

芦 刈 克

経済の驚異的成長の基盤となったキャッチアップ時代の日本の経営は世界を驚嘆させるほど最高に作動したが、経済の成熟化、情報技術革新、国際化の大波のなかで、かつての長所、成功体験は予想だにし得なかったマインナス方向に働いた。要因の一つに、高い生産性と過小

需要のアンバランス、集団的意思決定によるスピード経済への乗り遅れ等々。

「マーケットイン」「流通革命」が喧伝されて、もう三十年以上になる。大量生産の実現で製品の価格は著しく低下したものの、小売価格には必ずしも反映しないことから、スーパーマーケットが次々誕生。流通革命の担い手としてセルフサービスとチェーン展開、大量仕入れと薄利多売のスーパー販売方式が広まった。その後規模も拡大、コンビニやディスカウントストアなど形態も多様化し、その本質はスーパー方式にあったと言われているが、最近の顧客ニーズの変化は、この延長線上では語れないものがある。

現代は飽食の時代と呼ばれ、顧客は製品の機能よりも本質、自然感覚、好き嫌い、心の安らぎなどを商品選択の基準にし始めている。すなわち、ライフスタイル提案型商品や自然回帰型商品といった生活や精神を充実させる「人をベース」とした商品やサービスが求められている。かつての「消費が美德」といわれた時代から人が人として生きる「生活が美德」の時代へと変わりつつある。

モノの豊かさではなく心の豊かさを求め、知識や知恵を基礎にした社会が到来しつつあるといわれる。

かつて、ハーバード大学のヴォーゲル教授の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という著書で日本経済の成功がえらくもてはやされたことがあった。その日本を代表する生産システムの品質管理（QC）や全社的品質管理（TQC）は、製造工程を中心にした考え方であり、統計的手法を駆使して、三無（ムリ・ムダ・ムラ）などをなくす現場の改善策をアイデアを結集してつくる方法であった。しかし、その時以来、「良いものを作れば売れる」という少品種大量生産志向（プロダクトアウト）的な考え方を、「顧客が好むものを作る」という多品種少量生産志向（マーケットイン）に転換することをマーケットは求めている。日本ではモノに比べてサービス経済化という産業構造の変化が十分に強調されていないからである。

先進国経済はいまサービス経済Ⅱ脱工業化の過程にある。「日本経済は先進国にキャッチアップした。もはや学ぶべきモデルはない」と言われるが、実はキャッチア

ップしたのは製造業で、経済の大部分を占める非製造業＝広義のサービス業は先進国経済、特にアメリカ経済にはいまだにキャッチアップしていないどころか、大きく遅れている。日本経済は着実にサービス化が進み、消費もモノからサービスに比重を移しつつある。その後貿易黒字が増大し、円高が続き、一人当たりGDP（国内総生産）も一時世界最高となったために、製造業の成功を日本経済全体の成功と勘違いしたところがある。

バブル経済の破綻による不良債券の処理に悩む銀行などの金融機関は、その生産性の低さ、国際競争力の無さが明らかとなった。情報通信、運輸、建設、エネルギーなども長年の護送船団行政の保護の下にあって、程度の差はあれ同様の状況にある。

かつてアメリカは日本の製造業の成功をみて、自動車生産のカンバン方式やQC（品質管理）サークルによる品質改善などを日本企業から学んだ。しかも、ただ学ぶだけでなく、例えばカンバン方式をニュープロダクションという理論にまとめ上げ、普遍化までやってのけた。同時に、情報化による効率化も徹底的に進め、その結果

アメリカの製造業は見事によりがえった。

しばらく学ぶことを忘れた日本であるが、今こそ遅れを取った産業分野で、謙虚にアメリカに学んでいかなければならない。もちろん日本流儀を捨てて、すべてアメリカ化せよということの意味しているわけではない。要は厳しさを増しつつあるグローバルな競争環境の中で、打ち勝っていける国際競争力を、いかにして持つかということである。

「二十一世紀はインターネットの時代」と言われている。IT（情報技術）への取り組み方で、人も企業も勝ち組と負け組に二極分化される時代が始まるとも報じられている。古来から古き教えには新時代になっても見習うべきことがたくさんあると言う意味のことわざがある。国・企業・個人が二十世紀の帳尻合わせより、何を新しい時代にとっていくのかを考えることが特に重要であるといえよう。「知識に人の心、文化が融合すると真に卓越した知恵となる」を銘記したい。その意味するところから、ナレッジ・マネジメントという新しい経営理論・手法が、近年欧米で急激に広がりを見せ、日本でも

次第に注目されつつあるという。

ナレッジは日本語で「知識」と訳され、この知識は、人間の持つっている過去における経験の蓄積の中で、価値があると認められたものである、とされる。「組織の中や組織の外にあるこうしたナレッジを、必要に応じ巧みに経営管理し、新しい価値を創造する力（資産）に変えていく経営理論・手法がナレッジ・マネージメントである」と、APQC（アメリカ生産性品質センター）が欧米企業の成功事例について積極的に発言する内容に謹聴すべきである。

こうした事柄に刮目し、新しい知識は社会全体の品質を向上させるため、基本的な人間の本性でもある「他人の知識や知恵に学ぶ」という、謙虚に賢い態度で協働を進め、社会や世界に認められる企業をつくりあげることである。日本企業はそれの実現可能な能力と蓄積を潤沢に保有しているのである。

二〇〇〇年元日のテレビを見て思うこと

三宅 劭

懸念されていた二〇〇〇年問題もほとんどなく、穏やかな新しい年の幕開けだった。年末年始、若いころは志賀高原のスキー宿で、四十代以降は数日間京都の宿で過ごして、神社・仏閣巡りすることが恒例になっていたが、今年は一月中旬から長期間ニュージーランド旅行に出かけるので、久しぶりに自宅で新年を迎えた。

自宅近くの神社への初詣での他は、最近購入したまま読んでいなかった本を読み、テレビで世界各国の二〇〇〇年カウントダウンの瞬間を興味深く見た。

東京都内でも何カ所かでクリスマスとミレニアムを祝うイルミネーションが工夫され、街は綺麗だったが、大晦日から元旦の様子は、いつもの年とそれほど変わってなかった。

それに比べると、先進主要国の大都市、とくにロンド

ン・グリニッチの再開発地区に建てられたミレニアムドームの素晴らしさと、壮大な花火による新しい年明けの祝福行事、ニューヨーク・タイムズスクエアに集まった二百万万人の人波と、ダイナミックなイルミネーションなどには恐ろしいほどのエネルギーを感じた。

また九月に開催されるオリンピックの前景気に沸くシドニーの二〇〇〇年カウントダウンも活気あふれるものだった。

このように、二〇〇〇年を祝う行事に大きな差が見られたのは、現在のそれぞれの国の景気動向によるのか、あるいは二〇〇〇年が主としてキリスト教的な祝いごとのためなのか分らないが、日本だけが蚊帳の外の感じであった。

テレビ取材に応えるアメリカ人が一様に、昨年は素晴らしい年で、今年はさらによくなる、と希望に満ちた話をしていたが、若干バブル気味とはいえ、米国経済が活況で、失業率が過去最低水準を示し、さらにインフレ率が低いという素晴らしい経済状態を反映していた。主要

国トップのスピーチを聞いていても、内容のある話を堂々と話しているのに、小淵首相が、ぼそぼそと原稿を読みながら話しているのとは雲泥の差で失望した。

二十年前の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の著者エズラ・F・ヴォゲル教授が、日本は二〇一〇年ころには良くなると言っていたのは、知日派としてのお世辞だろうか。

好景気に沸く米国経済の申し子のような「シスコ・システムズ」の様子が元日のNHKテレビで詳しく放映されたが、責任者の話では、われわれの経営は、トヨタの「かんばん方式」に教えられたもので、それを高度にコンピュータ化したことだった。過去二十年、日本は多くのハイテク産業のハード面では世界をリードしてきたが、ソフト面、特に情報産業の基盤整備に遅れをとったため、最近の数年間で日米経済に決定的な差がついてしまった。

米国の好景気を支えるキーワードは、インターネット・ストック・オプションの三つといわれている。情報

スーパーハイウエー構想を実現し、民主党の長年の基本方針に反する財政再建を実現したクリントン大統領は、セクハラ・スキャンダルなど次元の低い問題もあったが、後世の人々からは、かなり評価の高い大統領の一人となるのではないか。それに比べると、派閥競争に明け暮れているわが国の政治体質が改善されない限り、日本の明るい将来はない。

若い、優れた素質を持った、実行力のある政治家が、ある程度長期間良い政治をすればその国が良くなるのは、独立後間もなくのシンガポールにおけるリー・クワン・ユーが良い例だ。わが国で国民が首相を直接選べるようになるのは時間がかかるだろうし、また国民の政治意識の改革も大変である。せめて有権者が公選で選べる地方自治体の長に、優れた能力・実行力のある候補者を選ぶよう有権者の意識が変わらないと日本は良くならない。

数年前、東京都知事、大阪府知事に、ともに実質的には芸能人を選んだ愚かさから早く脱却したいものだ。

もう一つ強く印象に残ったのは、同世代の日本の子供たちに比べて、立派な外国の子供たちの姿だ。NHKスペシャル「二十一世紀をなう君たちへ」で見たコソボ、チエルノブイリ、パキスタン西北部のアフガン難民キャンプ、ニューヨーク・ブルックリン地区の、いずれも恵まれない環境にありながら、努力している子供たちがはつきりとした将来への夢・計画を持っているのには感心した。それに比較して、茶髪・ハイソールなどのつまらないファッションに身を固めて、将来に対する何の目標もなくその日暮らしをしているわが国の子供たちは幼稚としか言いようがない。

唯一の救いは、十数年もの間、厳しい環境下でアフガン難民のための病院長として献身的な活動を続けている中村医師と、七年以上もブルックリン地区の恵まれない子供たちのために演奏活動を続けている五島みどりさんの、ふたりの日本人を再確認したことだ。

長寿時代のミレニアムに未来像を想う

大 島 義

生涯現役であり、最後まで積極的に生き、悔いのない生き方を追い求めるのは、長寿者の切なる願いであろう。

自分の身辺を追想すると、昭和六年、産声をあげたこの年に満州事変が起こり、第二次世界大戦への第一歩となったわけであるが、昭和十二年の支那事変とあいまって子供のころから耳にした「満州事変」「大東亜戦争」という言葉も、戦後生まれが日本の人口の半数を超える今となつては、古語に等しいこのごろである。

同世代の人に逢つて「昭和ひと桁?」「ふた桁?」といったその「ふた桁」は昭和十年代の人のことと決めていたのがついこの間のように錯覚するが、今は平成の「ふた桁」が誕生する時代となっている。振り返つてみて、記憶に生々しいのは、やはり敗戦を経験したことである。終戦と言いたいが、我々の年代にとってそんな生易しい言葉でなく、昭和二十年八月十五日はまさに敗戦

そのものであったことを忘れない。

旧制中学二年生であった。国防色の制服に戦闘帽、巻脚絆をつけ、ちゃんとした靴が買えず、両足揃いの靴を履いた生徒も多かった物不足の時代である。敗戦のラジオ放送も訳が分からず、明日からの生活がどんなになるだろうか、ただただ不安の思いだけだったことを想い出す。

今のハイテクを駆使した戦争は、今までのどの戦争とも全く様相が異なっている。湾岸戦争、コソボの紛争もそうであった。豊かさの中に身を置き、ハイテク戦争をテレビゲーム化して見ながらも、かつて爆弾、焼夷弾のすさまじさを思い出して、戦争ほど空しいものはないと、身につまされて見る世代ではなからうか。この世代は学制改革なるものを経験した。今の六・三・三・四の制度が導入されたのは、私たちが旧制中学から新制高校へと変わったところである。

さて、今を考えてみたい。昭和ひと桁は早死にが多いといわれ、新聞の死亡記事を気にする仲間も多い。幸い

私は健康に恵まれているせいか特別の感情も抱かない。しかし、面白くないことがある。それは六十五歳を境にして「老人」と呼ぶ習慣があるからである。気は若くても体力の衰えが起きていることは実感する。だが、それを嘆いてみても仕方がない。自然のままに生きていくのがベストと、気にしないようにして生きたいと思う。

それに「今様の年齢」があることを知り、ますます元気づけられた。昔、人生五十歳、しかし、現在は平均寿命が八十歳を超えているのだから、現在の年齢の三分の二が今様の年齢と思つてよい。定年六十歳は、この計算では四十歳ということになる。働き盛りの年齢である。

若さの秘訣は、次の四つだと、ある人が言っていたの
を思い出す。

- ①ヤジ馬であること
- ②感動すること
- ③実行すること
- ④出会いを大切にする。

このようにして、何事にも興味を持ち、感動し、思ったことはすぐに実行に移し、多くの人との出会いを大切にし、交際を広げれば、脳は活性化し、心身ともに若さを保ち、老化防止の効能を発揮できるのでなからうか

と思う。

今や、大いなる可能性に満ちて、新しい一〇〇〇年、ニューミレニアムが始まろうとしている。近未来の、今の我々の現在の生活から未来について考えてみよう。

二十一世紀に、科学と技術は、想像もできないほどに飛躍的な発展を遂げているであろうと考えられる。宇宙で、地球上と同じように生活することも可能になるであろう。情報技術の発達によって地球は新たな情報空間となり、ロボットや人工知能の技術が種々の分野に活躍していくことになるであろう。

環境、エネルギー、廃棄物など、現在地球がかかえている問題は解決され、環境と調和した快適な生活空間が誕生しているだろう。現在の医学では治療が困難な病気でも、新しい治療技術の開発により解決できると確信してよい生活になっていくことだろう。この期間は、近未来に関すること、もう少し遠い未来、すなわち次の千年間の人間の歴史を考えると、非常に興味深いものを感じさせるし、新しいミレニアムでは、現在は不可能、あ

るいは極めて困難と考えられているものでも実現可能になるかも知れない。宇宙への有人飛行も可能になるかも知れないし、老化を防止して人間の寿命を大幅に伸ばすことができるかも知れない。驚異的な科学の未来像が頭に浮かんでくる。

人類の知識が及ぶ限りの、遠い未来を見ていきたい。最新の成果から思えば、はるか未来においては、想像を絶するような出来事が起こるに違いない。そんなことを考えているのも楽しみである。

宗教心と青年

折戸 常司

「あなたの宗教は何ですか？」発展途上国の赴任先に着任して、初対面の現地の人々と交わす最初の会話でよく聞かれるこの質問に、多くの青年海外協力隊員は「無宗教です」と答える。相手は豆鉄砲を食った鳩のような

顔をして『火星人』ではないかと、しげしげ観察され、怖いものでも扱うように職場に案内されるという。私は昨年まで八年間、国際協力事業団の講師として協力隊員の指導に当たっていたが、赴任先の人々とうまく融け合えなかったと悩む隊員の大部分は、言葉の問題よりも、宗教に関する気持ちがお互いに通じ合えなかったことに原因があるようだ。

日本の青年の多くは宗教に無関心で、寺院や教会は、葬式か結婚式以外には足を踏み入れたことはなく、神社への初詣とメリークリスマスのほか話題にも上らない。特に戦後の高度経済成長によって物質的豊かさに恵まれたものの、親兄弟姉妹、祖父母、故郷との交流は少なくなつて、「自分は何者なのか」「何のために生きているのか」と不安にさいなまれる若者も増えてきている。青年海外協力隊に応募した動機も『自分を探すため』が非常に多い。

独善的なオウム信者、法の華などのカルト信者に若者が多く、ダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』は二百万人以上の女性を中心とする読者に感銘を与えて

ベストセラーとなっている。

今の日本の青年は、自分に自信がなく、自分の存在の証をこの世に残したい―それには自分がどう在りたいかを見出し、その達成感を得たい、ともがいているように思われる。戦後の偏差値教育に追いつてられて育った学生たちは、卒業しても、企業の歯車に自分を埋没させ、リストラに怯えている先輩の背中を見て、二、三年で退職する人が増えているとの報道もある。

確かに、われわれ七十歳以上の日本人が二十代の時代は、西欧に植民地化されたアジア諸国を独立させて「大東亜共栄圏」として繁盛しようとして、軍閥政府の下に生命を賭して戦う「戦場」という場があった。敗戦で、これが木っ端微塵に打ち砕かれた原因は軍事上の敗北も勿論だが、私は「日本の独善的な独り芝居だったため」と思っている。シンガポールに昭南神社を勝手に造成して、現地の人々の心の中に脈々と生き続けていた宗教心や誇りを軍靴で踏み荒らし、日本の皇室を「現人神」として押しつけた無礼を彼らは許さなかった。これはほんの一例に過ぎない。あの時代に、彼らの宗教心に共感し、

彼らの心を尊敬して心からの交流が出来ていたら、戦後の友好関係も違った歴史を展開出来たことだろう。

現在の若者が「無宗教」で、自らの宗教に関心を持たなければ、これからも、諸国民と腹を割った国際協力の成果を挙げ得ないと思う。

ミレニアムに当たり、世界人類は大きな転機に立たされているように思う。政治、経済、文化の諸方面でアメリカのグローバリズムは限界に遭遇し始めている。欧州、アジア、東欧などで、アメリカとは異質な姿が散見される。宗教の異なる中東、アジア、東欧で、アメリカは『人道主義』という「錦の御旗」を楯として民族紛争の調停に乗り出し、自国の利益を念頭に自由主義を押し進めようとしている。

しかし、ASEAN諸国のほとんどはイスラム教を国教とする国であり、インドネシアも九〇%がイスラム教信者で占められている。最近の報道では、アメリカ自身も四〇%がイスラム教信者とのことであり、逆に、同じ旧約聖書を聖典とするアブラハムの宗教のユダヤ教、イスラム教、キリスト教の国々は、これまでの歴史上の恨

み、憎しみの解消に苦悩している。

さらに、東洋では紀元前一五〇〇年からの歴史を持つヒンズー教が、明らかに反人道主義と思われるカースト制度を正当化しており、インド国民の八三％はその信者である。釈迦生誕の地なのに、仏教徒は一％に満たないと言われている。むしろ中国、日本など北東アジアの国は仏教徒が歴史的に多かった。

日本は敗戦後、米軍の占領下に、キリスト教のみが文明国の宗教と思われ、『思想』として輸入されたので、『唯一絶対神』への信仰に対する国民の理解は乏しい。特にイスラム原理主義信奉者はテロリスト集団として恐れられている。民族紛争の報道を聞いても何故に彼らが自分の命を犠牲にしてまで武器を取るのか理解に苦しみ、悲劇の結果の悲惨さにのみ目を奪われてしまう。彼らは「自分の生命」そのものが信仰する神の化身であり、その不滅に自分の生命の永遠性を重ね合わせて、これを確認し合える仲間を『同胞』と呼び、同じ「羊の群れ」と意識し合っている。

日本のように山紫水明の地に育った民族と異なり、禿

げ山が大部分の国土に生まれ、オアシスを求めて遊牧生活をしてきた民族や、一年中風水害と酷暑に悩まされて生存してきた民族にとって、少しでも多くの同胞を仲間として唯一絶対神への信仰を確かめ合うことが、あらゆる生活に優先する関心事なのだ。彼らの信仰を理解することが、心から彼らと手を繋ぐために必要なのだ。

戦後半世紀、復興を夢見て努力してきた日本人は、今や、高度に組織された社会、豊かな生活物資、千三百兆円を超える貯蓄で世界一流の生活を享受している。しかし、「都会砂漠」のなかで、手を取り合う同胞や隣人を失い、若者は生存の目標を見出せないで苦悩している。ミレニアムに際し、我々は青年と共に「宗教」に大きく心を開き、インターネットで同時に多くの情報を共有できる世界の諸民族の輪に「心の同胞」として加わる必要性を痛感している。

「新千年紀」新春ごまめ鱈の放談

古井 米三郎

熊・八 「ご隠居！ 明けましておめでとうござんす」

隠居 「やお揃いで、おめでとうさん。上がって一杯やってゆきな」

熊 「ところでご隠居のところはY2Kとやらで買い溜めなすったんですかい。家の奴は缶詰・カンパン・水・燃料アルコールだ何んだかんだと納戸の天井まで買い込みやがって、どうも田舎もんには呆れらあ。」

隠居 「そうさの、加茂鶴十本と、するめ三把とかつて婆さん呟いてたな」

熊 「それにしても、ミレニアムだ世紀末年だ何んで耶蘇に振り回されねばならんのかね…Y2Kなんざ迷惑至極よね。鼠一匹出やしねえんだから」

八 「メートル法のようなもので、歴史の基準を便宜上西暦に合わせているだけ。要はコンピュータの暦年表示法で起こるかも知れない危機管理ってとこさ」

隠居 「日本も敗戦までは明治五年に制定した皇紀、つまり初代神武天皇の即位した年を元年とした。それがBC六百六十年にあたり、今年は紀元二六六〇年ってわけ、それと、二月十一日を紀元節としていたんだ」

熊 「何んで突拍子もなく君が代・日の丸をあらためて法制化したついでに、皇紀も紀元節も復活すりゃいかったんだ」

八 「熊らしい発想。生物教室のS君が言ってたっけ。大正リベラルに止めを刺した一九二五年からの学校軍事教練開始から六年後に十五年戦争へ。敗戦まで実に二十余年にわたる軍ファッショの拳国洗脳は現代の遺伝子にも影を落としているはず。だから日本の現段階は十五年戦争前への回帰だつてさ」

熊 「何言ってやがんで。手前こそアカの遺伝子をたんまり受けやがって……。やれ九条を世界にひろめようだなんて貌バグも馬鹿も食わねえ夢を見てやがって」

隠居 「まあまあ静かに。個別に事を云々し合ってもきりがねえんで……。ミレニアムの元旦でもあるから、まづ日本の海外文化の受け入れの状況から眺めてみよう

や。現在人類が受けついでいる文化の主流は中国文化とギリシャ文化で、日本および欧州はそれぞれ中国・ギリシャの周辺文化帯とされている。それに日本には仏教、欧州にはキリスト教が文化としても深くかかわっている。中国文化とその仏教の摂取は朝鮮経由ではじまり、後に大陸から直接摂取が続けられて同化し、わが国固有文化へと昇華していった。とりわけ、今日の市民の倫理観にも残っている儒教は徳川幕政の根幹思想であり、明治天皇の教育勅語の原点にもかかわっている。

明治の西欧文明採り入れの特色は、『和魂洋才』にある。儒教の影の濃い和魂はそのままに近代化に邁進した。とくに鎮国明け当時の西欧・ロ・米の帝国主義覇権争いの焦点は、中国・極東アジアに当てられていた。防衛上も富国強兵が国策となった。やがて日清・日露と大国に勝利し、朝鮮を併合、さらに第一次大戦への参加で南進論を展開、アジア唯一の強国となった。その後不況の中で労働運動・左翼思想の徹底弾圧と軍のファッショ体制が固まる。一九三一年柳条湖事件を起こし、十五年戦争へ入る。

一九四五年無条件降伏までには市民も含め未曾有の犠牲者をだし、都市は廃墟となり、生産力崩壊、経済麻痺、飢餓状態の市民生活、そこへ敗戦のショックが重なったわけだ。そしてアメリカの占領・援助下での復興、つづく高度経済成長、無我夢中で頑張ってるうちにアメリカに次ぐ経済大国になっていた、てな感じだな。

まとめてみると、日本の海外文化とのかかわりは、

○千年に及ぶ中国文化と仏教の吸収同化

○明治からの近代化のための半世紀にわたる西欧文明の採り入れ

○軍国体制と文化受け入れ閉塞期

○敗戦以降、占領つづいて軍事・経済アメリカ依存環境での受け身のアメリカナイズ半世紀余

ついでに、風土に強くかわる日本人の特性にふれて置こう。アジア東端の島国、しかも同一言語の単一民族、おだやかな四季と豊かな雨と緑。戦乱といっても権力争い、総じて安全というよりは安心の風土で、西欧流の契約とか保険の概念が育ちにくく理解しづらい風土なんだな。

ということで、日本ほど国家権力にとって国民を同一

ベクトルへ乗っけやすい国も珍しいのだ。とりわけ明治以降の西欧文明の導入・同化、つづく富国強兵、そして全体主義、軍国主義への傾斜、敗戦と経済再建・高度成長、そして経済大国へ、どの局面をとってみても国民が見事にベクトルを合わせてくれるのだ。ただ、くれぐれも自戒しておかねばならぬのは国家権力の強化と全体主義への誘惑だ。

婆さんや。湯呑みをおくれ、熊さん八つあんには盃はむかねえや。

それじゃ締めくくりに新たな千年を踏まえてのわしの新春放言でお開きにしよう。

基本は人類社会が今後とも着実に進化をつづけると言うことだ。たとえば、戦争の世紀とも言われ、二度の世界大戦で大きな犠牲を払った二十世紀では封建主義の痕跡を払拭、帝国主義の後退、地球にわたった植民地の解放独立、さらにはEU体制の推進、何と言っても…民主主義が力強く育ち広がったことだ。米国での黒人投票権の保証も、半世紀も経っていないんだ。進化のスピードは情報化時代に入り、加速間違いなし。

—三〇〇〇年を目指す人類社会の進化目標は—

◎国境なき地球社会……すでにEUが指向、どんどん増殖しているNGO活動、さらに「国境なき医師団」のノーベル賞受賞……が予兆。

◎種別なき人類……日本人にしてもポリネシア系とモンゴロイドの融合の果てとされている。アメリカは移民による多民族国家であり、民族融合のモデルとなるべし。因みに、かのタイガー・ウッズは七種の民族のハイブリッドとか。

いずれにしても、G7も各国政府も、ミレニアムを踏まえた人類社会のビジョンを明確にした上で、それにベクトルの合った二十一世紀ポリシーを打ち出さなきゃあ。

これで新春放談終わり。じゃあ人類の新千年のスタートに乾杯」

熊・ハ・隠居 「かんばい！」。

ミレニアム 年頭にあたつて

松浦 武弘

昨年十二月二十日過ぎに、喪中の友人、七名を除いて年賀状を出したが、その後、五通の喪中案内状を入手した。他方、十二月二十五日には大学時代の友人が癌で亡くなった。教養部五十名のうち、現在までに、五名が他界したことになる。

私も六十歳になり、親たちが亡くなってもおかしくない年であり、私自身も人生の折り返し地点に到達していると、痛感している。

昨年来、年二回一週間ほど休暇を取って夫婦で、一人で生活している義母と私の母を、郷里に訪れることにしてきた。年寄りの話を聞くだけでは能がないので、我々も楽しもうとのこと、昨年六月と十月は行き帰りに京都で三泊した。

一、梅原日本学との出会い

昨年十月下旬、「京都発見」で、初めて梅原猛に出会

い、非常に興味を引かれた。

大学時代、和辻哲郎の「古寺巡礼」を片手に奈良の寺を回ったし、京都の寺も随分歩いた。しかしながら当時の私はただ何となく有名な寺を、仏像を、国宝を、重要文化財を見て歩いただけであつたと認識するに至った。お寺は徳の高い人をお祭りしており、お寺が怨霊を封じ込める鎮魂のための手段であつたなど、夢想だにしたことの無かつた私にとって、梅原氏の説くところは、自分の無知を思い知らされ、ショックであつた。

爾来、およそ三十年前に世に問われた梅原猛の著作も含め、集中的に読みふけた。「隠された十字架」「神々の流譚」「塔」「水底の歌」「聖徳太子」「海女と天皇」「仏像の心」「飛鳥とは何か」「君は弥生人か縄文人か」等々である。

「古事記」「日本書紀」を「何時・誰が・何のために」書いたかを基本に据えて、自分の仮説を証明する、梅原の方法論は素晴らしいの一語に尽きる

大学時代、河野健二教授の「西洋史」を受講したが、先生の話では、専門は「フランス革命」であり、博士論

文は「ロベスピエール」であったと、記憶している。

学問自体が細分化され、専門化され、歴史全体をグロ―バルにとらえることが出来にくくなるのが、一般的傾向であることを痛感した覚えがある。

梅原氏は「記紀」を、本居宣長のごとくすべて真実と受け止めるのではなく、津田左右吉のごとくすべてを否定するのでもなく、考古学、民族学、建築学、美術史学等の成果をふまえて作者・編者の（藤原不比等）本当の意図を探り、その真贋を古代人の意識（フィルター）で解明したが、それが素晴らしいと思う。

二、古代史に対する私の認識

我々が過ごした高校・大学時代は昭和三十年代であり、まだまだ貧しく厳しい時期であった。従って、私自身文学部に進み、古墳の発掘をしたり、嘘八百の「記紀」等の研究には全然興味が無かったし、また当時は文学部学生は就職でも全く不利であった。

私は社会科学関係に興味があり、経済学部を専攻し、下部構造の変化が上部構造の変化を規定する、ということを確認し、人文科学関係に関しては余り興味もなく過

ごしてきた。

現在、世界を動かしている黒いベネチアの貴族の末裔たちを知るにつけ、ロスタイルド、ユダヤに興味を持ち、日本の古代史については帰化人「秦氏」に非常に興味を持ってきた。梅原の「聖徳太子」に、遣隋使小野妹子と百済経由で訪日した裴世清が途次、自国と見間違ふところを経由したとの記述があり、私は、それが将に豊前の「秦帝国」であると確信した。当時、秦河勝は、官位十二階で小徳の位を受け、太秦として近畿に在ったが、豊前秦帝国も彼の管轄下に在ったのでは無からうか。秦河勝が聖徳太子に、百済よりの仏像を下賜され、蜂岡寺（現在の広隆寺）を建立した。この仏像が、かの有名な「弥勒菩薩像」であり、彫刻の部、国宝第一号である。

秦氏の研究も、古代史全般の研究なしには解明できないと考えるに至った。

三、司馬遼太郎、白洲正子の世界

「街道を行く」を全部読んではいないが、奥州・近畿（湖西、湖東、奈良、葛城、吉野、熊野、播磨、吉備）肥前・中津・豊前・豊後・肥薩・壱岐、対馬・奄美、沖

縄は時間をかけてじっくり回したい。

仏教の伝来を、逆のルートで、即ち「朝鮮・中国（大同、竜門、敦煌、西域）ガンダーラ地方・インド・パキスタン・イスラエル」と歩きたい。

妻が白洲正子に傾倒しており、ほとんどの著作を読んでいる関係で、私もかなり読むチャンスに恵まれた。白洲さんは、実際に自分の足で現地を何度も訪れ、本物を自分の眼でしっかりと見据えて書いており、大したものだと思う。昨年、芸術新潮社から出版された「白洲正子全一冊」を読むにつけ、この人は、女より男に好まれた人であると痛感している。

特に「かくれ里」を書かれたところは、是非とも訪れて見たい。

四、古代史遍歴の旅

私は、定年後の最高の生活は「晴耕雨読」と確信しており、四月以降、伊東の一碧湖畔で野菜作りの生活を計画していた。しかし、ミレニウム年頭にあたり、元気なうちに夫婦で年に六、七回は国内、海外の旅をすることとし、晴耕雨読の生活は六十五歳からとしたいと考えて

いる。

梅原猛、司馬遼太郎、白洲正子諸氏は、実際に現場を歩いているが、そのほとんどは車での移動である。私はできる限り足で歩くことにする。

妻と二人旅になるので、ただ抹香臭い遺跡・寺院だけでなく（勿論、妻も非常に興味を持っているが）現実の街も、美しい自然も、十二分に味わいたいと思っている。

中国の黄山山頂で迎えた

ミレニアムの夜明け

柴垣 復生

特別な予定も無く「我が家でのんびり寝正月を」と決めていた矢先に、懇意な旅行社のS君から急な勧誘があった。S君は一昨年の秋「南アフリカ、ジンバブエ、ボツワナ」に旅した時の添乗員で、大変感じの良い優秀な青年。今回の旅も添乗員だということで、早速その場で誘いに乗って、家内と共に「年末年始は日本を脱出」する

ことに決めた。

参加者は総勢十二名。夫婦づれ二組、やもめの男性一名、未亡人など独身女性七名で、平均年齢は恐らく六十五歳前後。皆さんの目的は「黄山で素敵な写真（しょうどく）を撮るため」だと。

十二月二十九日から一月四日まで六泊七日。中国の東邦航空で、福岡空港から上海空港を経由し黄山空港へ。黄山市は上海から南西方向に約一時間、安徽省の大都合である。

因みに、中国の行政単位は大きい方から省・市・県・鎮など、市は県より大きい。

市内で一泊した翌日はバスで、明代や清代（六〇〇年（四〇〇年前）からそのまま残されているという「老街」などを観光したあと、貧しく殺伐とした風景の田舎の街を、幾つか通り抜け走ること約四時間で黄山の麓の街へ。バスが途中の山道でエンコしたのはご愛敬であったが、運転手が携帯電話で連絡を取り、短時間で応援のバスが来た。中国の通信手段もすっかり近代化され便利になったものだと大いに見直した。

翌日はロープウエーで山頂近くまで登り、以後はふうう言いながら険しい山道の階段を登り下りして約三時間。やっと山頂近くのホテルに到着した。パンフレットの案内に、「中国随一と言われるほど黄山は美しい。気が遠くなるような深い谷間にそそり立つ幾多の奇岩や奇峰。山峡に柵引く雲海は古来山水画が誘う幽玄の世界。四季、晴雨、朝夕により風情を変える景観は黄山に滞在しなければその感激を味わえない。この美しい多様な黄山の顔をご覧いただくのがツアーの主題」だと。不便な山頂に三泊する理由を納得した。

ユネスコの「自然遺産」に登録された山岳地帯は、ユネスコの補助金で建設された雄大な規模のロープウエーが三カ所もあり、険しい山道の石段が三万六千段もあるというが、すべては人海戦術で建設されたもの。「さすが万里の長城を築いた偉大な民族」だと、その底力を痛感させられた。中国政府がその開発に大いに力を入れてるのが良く分かる。

一九九九年の大晦日は、ジョッキを片手に大型テレビが放映する「東京のお台場」の年末風景を眺めながら待

つうちに、いよいよ新年幕開けのカウントダウンが始まった。全員が立ち上がり、大合唱「五四三二・ゼロ」と、大歓声の中でついに二〇〇〇年の幕が開けた。

数時間の睡眠も束の間、午前四時半にたたき起こされホテルを出発。防寒具を着込み、懐中電灯で照らしながら真っ暗な石段の山道を約一時間も歩いた。こんな早朝に出発したり、重い三脚を担いで行くのは、ご来光の写真を撮る「特等席」を確保するのが目的だ。写真愛好家の熱意には感心させられたが、家内も「特等席」を確保して待機の姿勢。

待つこと約一時間ほど。そろそろ空が白みだしたが、あいにく曇りが気になる。アチコチの峰からざわめきの人声が聞こえてくる。大勢の愛好家が三脚を構えて待機しているようだ。

突然「ウォーッ」という大歓声が上がった。遥か向こうの岩山の間から、薄雲を透して「真っ赤な太陽」が浮かび上がった。カシャッカシャッと忙しそうに切るシャッターの音を耳にしながら、小生は専らハミリ・ビデオカメラでご来光の撮影を続けた。「不思議な神秘的な太

陽」を見つめながら、自然に涙が溢れ、深い感動に浸った。生涯二度と経験の出来ない、素晴らしい「ミレニアムの夜明け」であった。

性悪はびこるミレニアム

石川 正達

「西暦二〇〇〇年。ミレニアムだというのに、世の中悪くなる一方じゃないの。人間は生まれつき『性悪』で欲望に限りがないから、ブレーキをかけなきゃあね」

「そうとばかり言えないよ。人道主義の広がりやボランティアの働きなど、いいこともたくさんある。人間が安易に文明を広げすぎたきらいはあるけれど、ぼくは人間の性は善なり、という孟子の説を信じるね」

「そんな考え甘いわ。この前友達が集まった時、きれいに着飾ってきた人に『あら美しいわ。とってもお似合いよ』なんて言っておいて、その人がいなくなると『ちょっと派手すぎ。アクセサリーの付けすぎね』なんて本音

をしやべりだす……。ねたみや中傷は人間の本性なのよ。
あなたの会社でもそうじゃないの」

「そりゃあ取引先に社交辞令の範囲内でおべっかを使う
こともあるけれど、仕事をうまく運びたいという善意か
ら生まれるものだよ」

「その会社の仕事だって性悪の本来、資本主義から生ま
れたものじゃないの」

「なんで資本主義が性悪なんだ」

「だって、最少の労力で最大の儲けをあげようという考
えでしょう。ドイツ語で物を『交換する』という
『Tauschen=タウシエン』と『だます』という
『Täuschen=トイシエン』とはウムラウトがあるだけで
同じ語源よ。『とつくらかえる』のと『だまくらかす』
とは、元は同じよ。荀子は『人の性は悪、その善なるも
のは偽なり』と言っている。この『偽』は『人の為す
(つくった)もの』という意味だったのに、今では人の
つくったものはすべてニセモノになっちゃった。短足を
足長に見せようと、厚底靴が流行る。ニセの権化ね」
「環境によって『善』が失われることはあるけれど、孟

子が『惻隱の情』と言っているように赤ん坊が井戸に落
ちかかれば、だれだって無意識に抱きとめる。自然発生
的な行為だ。それは人間の性が『善』だからだよ」

「この世紀末に、それは通用しないわ。コソボの大量殺
人、赤ん坊も平気で殺している。いま地球上で起こって
いるたくさんの方争、殺し合いをみれば分かるでしょう。
日本の政治や行政、企業も偽善丸出し。粛々と審議とい
って強行採決。警察もウソの発表をする。新幹線のトン
ネル事故や臨界事故なども儲け主義のあらわれよ」

「でもね、ミレニアムについて思うことだけれど、キリ
ストが再臨してメシアの王国を地上にもたらし、やがて
千年の黄金時代が来るといふ。キリスト教が迫害と逆境
にあった時に生まれた『至福千年』の信仰なんだ。これ
も人間の性が善だからこそ生まれた信仰じゃないかな。
心を美しくして二〇〇〇年を迎えようと儀式や催しが繰
り広げられる」

「それだって、ミレニアム記念とか謳って、儲け主義に
利用しているだけじゃないの。『世紀末』では儲けからな
いからね。第一、キリスト教だって、人間性悪なり、か

ら始まったと思うわ。旧約聖書の、アダムとエバの話にしたって、蛇に惑わされて禁断の木の実を食べてエデンの園を追放された」

「アダムは初めは惑わされなかった。エバが惑わされて、木の実を食べアダムにも食べさせた。女は性悪かもしれないが、男は性善だよ。夫がありながらよめく女性も多い」

「浮気するのは大抵男じゃないの。男の甲斐性なんて言っちゃって。モーゼの十戒にしたって、姦淫、殺人、盗奪など、人間性悪だから戒めているのよ」

「でも、いま世界はヒューマニズムを大切にして善の世界を広げようと努力している」

「そんな考えだから、増長して犯罪は増える一方。最近の犯罪の荒っぽいこと。特に少年犯罪。少年法に守られていると思うているせいか、年々凶悪化している。これからの犯罪で一番恐いのはコンピューター・ネットワークに侵入するハッカーじゃないかしら。コンピューター社会になると顔が見えないから恐いわ。犯罪も冷淡残酷になる」

「戦争も武器を取って向かい合って戦うのじゃなく、サイバー・ウォー（電腦戦争）になるんじゃないか。敵のコンピューターに侵入してネットワークを混乱、破壊する。宇宙船を航行不能にすることだって起こりかねないな」

「荀子は、人間は性悪だから、それを正すには、人のふみ行うべき道、礼義を厳しくしろと言っている。コンピューターにしても、お互いに顔が見えるようにしたり、はじめから侵入あり、との前提で侵入を許さない機器を作らなきゃあ。少年犯罪も人権、人権なんて言っていないで、名前や写真も公表。残酷な殺人犯罪は被害者の立場に立って、少年といえども死刑にするくらい厳しくしないとね」

「そうすると、ぎすぎすした社会になってしまうね」

「みんなが礼義さえ守れば、ぎすぎすしない明るい社会が生まれるのよ。それには小さいころからの教育、家庭の躾けがいちばん大切なのよね」

「最近の小学生は怪物のようだ、と先生が話してくれた。授業中、先生が話していても知らん顔で教室中を歩き回

る。学ぶ気なんかありやしない。世界の躰け調査でも日本がいちばん悪いという。母親は大体三十代。バブルを経験していてブランド志向なんだな。ものの溢れた社会で、子供たちに欲しいものは何でも与え、我慢することをさせない」

「その我慢と忍耐が必要な。家庭でしっかり教えないとね。家庭教育こそ二十一世紀の課題だわ」

「よく分かった。ぼくも性悪説に転向するか。やがて遺伝子研究が進めば、“人間性悪”が解明されるかもしれないね」

〈注〉この会話は執筆者夫婦の会話でないことをお断わりしておきます。



痴呆の告知

榎本 喜三郎

大変気の合った九十二歳の先輩がいる。仮にA氏としておく。旧友の会合などで会うと「身体はどこも悪いところがない。医者がびっくりしているんだ」と意気軒昂である。そのA氏から最近電話があった。「久しく会わないが、近く昼飯でも一緒にしないか」という。「結構ですなあ」「日にちをきめておこう。来週の月曜日でどうかな」。

その日は金曜日だった。「結構です。じゃあ次の月曜日の昼、貴方もよくご存じの、銀座の鳩居堂の前、十二時きっちりですか」「ああ、近ごろは行かないが、昔からの鳩居堂だね。十二時ね。ウン、わかった。じゃ

あ月曜日ネ」で電話をきった。

そして一日おいて日曜日の朝、またA氏から電話。「エノさん、キミと何か約束したような気がするんだが・・・」「明日の月曜日の昼ですよ」「で、場所はどこ?」「銀座の鳩居堂前です。十二時きっちりですよ」「アアそう。鳩居堂で十二時ネ」「そうです。忘れずにネ」で、電話を切る。

すると、その同じ日の夕食時「エノさん、何かキミと約束したような気がするんだが・・・」とまた電話。こりゃおかしい。痴呆の始まりは、食事したのを忘れて、直ぐに催促するそうだが、食事の約束を忘れるのも痴呆の始まりではなからうか。

さて一夜明けて月曜日。私は約束通り十二時少し前にその場所に行った。来ていない。十二時になり、十分、十五分と過ぎていく。地下の公衆電話へ行っている間に来たら困る。遂に十二時三十分になる。思い切って地下へ降りて公衆電話でA氏の家へ。直ぐに受話器が外され

てA氏の声。「どなたですか」。やっぱり家にまだ居るんだ。けさ電話するんだったと後悔しても始まらない。「やあ済まん、済まん、何か今日約束があったような気がしていたんだが、誠に済まん。こんど会ったときこの埋め合わせするよ」。

次の会合は十五日あとの三月九日にある。当日少し早めはその席に行って幹事のH君に、今日A氏が出席するかどうかをきくと「昨日の夕方、私の家に電話があつて、都合がついたから出席すると、前の欠席通知を訂正してきましたから、きつと来られるでしょう。食事の方も用意しました」と言う。やがて時間が来たが、A氏だけがまだ来ない。「こりやあ危ないぞ」という私。「いや、昨日の夕方わざわざ電話くれたんですから大丈夫でしょう」と言う幹事。

何はともあれと、幹事はA氏宅に電話したが、何回リンがなつても出ない。待ちくたびれて会を始めた。会が終わりに近づいたころ、私はA氏宅に電話した。今度はすぐに受話器は取り上げられた。事情を話すと「いやあ、

会は知っていたんだが、他に用事ができて、外出したため、会場へ電話することもできなかった。誠に申し訳ない。会費は後で払わせてもらおうから……」と言っただけで終わって、「この前は済まなかったなあ」という期待した言葉は聞かれなかった。がしかし、これだけではA氏の痴呆も取り立てて言うほどのことはない。何しろ九十二歳だから、ということになるところだが、実はこの間、食事の間に幹事から聞かされた話に私は愕然とした。というのは、実はこうである。

前回、約束をすっぱかされた日の前日の日曜日に、前に書いたように、A氏は午前にも一回と夕食ごろにも一回、同じように翌日鳩居堂前で十二時に会う約束をコンファームする電話をかけてきた。その二回目のときに「エノさん、実は僕、K君が近ごろ出てこなければならぬ集まりに出てこないのです、彼がどんな状況でいるのか、案じているんだ」という。K君はA氏より三十歳ぐらいいも若い同僚で、昔同じ子会社へ派遣されて何年間か一緒に仕事をすることがあり、A氏が可愛がっていた部下だった。「そんなに心配なら彼の家に電話してみたら

いいでしょう」「そうだね。そんな手があるね」とA氏。
「そんな手があるね」なんて言ったのに、私はその時ちよつとおかしいと感じた。

その時はそれ以上の話はなく、私は翌日の鳩居堂前でのすつぽかしを食ったのである。ところが、この三月九日の会合でこの話題が出たので、私が「A氏は昔の部下だったK君のことをひどく案じていたが・・・」と言うと、幹事のH君が私の言葉を遮って、「榎本さん、そりやおかしいですよ。K君は一カ月前の二月八日にガンでやられて十四日に葬式があつたのだが、その葬式にAさんが参列したので、私はその場でAさんに会いましたよ」と言うのである。「エエッ」と私は絶句した。

もはやA氏が痴呆という病気に侵されていることは疑いない。私はこのとき「他人の介護無しには社会生活が出来ない状況になったら、その人は痴呆である」という言葉を思い出した。長年仲のいい先輩として付き合つて来た人。前記の子会社には私も一緒に派遣された仲。も

つとも私はずうつと東京にいたが、下関支店でのA氏やK君の苦勞は知っていた。この十年以上、私とA氏とは東京に住み、何ヵ月かに一回は二人だけで食事をし、旧友の集まりで顔を合わせりや、やあ、やあと手をあげて、互いの健康をよろこび合つた仲である。殊にA氏のいつもの決まり文句「どこも悪いところがないんで、医者がびっくりしているんだ」と意氣軒昂としている姿を思うと、彼に痴呆を告げるのは慘^もいと憚られる。彼にこの一文を見せても、恐らくは「そんな馬鹿なことがあるもんか」とその場で大笑いする彼の朗らかな声に吹き飛ばされるにちがいない。ガンの告知とちがつて、痴呆の告知では、私が妙なことを言う奴だと思われ、本人に嫌な思いをさせるだけで終わるだろう。さりとて、彼の家族にこれを告げることもあるまい。何にしても、もう彼とは社会生活を共にすることが出来ないことになったのだ。元氣に生きている長年の友を失うのだ。何とかこの病氣の進行を、今のうちに止める手はないものか、考えるとただ暗然として胸を抱くばかりである。

「桃太郎伝説」は中国起源？

志 田 渉

子供のころ親から与えられた絵本の中に、「桃太郎」の童話があった。生来疑い深い私は、これを一読して、この物語が何を言わんとしているか、大層気になった。桃太郎は、鬼どもから襲撃されたわけでもないのに、なぜ鬼が島を攻略して、鬼どもが貯えていた金銀財宝を奪い取ったのであろうか？ いろいろ考えているうちに、この物語は、舌切り雀やカチカチ山のような勧善懲悪の訓話ではなく、日本古代の史実を脚色した伝説であろうという結論に達した。

その後、このことはすっかり忘れていたが、終戦後、それまでタブーになっていた邪馬台国女王卑弥呼ひみこに関する研究が解禁されて以来、いろいろの学説が雨後の筍のように出てきたときに、私は、この伝説は、卑弥呼と密接な関係を持っていると考えるに至った。私の論拠は次の通りである。

現代日本人は、地域差はあるものの、ほぼ全員が彌生人と縄文人との混血であることは、定説となっている。現代日本人の体には、約八割の彌生人の血と、約二割の縄文人の血が流れていて、八割の彌生人は、約五割の中国系渡来人と約三割の韓国系および北アジア系渡来人を含んでいるものと私には思われる。

この中国系渡来人の最高指導者であった人物こそは、いわゆる「桃太郎伝説」の主人公であつて、「桃」は、明らかに中国起源を示し、「太郎」は、中国系渡来人の首長を意味して、邪馬台国初代女王卑弥呼とその弟、男王の父であつたと思われる。また、お婆さんが桃を拾った川は、恐らく長江を暗示し、さらに、お供のイヌ、サル、キジは、桃太郎の軍勢を構成する江南人の三部族であつて、これらの記述から、桃太郎が長江下流の南岸地方出身であることを我々に物語っているのではないか？

そのほか、キビだんごは、江南地方産出の雑穀を材料とする軍用糧食であつたであろう。鬼が島は、九州から近畿にわたって散在した縄文人の建設にかかる数十の小王国であり、これらの国が当時朝貢していた中国の皇帝

に対する献上品は、童謡に出てくる「金、銀、さんご、綾錦であって、桃太郎が噂に聞いて、この財宝の掠奪を目的とする大遠征を企図したと考えられる。

桃太郎の大遠征は、大成功に終わり、その結果、縄文人の諸王国は、すべて滅亡した。桃太郎は、莫大な戦利品を携えて、故国の江南地方に帰還したが、そのとき、従軍した三部族の兵士たちのうち、倭国に残留する希望を持った多数の者は、滅亡した縄文人諸王国の旧領に彼らの新王国をそれぞれ建設したように思われる。

しかしながら、優秀な指導者を欠くこれらの新王国は、すぐさま内乱を開始した。いわゆる「倭国大乱」は、数十年間続いたが結局、桃太郎の娘卑弥呼とその弟を、江南地方から呼び寄せ、彼女を統一邪馬台国の初代女王に推戴するに至ったのであろう。その後数世紀を経て、これら江南地方よりの渡来人の子孫は、桃太郎の偉業を偲んで、この「桃太郎伝説」を後世に伝えたものと考えられる。もちろん、これは、全くの推測に過ぎないが、このように解釈することによって、私が幼時この物語について抱いた疑問は、一切解消したのである。

身代わりハスキー

岸 本 義 生

ハスキーは猫の名前である。しかし我が家の飼い猫ではない。黒の野良猫で、一日に数回現れては餌にありつき、庭先でいかにも心地よさそうに毛づくろいをすますと、昼寝の後、いつしかどこかに消える。夜のねぐらは分らない。このような暮らしをしている猫を「そと猫」と呼ぶらしい。彼らは自分の縄張りに二軒か、三軒の餌場を持つといわれる。

ハスキーは、我が家の三代目の「そと猫」である。五年ほど出入りしていた二代目「モーリス」が不意に姿を消したあと、この猫がやってきた。一九九三年の夏、喉頭ガン治療のため入院する三日前のことだった。

彼は、見るからに老いさらばえていたが、人間には馴れており、人恋しいのか、足元にまとわりつく。やせた体はすっかり薄汚れ、毛のつやもなく、目脂はつけているし、歯も少しかけていて、まったく「哀れ」を絵にか

いたような猫だった。しかも、彼はかすれた小さい声しか出ない障害をもっていた。

私はそのころ、次第に声がかすれ始め、やがて一呼吸してぐっと唾をのみこまないと、話すことが困難になっていた。しかも声は出てもかすれ声だった。

病院の検査で声帯に悪性の腫瘍がみつかり、入院治療を追られていた。主治医からは命に別条はないが、再検査の結果では、声帯の切除も覚悟してほしいとの宣告をうけていたので、もし声を失えば……の恐怖におののく日々だった。家族にも不機嫌になるし、猫のことなどは眼中になかった。

ところが、妻が突然言った。

「この猫はあなたの身代わりになって、声が出なくなっているのかもしれない。きっとそうだわ。なんとか助けてやりたい」

声がよく出ないハスキーボイスなので、私たちは彼を“ハスキー”と名付けた。

手術、放射線、抗ガン剤による七十日の治療のおかげで、私は幸いにも声を失うことなく家に帰れた。ハスキ

ーも、妻の努力ですっかり元気をとりもどし、毛もつややかになっていた。気のせいか、前よりも声も出ているように思えた。

妻の身代わり説を信じ、声の守神としてハスキーを可愛がった。どこに寝ているのか分からないが、夜おそく帰宅しても出迎えるようになった。

やがて、ハスキーに天敵があらわれた。近くの新聞屋に新しく飼われた若い“ニーゴ”である。ハスキーが自分の縄張りになっている我が家に、ニーゴが侵入を繰り返す。それを防ぐハスキーとの壮絶な戦いが始まるが、年老いた彼には力なく生傷の絶え間がない。

唸り声や叫び声を聞くと、棒を持って天敵ニーゴを追いかけた。近所の人には、白髪あたまの老年の男が、猫を追っかける姿はどうみえただろうか。そんなことはどうでもよかった。まさにハスキーの傷は、私が傷つけられた思いだった。

新聞屋がよく遅配したり、配達を忘れるのを口実にして、他の店にきりかえた。にくいニーゴに対する、せ

めてもの仕返しだった。やがてニーゴーがぷつりと姿を見せなくなり、ハスキーには平安の日々が続いた。そのうちにニーゴーは自動車に轢かれたとの話が聞こえてきた。

ハスキーは、我が家に入出入りを始めてから三年後の冬に死んだ。かなり体調をくずしていたので、気にはなっていたが、暫く姿をみせなかった。近くの家から虫の息との知らせがあった。妻とともに急いだ、もう死んでいた。その家には、高校と中学の兄妹がいて、風邪薬をあたえていたが、効き目はなかったと聞かされた。彼らはこの猫を“ドンク”と呼んでかわいがっていたことも知った。ハスキーはここでも「そと猫」だった。彼はその家の庭に丁寧に埋葬された。

猫には猫かぶり、猫なで声、猫の目のように、猫ばばなど、あまりよい形容はついていない。なかなか本性をあらわさないからだろう。猫は、犬のようにベタベタせず、気にいらなければ勝手な行動をする高慢や、孤高さが好きだという人も多い。私もこの部類に入るかもしれない。

エジプトでは神とあがめられたが、西洋に行った猫たちは、ペスト退治に貢献するまでは、魔女の使いとして虐待されている。これは、猫の持つ神秘性を語る多くの話によるものだろう。

我が家でも、二代目そと猫“モーリス”は、彼を可愛がっていた母が、入院先で瞑目したその日に姿を消し、二度と帰ってこなかった。どうして母の死がわかったのだろうか。偶然にしては出来すぎではないか。そと猫も死期をむかえると、可愛がられた家から姿をかくし、孤独に死をむかえるという。いじらしくもあり神秘的ではないか。

私はこれらの猫の生態をかいまみて、その神秘性を信じるようになった。今は小猫の時にやって来た兄弟が四代目「そと猫」を元氣につとめている。若いせいか神秘性はまだ見えない。

与謝野ギャラリーと川端記念館

中洲 靖雄

日本の近・現代文学史上偉大なる歌人・与謝野晶子、ノーベル文学賞受賞の作家川端康成は、いずれも大阪が生んだ逸材であるが、これら二人の文豪の他にも、生まれは東京・日本橋人形町ながら関東大震災を期に関西に移住してきた作家谷崎潤一郎の館など、文豪の記念館が大阪近郊の堺と茨木及び阪神間の芦屋に点在している。

たまたま、これら大阪生まれの文豪二人の記念館を歴訪する機会があった。まず与謝野晶子であるが、その生涯についての色々な資料や遺品、そしてその作品を展示している与謝野晶子ギャラリーは、堺市の南海電車堺駅前ポルトス・センタービルの十六階にあり、ミュシヤ・ギャラリー堺と並存する形で見学者を迎えてくれる。

堺の老舗菓子匠の三女として誕生した晶子は、明治、大正、昭和の三代を、歌人として生きてきた近代日本

の文学史上屈指の女流歌人だったが、一方では女性としては超人的な能力を持った人物だったようである。いかに文学的才能を、生まれながらにして兼ね備えていたにしろ、夫・与謝野鉄幹との間に五男六女の子供たちをもつ母親であり、一家の主婦であったことを考えると、その並外れた能力には驚嘆のほかはない。

晶子の作った歌は五万首とも言われているが、かの有名な歌集「みだれ髪」は明治三十四年八月に出版されている。夫となる鉄幹へのあふれるような愛と、青春のみずみずしさを歌い上げたものとされ、当時の若い世代の圧倒的な支持もあって、浪漫主義の代表作になったとさえ言われたようだ。そして、この「みだれ髪」には、晶子が持っていた考え方の源があるとも言われているのである。

晶子の実弟も、また大変な文学青年だったらしい。常日ごろ姉弟間で文学を論じ合えるような家庭環境だったようだ。このたった一人の弟が、明治三十七年日露戦争勃発と共に徴兵され、旅順口に派遣されることとなった。この弟の身を案じ、書かれたのが世にも有名な詩「君死

にたまうこと勿かれ」である。この詩を反戦的という人たちがいたが、末子の弟の身を氣遣い、その安全を願う姉の率直で切実な願いを歌ったものであり、わが身に置き換えてみても当然のことであろう。周りの目を気にしない勇氣もまた立派である。

また、与謝野晶子は近代文学の作家としての才能も並々ならぬものがあつた。源氏物語、紫式部日記をはじめとする古典文学に傾注し、その現代語訳にも情熱を燃やしたのである。また、女性の地位向上、権利等に積極的な評論活動を展開、さらに、女性教育問題にも精力的な役割を果たし、大正八年には鉄幹らとともに文化学院の設立に寄与している。

まさに幅広い分野に次から次と挑戦し、偉大な歌人、作家、教育者として活躍するほか、女性の自由と自立の確立にも貢献するなど、十一人の子供の母親としても力強く生き抜いた与謝野晶子は、まことに立派であり、常識を超える能力の持ち主であり、努力の人だったといえる。

一方、明治三十二年大阪市北区天神町で誕生した川端

康成は、二歳七ヵ月で両親と死別したことから、茨木市に住む祖父母のもとに引き取られて育った。しかし、その祖父母も相次いで死別、十五歳で天涯の孤児となつてしまつたのである。そして、平成十一年は生誕百年にあたる。幼いころからひ弱だった上に、祖父母の過保護があつて、康成は外で遊ぶよりは家で本を読むことが好きな、内気で社交下手な性格の持ち主だったようだ。茨木中学二年生のころに早くも作家を志し、創作も始めていた。また新聞社に投稿もして、その野心を固めていたようである。かくして大学卒業後、新感覚派の作家として文壇に登場。「伊豆の踊り子」で一躍脚光を浴びることになる。

また、このような境遇の寂しさを、康成は文学に没頭することで慰め、美しいものへの憧れで癒していたとされるが、肉親との縁の薄い生い立ちは、川端の作品に深く影を引いているようにみられている。しかし、川端はどこか孤独な面がありながら、片方で相反するものを持ち合わせているとも見られていた。一方では日本の伝統的な静なるものを持ちながら、片方では近代的な一面

も持ち合わせていたとされるのである。具体的には日本ペンクラブの会長として幾多の新人を育て、また国際ペンクラブの副会長として、東西の文化交流に尽くし、貢献しているのだ。

昭和四十三年、日本人として初めてのノーベル文学賞を受賞するという快挙をなしとげたが、その授賞式には首に日本の文化勲章をかけた黒紋付の羽織・袴姿で臨み、ノーベル賞を受けている。そして受賞記念講演は「美しい日本の私」と題するものだったそうだ。

そんな川端も、昭和四十七年自ら命を断ち、その生涯を終えた。文学館の責任者によれば、事故死だったとする見方もあるとの話だったが、果たしてそうだったのだろうか。やはり自殺説の方が正しいと思うし、文豪といわれる人たちは、何か行き詰まると死を選ぶ傾向が昔から強いようだ。つい最近も、あの文芸評論家江藤淳が、最愛の妻の死と自分自身の病魔の進行が引き金になったとはいえ、自らの命を絶ったのが耳新しいところである。昭和六十年五月、康成ゆかりの地茨木市に川端康成文学館が設立され、その著書、遺品、書簡、原稿のほか、模

型、写真その他ゆかりの品約四百点が展示されている。いずれも一見の価値のあるギャラリー、記念館であった。

中国河南省の国有塗料会社訪問記

吉 寄 清 巳

私は日本シルバーボランティアズから一九九九年の六、七月、鄭州油漆廠に派遣された。主な仕事は、中国の技術員たちとこれまでに開発してきた技術を説明し、試作実験を指導することにある。

鄭州は、上海から空路一時間三十分。市行政区の人口は六百万、市街地に二百万人が住む。中国で最大と称するこの町の卸売市場に行くと、大手の国有油漆廠の販売店、欧米の建築用塗料を売る店が軒を並べている。なかでも、自動車補修塗料に小回りのきく販売方法を持ち込み、一躍台頭してきた私企業の店は活況を呈していた。

日本の塗料会社は、まだここには進出していない。

鄭州油漆廠は、大手の塗料会社である。千二百名の従業員と、二百五十名の年金支給者を抱えている。技術員は二百二十名、販売員は計画経済時代の名残で百名と少ない。国有企業の多くは赤字をたれ流し、レイオフをしている現況のなかで、鄭州油漆廠は昨年度五百萬元（一元＝十三円）の利益を計上、レイオフをしていない優良企業である。従業員の月給は地区平均の六百～七百元であるが、ボーナスは黒字決算を反映して、年間六千～一萬元と高額である。

しかし、実情は、技術レベルの低い汎用アルキド樹脂塗料を大量生産して利益を出しているにすぎない。このような汎用塗料は、低労賃で、しかも原料の乾性油を自作する農民会社が激安品で挑戦してくる。また、開発担当技術員が二十六名もいるのに、塗料用アクリル樹脂を内作していないのは驚きであった。看板製品となるべきアクリル系塗料は、専門メーカーから樹脂を購入、それに顔料を練り合わせ、調合するだけの簡単な作業である。このようなやり方では、技術力の低い私企業でも模倣品

を、しかも安価に作れるだろう。国有油漆廠は計画経済時代の歴史と、伝統のある商標だけでは弱肉強食の市場経済のなかで生き残るのはむずかしい。独自の塗料開発が必要である。私は油漆廠の幹部、この会社を管掌している省、市の政府役人たちと話し合い、今後の協力を約束した。

油漆廠は鄭州工業大学の日語先生、化学系副教授（英語）を通訳として雇ってくれた。日語先生は二十四歳の王さん。彼女の授業は夕方が多く、昼間は私と行動を共にしてくれた。通訳代は一日につき百元である。彼女の月給は五百四十元というから、通訳代はかなりの臨時収入になる。

王さんが西安外語大学に学んだとき、授業料は年に七百元であった。しかし、西安の生活費は月に八百元を必要としたから、お金の工面に苦労した。国の命により西安からウルムチに派遣されていた林業専門家の父母は、貧しい中から送金してくれた。両親の恩は一生忘れないと語る。最近、大学の授業料は更に値上げされた。鄭州工大は年に三千元である。収入の少ない農民は、将来に

期待する自慢の子供の教育費にますます苦勞することになった。

王さんは昨年六月、卒業と同時に工大に就職した。中国の戸籍制度では、学業を終え、就職した地が永久戸籍となる。従つて彼女の戸籍は、生まれた西安から鄭州に移動した。彼女の恋人は、工大建築学科をこの六月にトップの成績で卒業、北京の会社に就職が決まった。彼はだれでも欲しがらる憧れの首都戸籍を獲得できたのである。

二人はデートしても、結婚の話をしてしまうとまらない。鄭州戸籍の王さんは北京に戸籍を移せず、彼と同居できないからである。仮に、彼女は工大を退職して北京に行ったとしても、北京で再就職できる見込みはない。また、教員契約の違反料一万元を支払わねばならないのである。王さんは「彼は好きだが、結婚はできない」と嘆く。私は「クリントンの言う人権侵害の戸籍制度だ」と言うと、彼女は「国家の決定に人民が従うのは当然だ」と答える。この国では、もっと子供の欲しい夫婦でも、一人っ子政策がよく守られているのである。

日差しの強い大陸の夏は三十五度Cを越える。油漆廠は昼休みを二時間半とり、従業員は自宅に帰つて昼寝をする。私も宿泊している大酒店で、昼食のあと昼寝をした。大酒店は油漆廠から歩いて五分ほどのところにあるが、道路は車で危ないと、朝、昼、夕、工場の車で送迎してくれた。その必要はないと運転手に言うが、上司の指示だから、と決めた時間に迎えに来る。

私と同行した妻は、大酒店のレストランで食事をした。二人の食事は二菜、一汁、ビールと主食で四十〜五十元と安い。上海であれば、一菜で五十元以上は取られるだろう。メニューの漢字は難解だ。オーダーに時間がかかる。注文した料理はどのようなものがくるのか興味津々であった。私らのお気に入り、鉄板の上で焼いたすきやき風の牛肉、鉄板うなぎ、それに湯（スープ）。どの湯もうまい。特に鶏卵、豆腐、トマト入り湯と、米飯の組み合わせは飽きがこなかった。

妻は午前中、油漆廠に顔を出して無事を報告、午後は筆談で町に出かける。ときどき王さんの日語授業に招かれ、先生気取りで若者と談笑、人生相談にも乗るようだ。

町角に泥工（左官）、木工（大工）、土工（土木作業員）、塗装などと、板切れに書き、職探しをする失業者を見かける。彼らは十元で一日働く。

私たちは休日、仕事仲間と観光地にドライブをして方々を見て歩いた。帰国するとき、廠長（四十二歳の若手）、油漆廠の行動を監視している党書記（五十代の女性）から滋養強壮剤の高価な朝鮮人参と鹿の角をみやげにもらった。謝謝。

遺伝子を確認して満足

八木 大介

私は孫が遅い。息子に子供がいなせいもあるが、娘に出来た三歳の男の子が唯一の孫である。近くに住んでいるのと、パパさんの実家が遠い（宇都宮）こともあって、三日に明けずやって来る。それもジージの車の送り迎え付きである。可愛い盛りだが、ジジババはくたくた

になるまで振り回される。

この前、デパートの食堂へ連れていったところ、レジで勘定を払っているうちに飛び出していった。慌てて追っかけると、ちゃっかり幼児教室のPRの窓口に座って、女の先生に勧誘されていた。私が駆け寄ると、女先生は「おジイちゃまですね。本当によく似ていらっしやる。内孫さんですか」と聞いた。「いや、娘の子供です」と答えると、「どうしてそんなに上手く隔世遺伝が起こるのでしょうかね」と不思議そうな顔をして、孫の顔と見比べてた。説明を始めると面倒くさいので、「そんなに似ていますかね。七十歳も年が離れているんですよ」と、はぐらかしておいたが、初めての見ず知らずの人に見事コピー振りを指摘されたのは驚きだった。これまでも、スーパーなどで、ベビーカーを押していると、「赤ちゃんはおじいさんそっくりですね」と言われたことはあるが、商売人のお世辞半分と受け止めていた。それが今度は行きずりの状態で、ジジイ／孫の関係と見破られたのだから、満更でもない。

普通、遺伝素質は親から子供に伝わるとされているが、

哺乳動物の場合は甚だ複雑らしい。特に人間は、DNAの知的部分が多いので、遺伝形態は極めて複雑になる。

サラブレッドの馬主に聞いた話だが、競走馬の血統には二つあって、一つは優秀な父馬の子供。この確率は、五〇パーセントと言う。そうしてもう一つは、優秀な種馬の娘のオス孫。この場合娘馬は競走能力は低くて良い。父馬の競走力の遺伝子は劣性で、潜在しているが、子馬には配偶馬の優秀にかかわらず、自分の父馬の遺伝子を体現させると言う。この確率は二五パーセント以下で、しかも（人間の場合は）祖父さん・娘・孫とも同じ血液型でなければならないというから、確率はますます低くなる。

いずれにしても、当人にとっては、自分の遺伝子が孫に体現したと言うのは嬉しいことである。もちろん私と孫は違っている点も多い。眉の形はパパさんそっくりだし、髪の毛が茶色く猫毛なのはババア似である。悪さが激しいのは娘の血を引いている。しかし、大半はジジイのコピーのようだ。私の母は、現在九十六歳で健在だが、孫の動きを見て、平八郎（私の本名）の小さい時とそっ

くりだと言う。「こましゃくれていて、外向的で、ちょっとの間もじっとしていない。この子の教育は難しいよ」。九十六歳になっても、ひ孫のことまで気になるらしい。

昔から男の生きがいは、生きた実績を残すことと言われている。具体的には、事業の確立と後継者作りである。封建君主が何十人もの子供を作ったのも、この目的に尽きる。お世継ぎが無いための他家断絶は最大の悲劇だった。これは社会的な影響以外に、男の達成感阻害による絶望感が強い。たとえ事業には成功しても、後継者に恵まれないれば悲劇が増大する。豊臣秀吉が典型的な例だが、徳川家康も家光に恵まれて安心立命を得た。戦後でも、松下、トヨタ、ソニー、ホンダ、サントリイ、ダイエーなど、事業確立とともに後継者の優劣が、歴史の評価を決めている。

戦後の日本はサラリーマン化したので、事業とか後継者などという男のロマンは軽視されがちだが、それが現在、中高齡サラリーマン層の欲求不満や白けの原因を作り出している。

「いったい俺の実績は何なのか。何のためにこの世に生まれてきたのだ」

「サラリーマン人生はそこそこまぐ行つたが、いつて振り返ってみると、取りたてて残るものはない。組織の歯車に終わっていたのだ」

サラリーマンは、実績や後継者問題には遥かに遠い存在である。「虫けら同然」と絶望的な諦観の境地に腐っている時に、孫の存在が出現した。

「俺の遺伝子は引き継がれた」

この安心感と満足感は何物にも代え難い。毎日、豊臣秀吉を凌駕した優越感に浸っている。

女房の囲碁

宮川 政一

女房が囲碁を始めて十数年になる。彼女はカルチャー・センターでペン習字を習っていたが、ある時、

「私、ペン習字をやめて、囲碁を習うわ」

「何で、この年になってから、勝負事などを……」

私は面食らった。勝負事は頭が柔らかい年齢のほうが覚えやすいし、上達も早いと聞いていたからだ。

「そうじゃないのよ。あなたが会社を辞めたら、一緒にできるもと考えたら、囲碁しかないと思ったの」

ありがたいことだが、どうも先まで考えすぎだ。

—そして何年かが過ぎ、私が会社をやめたので、一度手合わせをして驚いた。なんと自分の陣地も固めないで、私の領地に攻め込んでくる猪突猛進型だ。実に活発な打ち方だが、気がついたら自分の陣地は隙だらけ。

だから、女房が力を入れればいれるほど、勝負にこたわり、勝つまでやめようとはしない。

「もう夕方だし、腹も空いてきた。また明日にしよう」
「駄目よ。こんな負け方では。もう夕食なんかどうでもいいわ。さあ、もう一番……」

なんてことになり、私が負けるまでは夕食はお預け。このままでは掃除も洗濯もあぶないし、家の中はガタガタになりそうだ。仕方がないので、囲碁のパソコン・ソ

フトを買ってきて相手になってもらうことにした。

囲碁というのは、そのルーツは遠く、インドか中国といわれている。我が国には平安時代に入ってきて、戦国時代に織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などは当時の本因坊に師事し、または軍師として迎えている。江戸時代には武士の間で広く行われていたし、戦前は職業軍人などに好まれ、将棋とともに勝負事の最右翼だった。

女房も勝つ面白が出ると、週に三度も高槻から京都に出掛けて練習するようになり、新聞社が催す囲碁大会にも、友人たちと出るようになってきた。

それが七年前、対戦相手が弱かったのか、二、三回続けて三勝一敗の成績で、五級の認定書を貰って得意満面となって帰ってきた。日曜日のNHK囲碁番組も欠かさず見るようになる。

「この人、そんなところに石を打ったらあかんがな。それより横の黒石を早く取らな……」

など解説者気取りで、テレビの囲碁に没入している。

ところが翌年になると、どうしたことか勝てなくなつた。いわゆる一つの壁というのだろうか、アマチュア・

ゴルファーが百のスコアを切って、九十の壁に突き当たると同様であろう。

だから、どの新聞社の囲碁大会に出ても、いつも一勝三敗か一勝二敗の成績で、しょんぼりとして帰ってくる。

「今日もまた、子供と当たったの。子供は嫌いよ。横に親がついていて、うるさく応援するんだもの。もうあの会には行かないわよ」

なんて毎回のように愚痴をこぼしながら翌朝になると、機嫌を直して外出の用意をしている。どうやらこの病気は、しばらく治ることはなかった。

それから二年の歳月が過ぎて、ある新聞社の囲碁大会があった。

「どうだった。今日の成績は」

「それが大変だったのよ。なんと三勝一敗の成績で、三級を飛び越えて二級の免状を貰ってきたの。今日は初めから調子がよくて、午前中に三連勝してしまったの。四回戦は負けだけれど、子供に当たらなかったのがよかったみたい。私は子供に弱いから」

貰ってきた大きな筒の中には、日本囲碁連盟の堂々た

る二級の認定書が入っていた。

それから暫くの間、女房の成績は良かったり悪かったりで、パツとしなくなつた。春の大会の前日のこと、練習から帰ってくるなり、

「もうアカンわ。新しく入った人にも負けるの。明日の大会も自信がないわ」

帰るや二階へすぐに上がってしまうのだ。だから、今度の大会は、私は多くを期待せずに、

「いつもの早打ちの癖を出さずに、ゆっくりと、盤の形勢を見ながら打つたらいよいよ。二勝ぐらい……」

女房の囲碁は、考えずに早く打つ癖がある。その結果、勝てる試合を何度失つたかしかない。それだけを注意すれば、二勝ぐらいはできるだろうと私は踏んでいた。

そもそも、囲碁は戦略を考えるのが勝負であり、将棋は戦術を究めるのが勝負の分かれ目といわれている。戦前の軍隊では、前線の部隊で行われるのが将棋。参謀部などで打たれるのが囲碁だといわれた。

だから、女性の囲碁というのは、昔はなかった。囲碁は花札やサイコロやトランプのように、短時間で勝負の

つくゲームではない。だから、買い物や食事の世話や育児などが多い主婦たちにできる趣味ではなかった。その上、昔から女性は感性に左右されることが多いので、じっくりと作戦を練る勝負事には不向きといわれている。それが戦後四十年、生活が豊かになり、子供の手も離れた女性は、パチンコや競馬などにも入りこんできた。

だが、スリルと金を賭けるのはいやだという主婦は、囲碁や将棋や麻雀などに楽しさを求めてきたようだ。それを新聞社やデパートのカルチャー部門が見逃すはずはなく、さっそく取り上げて講座を設けた。タバコの煙がもうもうとする街の碁会所に入るのは嫌だった主婦たちも、カルチャー・クラブは結構な場所だっただろう。初めは社交的な講座も、彼女たちが進歩すると飽き足らなくなり、新聞社の主催する囲碁大会に出た。勝てばクラスが上昇するので、趣味から本格的な囲碁になり、現在の人気になったものだと思われる。女房もそのひとりである。

初めは私と同等に打てばよいと思って習っていたのが、私を凌駕する^{りようが}と、囲碁連盟の階級を目標とするよう

になった。

「私は一級になったら、囲碁はやめるわよ」

なんて控え目だったのが、昨年の春、二日間の大会に出て、ついに一級になってしまった。私は、女房が別の世界へ行ってしまうような気持ちになるようだった。

「運が良かっただけよ」と遠慮がちに言うが、その言葉の端々には、何か自信が見え隠れするのだった。

「今度は、いよいよ初段だな」

「なんとか頑張つて、取つてみせるわよ」

なんとも頼もしい女房の言葉である。

漢詩と詩吟を愛して六十年

黒崎 昭二

昭和十二年ころである。東京市の目黒区に住んでいた。海軍を予備役になった父は民間の会社勤めしていた。そして、趣味で熊本出身の渡辺緑村師範主宰の皇風会とい

う詩吟道場に入っていた。折から支那事変勃発。海軍省の要請により、故郷の新潟県での海軍意識高揚のための巡回講演によく出かけ、多忙なようだった。その際に、詩吟を交えながらの話が相当に好評だったらしい。いつも上機嫌での帰宅だった、と母に聞かされたのを憶えている。

家では、日曜日午前中に近所の子供たちを集め、詩吟を教えていた。紅茶や菓子を出して。小学四年の息子の私も、その中に入れられ、みっちり漢詩を丸暗記させられ、発声も練習させられた。正直のところ、あまり面白くなかったが、父の目が怖くて、さぼれなかった。最初に教わり、憶えさせられたのが菅原道真の「重陽後一日」。

去年今夜侍清涼

秋思詩篇独断腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜余香

天神さまが作ったのだと言われ、ふふーんと思った。次が「九月十三夜」。父の故郷の英雄、上杉謙信の作。

霜滿軍營秋氣清 數行過雁月三更
越山併得能州景 遮莫家鄉憶遠征

意味はあまりよくは分からなかった。

中学に進んだ。大東亜戦争が始まる。漢文を習うようになった。漢詩も分かり出した。このころ父は大正大学の詩吟部の顧問もしていた。毎月八日の大詔奉戴日は、早朝六時に明治神宮の宝物殿の前に集まり、整列し、合吟するのが恒例。題目は「国体篇」。岩崎行親、札幌農学校出身の偉い教育者の作。長編の詩で、吟じ始めると十分以上もかかる。夏ならよいが、真冬だと真つ暗で、厳寒の中での吟詠である。オーバーなし手袋なし。吐く息は白く指先はかじかむ。いくら気合を入れていても辛かった。父は倅を心身の鍛錬と称して必ず連れて行く。大学生と並んだ少年にとり、極めてきびしい修行だった。結果としてやり通した。満足感が残り、一種の自信となった。

中学も上級生になり、漢詩の素晴らしさが少しずつ分かり始めた。先人の所感や人生訓的なものだけでなく、

自然を描写したものにも興味が乗って来た。「泊天草洋」などの頼山陽の詩は、名調子で自ずと口ずさみたくなる。

雲耶山耶吳耶越 水天髣髴青一髮
万里泊舟天草洋 煙橫蓬窗日漸沒
瞥見大魚波間躍 太白当舟明似月

こんなに短い漢詩の文句が、徳富蘆花の傑作「自然と人生」の中の名文に匹敵する鮮烈な感銘をもたらす。

戦争が終わった。学業を終えて社会人となった。製鉄所の技師となる。北から南まで随分と地方を転勤して歩いた。仕事には没頭した。休日には山紫水明の地へ、つとめて遊びに行った。職場は勿論、地元多くの人たちとよく付き合った。その折々の挨拶の中に、得意の漢詩も含め吟詠もした。早い話が余興と言ってもよからう。日本のもあれば、中国のものもある。場の雰囲気即した詩を選び、吟じて雰囲気盛り上げる。社員教育などでは最もふさわしい詩として広瀬淡窓の「桂林莊賦示諸生」

を例にあげて紹介した。職場の一体感と人間関係をあらわした極めてすぐれた表現のものとして。

休道他郷多苦辛 同袍有友自相親

柴扉曉出霜如雪 君汲川流我拾薪

宴会に臨んでの冒頭挨拶では、李白の「山中與幽友酌」を示し、まず詩を吟じてから、快く飲んで交歓してほしい、と喋った。共感を得たようだ。この詩は近年、さる大手の酒醸造会社の広告宣伝文句の中に出ている。

兩人対酌山花開 一盃一盃復一盃

我醉欲眠卿且去 明朝有意抱琴來

後年、日本能率協会主宰の洋上研修の時に団長として上海の近くの蘇州に行った。張継の「楓橋夜泊」を中国人に話したら、喜んで記念碑の前に連れて行ってくれた。

月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

真つ黄色の壁に囲まれた寒山寺は、この詩により有名であり、訪れる人が絶えない。鐘楼と湖水が印象的だった。

今や仕事から離れ、悠々自適の身になって十年ほどになるが、依然として漢詩には興味があり、唐詩選集などを好んで読み吟じてもいる。ただし白楽天の「長恨歌」のとき極めて長い詩は、目を通すだけで精いっぱい。

中国の歴史は古く、読むほどに奥深く面白い。その要所所に諺があり教訓がある。それを詠んだ漢詩も数多く残っている。味わえば味わうほど楽しみが湧いて来る。最後に、珍しい漢詩を紹介しよう。五十有余年前、名誉の戦死を遂げた帝国海軍・山本五十六提督のもの。真珠湾の攻撃が成功した後、昭和十七年の作品。

艤艦覆海決雄雌 皇國存亡在此時

謀制機先虜軍滅 檣頭高掲日章旗

もうどう うみをおおうて ゆうしをけっせんとす

こうこくのそんぼう　このときにあり
はかりごと　きせんをせいして　りよぐんめつし
しようとうたかく　かかぐにつしように

龍の髭考

上　澤　準　一

一、事の次第

多摩丘陵の一角、南向き斜面に家を構えて十七年になる。宅地ならぬ山林に家を建てたので、近所数軒それぞれ林の中である。家の裏側も夏は檜や櫟の緑陰に恵まれるが、冬は枯れ落ち葉の北山になる。建物のすぐ北側は何本かの木を切って明るい空間ができたので、出入りの庭師に芝を張ってもらった。水やりをしたり、落ち葉を掃いたり努力したが、半日陰のせいかな三年ほどであえなく荒れ土手と化した。

建物の北二メートルくらいの幅だが、丹精の後が枯れ

芝ではやり切れない。庭師に相談すると「龍の髭を植えたらどうだ。苗なら、南の崖下の大地主の屋敷に大株がいくらでもあるから、頼みに行つて株分けして貰えば良い」と、いとも簡単に言う。結局、挨拶にだけは行ったものの、その根回しから株分け作業、運搬、植え付けまで庭師を煩わすことになる。

なかんずく植え付け作業というのが半端ではない。株分けして貰ってきた苗を更に一本一本根分けして、地面にあけた親指大の穴に深々と差して植えるのである。庭師の「岩さん」の江戸前職人気質におんぶして二人三日がかりの大作業になった。

縦横約五センチ間隔で龍の髭グリーン・ベルトが出来上がり、ひと夏越えれば何とか隙間が埋まるくらいに殖えてくれるかと期待をこめて水やり、草取りから施肥までしっかり相努めたつもりが、翌年の春には見事に裏切られる。落ち葉の蔭から頼りなく現れた龍の髭は十センチ、場所によつては二十センチ間隔に疎らにちぢこまっている。

これではならじと、改めて地主屋敷からこんもりした

数株を貰い受け、根分けして今度は自分で間隔の空いている所へ植えた。そしてひと夏ひと冬越えた翌春、またもや落ち葉の陰から元氣な龍の髭の姿は見られない。

しかも、等間隔どころか、あちらこちらに、やや太めの株を残して、後はいとも頼りない隙間だらけの一本株、ひよろ株まばら集団である。

二、転機

もうやめた。後は野となれ山となれ！ 年末の落ち葉掃きもいい加減に数年が過ぎる。

ある年、家の西側にある石段小道を裏山へ登って行く、一番上と次の段の縁に龍の髭のやや元氣な小株が息づいているではないか。そういえば数年前、まばらになった集団を補強した時、幾株かを石段に捨て植えしておいた奴だ。そうか、石段の縁なら元氣に生きられるのかと、またまばら苗を引き抜いて石段の三段目から下の両脇に、三本くらいずつ固め植えしてやる。

二年ほどして、石段組が着々と株を太くしているのを確かめ、更に下まで数段、まばら集団から植え替えた。

まばら集団はほとんど姿を消して、ところどころ中株を残すだけとなる。

それからの五年ほど、勤務先の定年退職やら、思い立った資格試験やらに追われて、裏山のことも龍の髭のこともすっかり忘れてしまう。

そしてまたある年、落ち葉掃きが始まり、家の前、南側の道路にたまる落ち葉を捨てに裏山に通い出して、ふと気がつく、石段の縁というより両側にこんもりとした龍の髭の大株が列をなし、段をなして繁っている。半日陰とはいえ、石段は各段ごとに日が差して効率が良い。水捌けの良い中では「へり」の水分は適度に保たれる。叢生と称する繁みになって立ち上がれば、落ち葉に覆われても、すぐに顔を出せる。初夏には花をつけ、暮れには実を結ぶ。

三、印象・雑考・参考

田舎育ちのガキのころ、山裾を潤すせせらぎの土手縁や墓地の石垣縁に、やわらかい濃緑色の繁みを列ね、ちよつと触って見たくなる風情を漂わせていた龍の髭。秋の終わりがろ繁みの裾をまさぐると、丸い碧色の実を抱

いている。その艶やかな輝きには、えも言われぬ魅力があつて、誰かにとられそうな気がする。そつと手をのばしては、競つてポケットに詰つ込んだものである。

主人の思惑とは別に、石段べりに適地を見つけた龍の髭が、次に選んだのは玄関前の櫟の木の根元である。種がどう運ばれたかは不明だが、気がつくと、ふさふさとした中株が一株、根元に生まれていた。更に四〇五年たった今、それが十株ほどの群落となっている。

この辺では「龍の髭」と呼んでいるが、植物辞典を引くと「じゃのひげ」としかない。

単子葉植物綱ゆり目ゆり科ジャノヒゲ属、常緑の多年草となっている。ちなみにゆり科にはアロエ属、ネギ属、スズラン属、ヒヤシンス属、オモト属、チューリップ属、ヤブラン属、オリヅルラン属、ユリ属など、素人には意外な植物が仲間に入っている。じゃのひげの根の膨大部は干して「麦門冬」となり、そのメタノール・エキ스는抗炎症作用がある。

「じゃのひげ」は本邦では北海道から九州まで、朝鮮半島や中国にも見られる。山地の樹蔭に自生し、人家で

も栽培される。暑さ寒さ、水分日照、雑草、落葉と、結構神経質な植物である。秋の落葉は毎日払つてやるが、その度に首を振つて喜んでるように思える。欲目と言ふべきか。

四、結び

我家の前庭・裏山には、ゆり科植物は四種類、ジャノヒゲ、オオバジャノヒゲ、オリヅルラン、ヤブランである。「じゃのひげ」は大株七十株ほどになっているので、ゆくゆくはこれを二百株くらいにまで増やしたいと努めている。辰年のミレニアムに因んで。

晩秋の最上川

遠藤 俊也

強い風だ。東にある山岳地帯から日本海に向かって吹いている。バスでここ最上川下流の高屋乗船場に着いたときのことだ。

けさ銀山温泉の宿を出るときは快晴で風は穏やかだった。テレビでは、昼ごろから雨が降ると言ったが、風については何も触れていなかった。それが、いま、空はどんよりとして雲の行き来が激しく強い風が吹いている。

わたしたちツアーの一行四十五人はここで川下りの船に乗り込んだ。一時間余りの航程だ。定員五十人の大きな遊覧船はエンジンの音も高くまず上流へと向かった。窓から外を眺められるので風は気にならない。

川の両側に山が迫って来た。左岸は少し開けたところに人家が見え列車も走っている。右岸は山また山で、大半が原始林だ。黄橙色とその間を僅かな緑色が晩秋の山を彩っている。そのなかに、落差二百二十三メートルの「白糸の滝」が一筋白く光っていた。

マイクを手に周囲の景色を説明していた船の法被姿の若い衆が、大きな声で最上川舟唄を歌ってくれたが、お世辞にも上手とは言えない。拍手も少なかった。抑揚のある民謡特有のトーンが全く出ていないのだ。

この辺りの最上川の流れは雄大だ。川幅は百二十メートル。現在一メートルの減水で、澄んだ川の水がゆっく

り流れ湖水のようだ。水深は一番深いところで十二メートルあるという。やはり大河である。

その昔、芭蕉がこの川を舟で下ったときは、ちょうど雨季の最中で、水嵩が増し流れも速かったようだ。彼は新庄の宿を出たのち、この上流にある本今海から舟に乗り、約二里川を下って草薙で陸に上がっている。当時の小さい手漕ぎの舟ではさぞ大変だったろう。このときの「五月雨を集めて早し最上川」はさすがに名句だと改めて感心する。

最上川には、寒河江川、鮭川、最上小国川など大きな支流が数多くある。「集めて」と芭蕉は表現しているが、最上川のこの特徴をよく知っていたに違いない。たくさん支流の水を集めるからこれだけの豊かな水量と速い流れになるのだ、と言いたかったのだろう。

わたしたちは船から上がり、右岸にある外川神社でひと休みした。風はまだ強く、神社の石畳の参道を埋めつくしている茶褐色の落ち葉が歩くたびに舞い上がった。

小さな土産物屋が一軒店を出していた。こんなところで商売になるのだろうか。船の人に聞いてみたら、遊覧

船が全部ここに寄るから結構売れていると言う。

「仙人堂」と刻まれた石碑が川辺に建っていた。神社の横の石段を上がつたところにその跡があり、芭蕉も立ち寄つたらしい。義経の従者のひとり常陸坊海尊がここで皆と別れ、庵に住んで仙人になったという伝説に因んでこの名があるとのことだ。

この神社の奥一帯の山々は江戸時代からいまに至るまで一切の伐採が禁じられ、原始林がそのまま残っているという。

船はここから川を下る。途中、右岸の山裾ぎりぎりに、肩を寄せ合つたような数軒の古い屋根が見えて来た。船の若い衆の話によればこうだ。

——昔は五、六所帯の村人が住んでいたが、去年の末には年齢をとつた男二人だけになってしまった。この二人は仲が悪く喧嘩ばかりしていたが、今年初め一人が亡くなり、いまでは加藤という七十六歳の老人一人が残っている。

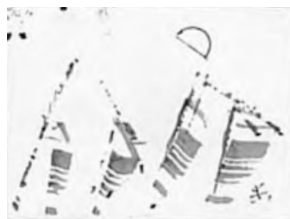
山での猟の獲物、川でとつた鮎や鯉などの魚と、わずかな年金が彼の生活を支えている。犬を四匹飼っている

が、裏山からときどき現れる月の輪熊を追つ払うためだ。見て分かれるとおり、電柱が一本だけ残っていて電気は来ている。対岸への交通は、岸につないであるあの木舟一艘によるほかない——。

この話を聞いていると、いまだそんな生活があるのかとやり切れない思いがした。それに比べ、都会で何一つ不自由なく暮らしている自分は何とありがたいことか。

しかし、どうだろう。物欲もなく、人付き合いから生ずるストレスもなく、毎日自然を相手に生きていれば、心は私たちより遙かに豊かであるはずだ。一度加藤という爺さんにあって、彼のいまの心境を尋ねたい気もする。

(平成十一年十二月)



師走の京都を歩く

—五条坂から蛤御門まで—

深尾 嵐山

最近、仕事の関係で、毎週末を京都で過ごしている。生まれ育った京都、青春時代を過ごした京都が、古希を目前にした私に、新鮮にみえる。なつかしさを通り越して…。

去る十二月のはじめ、十八年間パーキンソン病を患った従姉が、病魔との闘いに疲れ果て、八十四歳で逝った。野辺の送りの悲しみのうちに終わり、東京に帰る妻を京都駅に見送った。

パーキンソン病みて十八年従姉逝き

孫とひ孫の長き葬列

常宿にしている「京都ガーデンパレス」に地下鉄で直行するのをやめ、歩いて帰ることにした。本稿は、その

日曜日の午後の散策の記録である。

五条坂から鳥辺山へ

伝統と現代のハーモニーを誇る京都駅から、北東に歩く。八条口の多目的ゾーン「アバンティ」、烏丸口東端のオシャレな「ルネッサンスビル」、地下街の「ポルタ」を後にして、塩小路通り、河原町通り経由五条大橋に到る。

古い石の道標があり、「これより五条坂」と刻まれている。五条坂をのぼりつめて、東大路通りとの交差点に、東本願寺の祖廟「大谷本廟（東大谷）」があり、その北側に隣接して、鳥辺山実報寺の墓地がある。そこにある「北村家の墓」に詣でることを、今回の散策の目的の一つとした。

墓守りとの対話

私の父は、深尾家の九人兄弟の末っ子で、同郷の北村家三姉妹の三女と結婚した。北村家の姉二人は、すでに結婚していたので、父は北村姓を名乗ることを約束して、

結婚を許された。しかし、この約束は守られないまま、北村の両親は、相次いで他界した。父は、晩年になって、罪を償うべく北村家の墓を建立し、長男である私は、この墓を守ることになっている。墓石は、水垢で黒ずんでいた。タワシで擦ってみたが、きれいにならない。老墓守は、昔の磨き砂か、研磨機が効果抜群という。

続けていわく、「雨のアカはとれへん。そやけど、恥やおへん。年代を経た貫禄です。アカはとらんでもよろし」。ありがたく承っておいた。擦るのをあきらめた。

六はらさん

鳥辺山をあとにして、西北の方向に小路を進み、鴨川の東岸、川端通りに達する直前に、「六波羅密寺（通称、六はらさん）」がある。私は、西国三十三カ所第十七番札所でもある「六はらさん」が好きた。小じんまりとして、風格がある。天曆五年（九五一年）、京に悪疫が流行した時、空也上人は自らが彫った十一面観音を洛中にお連れし悪疫退散を祈った、と伝えられている。真言宗智山派の古刹、応仁の乱で焼失した西光寺が始まりで、

平清盛木造僧形座像が寺宝である。この辺りは、平安時代の末期、平家一族が邸宅を構え、世に六波羅政権と呼ばれていた。いまは、民家が軒を連ねている。鴨川に出る。右手前方に「南座」が見えてくる。京の年中行事の掉尾を飾る「吉例顔見世興行」が、十二月一日から二十日まで行われている。近くに、阿国歌舞伎発祥地碑がある。隣に、にしんそばの「松葉」、少し東へ四条花見小路西に、新装なった、葛きりの「鍵善」には、常時長い列ができています。

木枯らしの六波羅密寺過ぎ行けば

南座ありて年の暮れ近し

というわけで

南座の近く、四条大橋の一つ南の団栗橋を西へ渡ると、みそぎ川、先斗町通りを経て、高瀬川の東岸木屋町通りに出る。その団栗橋の対面に、鴨川に面して建つ立派な六階建のビルが、人の目をひく。「というわけで」という大きな看板が気になる。犬の散歩の老婆に、あれは何、

と聞くと、「ラ・ブ・ホ!」と、やはにかみながらの即答。答え方が気に入った。そのつもりで観察すると、老若のカップルが手に手をとって出入りしている。きつと、「……というわけで、行かへんか?」「そうやなあー、ええなあー」などとなるのであろう。納得。

新京極を過ぎ、富小路を上がり(北上し)、蛸薬師通りと交わるところに、中学の同期生が経営する、創業百数十年の老舗旅館「千切屋」がある。当時の腕白小僧も、着物が似合う経営者になっている。しばし、立ち話で旧友を温める。

幕末の志士も泊まりし「千切屋」の

五代目当主はシャンソン歌う

上京区烏丸通り下長者町上る龍前町六〇五

京都御所蛤御門前

これは、千切屋を出て、帰り着いた常宿の「京都ガーデンパレス」の住所である。碁盤目状に区切られた京の町並みは、私が住んでいた五十年前と変わらない。郵便

番号簿をみると、例えば、東京の港区、世田谷区などと比較して中京区、上京区、左京区などは前者の数倍のページ数を費している。郵便番号は町名によるが、その内訳説明として、上る(北へ)、下る(南へ)、東入る、西入る、が追加的に記載されている。

私は、今でも、子供のころと同じように、東西南北の「通り名の唄」を口ずさみながら、行先を確かめ、距離をはかりながら歩いている。

京都御所蛤御門くぐりゆく

和装の少女京は夕暮

「姉三六角蛸錦」のわらべ唄

今も残れり京の町には

(平成十一年十二月二十五日 記)

白寿、米寿、喜寿

中川 十郎

二〇〇〇年を控えた一九九九年、私がこれまでの人生で公私共にご指導を受け、大きな影響を与えてくださった三人の人生の師が、それぞれめでたく白寿、米寿、喜寿を迎えられた。

十二月五日に白寿の誕生日を迎えられた五島茂元東京外国語大学教授は、私のゼミの西洋経済史の指導教官。ロバート・オーエン研究の第一人者で、今でも研究を続けておられる。当時、五島先生は皇太子殿下（現天皇陛下）の和歌の御指南役で、宮中新年歌会始の選者、召人もされていた。明治天皇御集編纂、靖国神社献詠歌選者、昭和万葉集選者でもある。歌誌「立春」主宰。島木赤彦に師事。昭和初年、短歌革新をめぐりアララギ派総帥斎藤茂吉と論争。プロレタリア短歌運動を主唱。戦後、東京歌話会、日本歌人クラブ、現代歌人協会を主宰するな

ど、和歌と経済学の研究と二足の草鞋をはかれ、両方に秀でておられた。五島美代子夫人も、美智子妃（現皇后陛下）の和歌の先生で、ご夫妻とも宮中と御縁が深かった。五島茂経済学博士は就職推薦状を巻紙に毛筆でしたためられ、会社の人事関係者が感激することでも有名であった。

先日、九十九歳の白寿のお祝いに参上した際、先生に長寿の秘訣を聞いた。「心を清くし、感謝の気持ち忘れぬこと」「三食、パンとチーズ、赤ワインを嗜むこと」が健康の基とのこと。

卒論執筆の際、資料、情報収集の仕方を厳しく鍛えられた。教えを守り、京大図書館でイタリア文献目録を収集、さらに当時珍しかったイタリア経済の原書を数冊イタリアより直接輸入し、上野国会図書館に入り浸りで『二つの大戦間のイタリア独占資本主義の研究』を仕上げ、先生にお誉めのことばを賜ったことを思い出す。その後、今日までこの卒論を越える論文を書けないのは学者の端くれとして情けない思いだ。

白寿の記念に、先生に吟詠いただいた次の和歌は、一

生心に刻んでおくつもりだ。

高みには 遠く過ぎ行く 音のして

われのいのちの 光るおもいす

雪山の えぐれし巖に 霧たてば

ただようごとし 愛といふこと

夜を徹す 幾夜の仕事 かつがつに

火のごときもの 見えしかともおもう

五 島 茂

昨年八月、米寿の誕生日を迎えたステヴァン・デディエル博士は、スウェーデン・ルンド大学の客員教授で、ビジネス・インテリジェンス研究の世界的権威である。同博士とは、一九九〇年十月、パリで開催の「国際ビジネス競合情報会議」に、お互いにスピーカーとして参加して以来の友人である。博士にお招き頂き、九一年と九年の二回にわたりルンド大学大学院でビジネス情報について講演する貴重な機会に恵まれた。

九二年二月に東京で開催した国際ビジネス競合情報大会に、博士をキー・ノート・スピーカーとしてお招きし、

初訪日を喜んでいただいた。その後も博士のご紹介で、オーストラリア、中国、チリ、クロアチアなどで講演させていただいている。九九年十一月クロアチアのザグレブの情報会議でスピーカーとしてご一緒したが、とても八十八歳とは思えぬ元気で、そのバイタリティーに圧倒された。

博士の長寿の秘訣は、「すべてに興味を持ち、一生勉強すること」「奥さん以外にいつも恋人を二人以上もっていること」。後者はいかにも北欧的発想だが、教師の端くれの自分には、日本ではとても実現困難だと、残念ながらあきらめざるを得まい。

ブラジル駐在以来、二十二年間にわたり公私共に人生の師としてご指導をいただいている小野田寛郎元陸軍少尉は、昨年三月七十七歳の喜寿を迎えられた。お祝いに、ご夫妻を渋谷の劇場で行われたインド古典舞踊にお招きし、喜ばれた。

お目にかかるたびに、小野田さんの人生に対する真摯な合理的な生き方に深い感銘を受け、身の引き締まる思

いがする。

本質を見抜き、常に筋を通す正道の生き方。物事の根幹、神髄を捉え、情報と経験を知恵と徳に高め、正々堂々と天下に恥じること無き「不撓不屈」の生き方に、私は大きな影響を受け、人生の教訓を与えられている。

この三人に共通するキーワードは「一途な純粹さ」「旺盛な好奇心」「たゆまぬ忍耐力」である。白寿、米寿、喜寿のご三方が、いつまでも元気に個性的な堂々たる生き方を貫かれんことを、新たなミレニアムの二〇〇〇年のはじめに際し、祈念する次第である。

(平成十二年一月一日)



T 先生

藤井 長治

T先生は九十二歳。いまでも矍鑠として僕らと団欒する。先生は昭和四十六年まで名古屋工業大学の数学の教授であった。

さいきんの先生の感慨によれば、日本の数学者は計算はなかなか秀れているが、それだけだ。西欧の数学者は、計算のうえに思索や哲学をもっている。西洋には、数学の天才がうようよいいるが、たとえば「ガウス」とか「ヒルバート」とか「ロバチエフスキー」などに対し、日本の数学者は、その足許にも及ばないという。

また先生には絵を見る楽しみがあるが、芸術性の高いものは敬遠する。ピカソやセザンヌやミロー等々を、すすんで見ようとはしない。日本の画家の、写実的で、サラリーマンでも買えるようなクラスのものを楽しんでいる。

T先生は、昭和七年三月東京帝国大学を卒業すると、

直ちに愛知県立豊橋中学校（旧制—以下「ホウチヤウ豊中」^{ホウチヤウ}という）に、代数の教師として赴任した。僕らは二年生の時から教わった。先生は長身瘦軀、新進氣鋭というところだが、その動作がどことなくスローで、寡黙、諸事超然の風情があり、中学生うけのするタイプとは言いがたかった。

いつの間にか、誰言うことなく「なまこ」という仇名がとおりはじめた。僕らが中学生のころは、先生をその名字で呼ぶ者はほとんどなく、みな仇名でおした。その仇名たるや、誰が何時どこでつけるのか分からないが、全く絶妙で、その教師の風貌、人品骨柄が、言うに言われぬ趣でにじみでている。

僕らの「豊中」在学中の仇名で、いまでも傑作とおもふものをあげると、

ライオン、かぼちゃ、からす、がんこう、しゃけ、
たこ、ちんころ、にぼし、バッタ、

などで、これらの仇名は、僕ら中学生の感情のはげぐちの一端をになつていた。

わが「なまこ」先生は、代数の試験に難問をだすので、生徒はみな大いに閉口した。百点満点をとるのは、クラス五十人中ひとりかふたり。六十点以上が一割ぐらい。残りは五十点、四十点台で、三十点台以下の落第点の者もけっこういた。あまりの難問と点数の辛さに、僕は身を竦めて「なまこ」先生をなじつたものだが、ある試験で、一人だけ百二十点をもらったのがいた。その解答までの筋道が独創的で、整然としていたためだった。

試験に難問をだした先生の胸中を推測してみると、正解は多数を期待しない、解けなくても、それはそれでよい。代数ができて、他の科目のできない生徒もいるし、代数ができなくても、他の科目の秀れているものもいる。色々の生徒がいて、それで面白い。頭のよいわるいはいく口には言えない、と先生は達観していたのではなからうか。

僕らは、中学の五年間を終え、東や西の上級学校に散つていった。「なまこ」先生も、程なく四国の中学校に転任、そこで短期間教鞭をとったのち、名古屋高等工業学校（名古屋工業大学の前身）の教授に任ぜられた。

やがて太平洋戦争勃発。僕らは中国をはじめ南太平洋の諸国に出征した。そして、多くの友を戦死、戦病死で失って敗戦。戦後は戦災復興と己の生活のために、早朝から深夜まで働きづめに働いた。気がついてみたら「もはや戦後ではない」の言葉が流行した昭和三十一年となり、人々の生活は徐々によくなっていった。このころから、学校のクラス会、戦友会などがぼつぼつはじまり、運動部のOB会、校友会などがあとに続いた。

「なまこ」先生と戦後会えたのは、ずっと後の平成二年四月であった。そのときの日記に「T先生と横浜で会い、そば、コーヒーをごちそうになる」とある。卒業以来五十三年ぶりに会った先生は、むかしの「なまこ」先生とほとんど変わっていないかった。年のせいで、髪は白くなり、背丈も多少低くなっていた。その時、先生は八十三歳だった。

それ以来、僕は同級生をかたらって、先生を連れだした。あるときは松涛の戸栗美術館に古伊万里を見にでかけたり、他の日は「ミロ」が来たといっちは横浜美術館にひっぱりだしたりした。

京浜在住の僕らの同窓会には、先生はなにをおいても出てきて、僕らといっときを過ごす。

この、先生つれだしが昂じて、ここ三、四年は、ある場所が集まることにした。横浜駅の西口地下街の一隅にある「横浜珈琲店」という小さな店で、先生の気に入っている所だ。

先生の聲咳に接したい、みんなと喋りたいという「豊中」卒業生が、ときに七―八人、少ないときは四―五人。みんないそいそとやってくる。いわば「なまこ塾」である。

先生は最近、むかしの教え子の身の上に心をむける。あの仁はどうした、この仁の病気はどうか、はやく治って出てこれるといいがと、惻隠の情をかくさない。また、人に対し、おごりたかぶる振る舞いが無い。先生は、この日本にもう九十年も生きてきた。俗悪にまみれた政治、経済などに倦きあきしている。この国に何が起ころうが、何が逝こうが、すこしも周章でない。悠揚たる浩然の氣にみちている。ここに僕らはひかれるのであろう。

先生を囲んで、わいわい勝手なことを喋り、激論もと

ぶ。先生もたまには反論するが、じつと聞いていることが多い。この時、七十―八十歳代の男たちは、純真な教え子にもどり、ながはなし長話に興じ、満足して散会する。

我らいたらぬ輩やからどもが、いまだに先生を「なまこ」と呼んでいることを、願わくは先生諒とされよ。そして、先生百歳のお祝いを僕らが捧げられるよう、養生專一に、長生きされんことを祈ってやまない。

(と、えらそうなことを言って、こっちは大丈夫かな?)

大学の授業

西川 永幹

昨年の「悠遊第六号」に、「大学教授への道」と題して、私がいかにして大学教授になったかを書いた。今回はその続編である。新任教師の私が大学でどういう授業を行ったか、についての報告である。

四月から始まる第一期はわたしの大学では「前期」と言い、夏休みをはさみ九月まで続く。授業は七月で終わり、九月は試験である。後期は十月に始まり、二月の試験で終了する。前期の私の科目は、学部の「外書購読」と大学院の「ファイナンス」だった。外書購読は、金曜の三限と四限、時間というと午後一時半から五時までであった。テキストは海外の新聞・雑誌の記事の中から面白そうなものを選んで作った。「海外の記事」といっても、私自身イギリスに駐在が長かったこともあり、*The Economist*や*Financial Times*の記事が中心となる。学生は六十人。最初の授業では海外の新聞・雑誌を読むことの効用：日本について日本のメディアと異なった見方に接することができる・日本の五年先が見える・彼らは意見をはっきり書くので、それが参考になる…といったことを語った。そして三十分で自分の言いたいことを言い終えてしまった。あと一時間かけて、何とか次週からのテキストの解説の当番を決め、その日は半分の時間で授業を終了した。

二回目からは割り当てに従って訳読してもらった。最

初の数人の割り当てが終わった段階で、私が恐れていたこと……学生たちのレベルが私よりずっと高くて、私が戸惑う……はないということが分かり、少し安心した。安心すると、急に強気になってしまう。私は海外に十四年住み、社会人としての三十年を、英語をメシの種として過ごし、海外留学もした。加えて十分に予習もしてくる。私の方が出来て当たり前、と言えば当たり前だ。しかし、学期を終えてみると、私なんかすぐ抜かれてしまいそうな学生も、ちらほらいた。後世恐るべし。そういう学生を教えたということは嬉しかった。九月の試験で、銀行に就職の内定している学生は六問中三問しか回答しなかった。しかし、回答を書いた三問は、ほぼ完璧に近いものだった。時間がたりなかったのだろう。

十月になってから、彼とキャンパスで顔を合わせたので、呼びとめて、「社会人になったら、七割のできで良いから、六問全部答えるようにしろ」とアドバイスしてやった。社会にとって、本当に必要なのは三問を完全に回答できる人なのだろう。しかし、少なくとも新人の時代には、全問を七割回答できるほうが良い。九月の試験

で、答案用紙の余白に「海外の新聞は日本の新聞と違うことを書いていることが分かり、ためになった」「とても面白く、ためになる授業でした。ありがとうございました」と書いてくれた学生がいた。苦労が報われた気がした。

大学院の授業は「プロジェクト・ファイナンス」をやった。出席は十二人、うち日本人学生は二人だった。ここでは課題を与え、学生たちに発表してもらったので私は楽だった。私の大学と提携しているドイツの大学からの学生三人の日本語はあまり上手とは言えず、言葉は日本語と英語のチャンポンでやった。

後期は学部（夜間主コース）と社会人大学院で、科目はいずれも「ファイナンス（金融）」学部の講義には学生が百八十人登録した。私は授業に対する「作戦」を少し考えた。私の授業に出る学生たちはサラリーマンになる人も多いだろう。大学を出たサラリーマンに私も長く接してきたが、彼らの中には自分の考えを言えない人が存外多かった。サラリーマンに限らず、大学で教育を受けた人間として大切なのは、自分の考えを述べ、それで

相手を説得することである。目的のために色々なことを考え、その考えを言葉として相手に伝え、目的達成のために最善を尽くす。言ってみればやさしいが、実際はそんなに簡単ではない。大教室の授業でそういう訓練は難しいかもしれないが、意見を述べて対話・討論することが大切だ、というメッセージを伝えたかった。

「質問ありますか」と聞いてどんな手の上がるほど日本の学生は積極的ではない。私は「質問カード」を利用することにした。登録学生中授業に出席するのは八十〜九十人である。彼らには授業の終わりに出席カードを提出してもらおう。そして、質問ある学生には裏に質問を書いてもらおう、というものである。毎週四〜五人の学生が質問を書き込んでくる。私は次回の授業でできるだけ答えるようにした。また授業中でも、短い質問をこちらから学生にするようにした。「対話」を通じて、事実を暗記することではなくて、自分で考えることが大切で、かつ楽しい、ということが分かってもらえればと思った。後期の、もうひとつの授業は社会人大学院である。これは『The Economist』の銀行特集をテキストに使った。

授業は当番の院生が発表し、内容について私もコメントし、また他の学生も意見を述べる形式で行った。社会人たちは次々と自分の意見を述べ、また質問し、授業は盛り上がった。「社会では自分の意見を言う、ということが大切なのだ」と学部学生に伝えようとしていることが嘘のように思われた。ここにいる社会人たちは、自分の意見を述べ、疑問があれば質問し討論する。会社の上下関係の堅苦しさを離れ、自由な時間を楽しんでいるように思われた。授業の終わった後も、EBSで疑問をぶつけ合う。私も出来る限り疑問に答え、討論の輪の中に入るようにした。社会人院生は会社の帰りに大学に来る。みな背広を着、ネクタイをしている。そういったところは、私にとって違和感がなかった。最初の授業が終わると、何人かの人が私のところ来て名刺を差し出した。私も名刺をわたす。これは私が今までいた世界そのままで。授業は六時半から八時十分まで、それが終わって山の中腹にある大学から麓の私鉄の駅までバスに乗って帰る時、私は言いようのない満足感にひたつたことが何回もあった。下に見える街の夜景が美しかった。

今大学は冬休みである。四月から私は夜間主コースの七人のゼミ生を担当する。一年で卒論作成を指導することになるが、ゼミ生の中には、短所として「頭が悪い」と書いてきた学生もあり、会うのを楽しみにしている。

アルジェリアでは、いま

石井 正紀

昨年十二月に、約四ヵ月半滞在したアルジェリアから帰国した。日本大使館内のちょっとした改修工事のため、通算して四回目の訪問。滞在は延べにすれば六ヵ月におよんだ。

アルジェリアといえば、古くは「ここは地の果てアルジェリア どうせカスバの夜に咲く」という歌詞で知られる歌謡曲『カスバの女』でなじみ深い、昨今は、イスラム原理主義者によるテロ多発国として、日本の新聞紙上でもよく報じられることで知られるようになってい

る。当然のことながら、外務省も、海外危険情報で危険度4「家族等退避勧告」の国に指定し、同国への渡航は厳に慎むようにと勧告している。

そんな国へなぜ、とよく問われたものであるが、本当のところは、最初に話を持ち込まれたときに、事情もよくわからないままに軽い気持ちで引き受けてしまったのである。行くことが決まってから、軍とイスラム過激派との抗争による死者が一九九二年からの六年間で、政府発表で二万六千人、人権団体発表で六万五千人から八万人と、たいへん危険な国なのだ、ということがわかり、本人よりも身内の者の心配は並々ならぬものがあつた。

初めての訪問は、一九九八年三月初旬だった。アルジェの空港ターミナルに入ったとたん、三、四名のがっしりした体格のボディガードにさっと囲まれたときは、さすがに身を構えてしまった。「大使館の○○です」と迎えてくれた日本人館員の笑顔が目に入らなければ、緊張のあまり顔をこわばらしたままだったかもしれない。空港から大使館へは、トヨタのランドクルーザーの防弾車だった。途中の赤信号も無視し、ときにはサイレンで

ほかの車を蹴散らしての猛スピードの運転だった。大使公邸に着き、わざわざ出迎えて下さった大使夫人の、「いまだきアルジェリアへ来られるなんて、ずいぶん勇気のある方なのですね」の一言は、鮮烈な思いとして今なお耳に残っている。

滞在中の二週間は、館員宿舎に寝泊まりし、自分の意思で扉の外へ出ることでできない抑留されたような生活を送った。扉の外では、ときおり鈍い爆発音が聞こえ、銃声が夜のしじまを破ることがあった。翌日の新聞には「どこそこでプラスチック爆弾テロ、死者多数」といった記事が出て、驚かされたものである。市場調査のため、二回ほど護衛付きでアルジェの町中へ出たことがあったが、「あのビルは先週、あそこのバスターミナルは一月前に、その市場は二度もテロがあったところ」といった説明がつづき、カスバの女を一目見たいという好奇心は薄れ、すっかり気が滅入ってしまったものである。

そんなわけで、アルジェを発ち、隣国チュニジアに入国したときは、それまで張りつめていた緊張感がとれて、全身から力が抜けていくのが感じられた。自分の意思で、

自分の足で、自分の好きなところを自由に歩けることは、なんてすばらしいことなのかをあらためて実感した。

最後の訪問は翌年の七月だった。このときには、事態は大きく変わっていた。新しい大統領が就任して、アフリカ統一機構のサミットを成功裡に終わらせたことにより、アルジェリアも一歩国際社会への仲間入りをしていた。テロも激減し、一見したところ市中は安定していた。一年半前に防弾車の窓ガラス越しに初めて見たときの市民たちの暗い表情はだいぶ和らぎ、ショッピングセンターには若いカップル、家族連れの姿が目立つようになっていた。その平和な姿からは、ここがテロの多発国だとはとても想像できなかった。

たしかに安定化には向かっている。しかし、このままテロのない安心できる国になるかといえば、わたしは、そうはいかないだろうと思っている。事実、アルジェを発つ前日には偽検問によるテロで三十二名の死者が出たし、穏健派といわれていたイスラム救国戦線のナンバー3が市中で暗殺されるといった血なまぐさい事件が、まだ起こっている。

そして何よりも、大量の死者をだしている一九九二年以来の抗争は、単に軍―イスラム過激派間の対立という簡単な構図だけでは説明のできない、もともと根の深いところ起因しているからである。それは、死者百万人の犠牲の上で勝ち取った一九五四年から八年間に及ぶ独立戦争の暗い影の面である。この戦争は、宗主国フランスに対するアルジェリア人の民族運動であったが、同時に、そこには同じアルジェリア人でありながら、部族間の抗争、あるいは身内、親戚同士が敵・味方に分かれて戦わざるを得なかったこともあって、戦闘行為の陰で数々の血なまぐさい残虐行為が存在した。その怨みは根強く、今日のテロの多くも、そのことに起因する面が少なからずあるに違いないからである。

もともとアルジェリアの歴史をたどれば、有史以来、まさに抗争の歴史そのものであった。アルジェリア国民にとってみれば、ここ十年ちかくのテロの歴史など、日本人にはとうてい理解しがたいことだか、ささやかな抗争に過ぎないのである。米ソの冷戦構造の崩れた後、世界各地で民族間、宗教間の血なまぐさい抗争は絶えるこ

とがない。その抗争の要因がどこにあるのか。民族間、宗教間の抗争は、歴史をふまえた上で、そこに立ち入ってみなければ本質がわからないだけに、日本にいたのでは理解できないことなのであろう。悲しい事実であるが、アルジェリアから戻って、そんな思いを強くしている。

英霊タクシー

西 島 力

その老人のことが同室の患者の家族の間で噂になるころ、私は既に妻からあらかたの話は聞いていた。

「あのお爺さん変じゃない。病院の玄関の前の暗いところに車停めてさ、山羊みたいなひげ生やした顔出してね、駄まで乗って行かんかだって」

「あれって白タクじゃない。病院は取り締まらないのかしら」

そこへハマさんの奥さんが割って入った。

「あれは白タクなんかじゃないわよ。だってお金とらな
いんだもの。あのお爺さん、ボランティアなのよ」

「あら、タダなの。どうして」

この病院は東京の郊外にある脳神経を専門とする大きな病院で、私もそこで脊髄の手術をするため何ヵ月も入院したのだが、内科にしる外科にしる、入院患者の多くは大変難しい名前の病気を含め、いずれも、おいそれと快癒する類いのものではなかった。しかも、そのほとんどは、何故そんな病気になったのかすら、神様しか説明が出来なかったのである。

妻の話を総合すると、その老人の連れ合いも、何やらとびきり難しい病気で十何年間にわたって何度となくこの病院に入退院を繰り返した挙げ句、最近とうとう亡くなったのである。

その看護のため連日通いつめた自らの体験から、老人は亡き妻への供養を兼ね、面会時間の終わる夜七時ごろになると、病院の玄関に車を停め、患者の家族たちを、そのほとんどは女たちだが、最寄りの駅まで送り届けるのを日課としたのである。疲れ果て、光明の見えない

日々に、足取りも重くトボトボと家路に急ぐ女たちにとって、この老人はまさに地獄で出会った仏であつたろう。

老人は、実はこの他にもう一つの重しを背に負っていたのである。それが、私がこの話を勝手に「英霊タクシ」と呼ぶ理由である。

老人はガダルカナル島生き残りの兵士である。何万という死んだ仲間のために、老人たちは社会に訴え続けることで生き残った者の務めを果たそうとしている。妻が車の中で貰ったビラなどから推察すると、老人たちの主張は次のようなものらしい。

1. 英霊を敬い靖国神社を手厚く扱え

2. 南京事件は根も葉もないウソだ。あんなことは他の国でもやっている。日本政府がやたらにアジアの国々に謝るのはけしからん。これでは悠久の大義のために命を捧げた英霊が浮かばれない

ある日とうとう妻とハマさんの奥さんは老人から前記の趣旨に沿った署名運動にサインをしてくれと言われたが、そういうことは良く分からないからと断った。

翌日、妻たちは老人に見つからないように、病院の裏

口からそつと出て駅に急いだのだが、途中で英霊タクシーに追い付かれてしまった。運転席の窓から老人は言った。

「どうして乗って行かないのよう」

「だって私たち署名しなかったから」

「そんなことどうでもいいんだよう」

こうして、妻たちはふたたび英霊タクシーの乗客になったが、それから老人は署名運動のことは二度と口にしなかった。しかし、彼の悲憤慷慨は止まることを知らない。

老人にとって絶対に許せないのは、テレビに出てくるベットフードのコマーシャルである。お犬さまやお猫さまに差し上げるために、脂ぎった牛肉や鮭が色とりどりの缶詰になってスーパリーのコーナーを占領している。何ということだ。ガダルカナルでは何万という戦友が屍を曝した。その大半は餓死なのだ。

しばらくして私は退院し、結局私自身はその老人に会うことはなかった。妻は感謝の気持ちを含めて、老人が愛してやまない由紀さおりの歌をテープに吹き込んでプレゼントした。その「ふるさと」や「赤とんぼ」の歌声

に涙を浮かべ、好物の冷奴を食らいながら、老人は還らぬ連れ合いと還らぬ戦友を思い、癒されることなき心を抱き続けてゆくことだろう。

これで英霊タクシーの話を終える。

一九九九年、政府は法律を作つて日の丸と君が代を国旗と国歌に定めた。

八月十五日、例年の戦没者慰霊祭が日本武道館で行われた。政府は出席者つまり戦没者の遺族たちに君が代斉唱を促した。テレビの画面で、何人かは口を開閉し、何人かはあいまいに口を動かし、何人かは口を固く閉ざしたままでいた。

この旗とこの歌に送られ、国家の名のもとに、あるいは「千代に八千代に」と寿がれたそのお人の名のもとに、多くの国民が、その大方は自らの意志と良心に反して、戦場に駆り立てられ、そして還らぬ者二百数十万に上った。

今、その鎮魂の祭りにおいて、その歌を遺族に声を出して歌えと強いているのだ。この例えようもないグロテスクな光景を、私は暗然たる思いで見つめている。

泰緬鉄道と捕虜

玉山 和夫

天皇、皇后両陛下が一九九八年英国を公式訪問された時、歓迎する人垣の中に迷彩帽をかぶった一団がおり、百メートル以上にわたって二列に並んでいた。彼らは陛下の車が近づくと一斉に回れ右をして陛下の車列に背をむけた。強烈な抗議の姿勢であった。車には英国女王陛下が同乗されていたので思い切ったことをするものだと沿道の英国人も驚いたが、歓迎されるのが当たり前だと思っておられた両陛下も強い印象を受けられたに違いない。抗議した一団は、第二次世界大戦中日本軍に降伏し、泰緬鉄道建設などに使われた元捕虜と彼らを支持する英在郷軍人であった。

日本は開戦直後、英国の準備の整わないうちに四カ月でビルマ全土を占領した。ビルマと泰国との間には険しい山脈があり自動車は乾季に辛うじて通っただけなので、ビルマへの補給は貨物船に頼らざるを得なかった。

しかし、日本海軍がミッドウェーで大敗してからは、ベنگアル湾の制海権を失い、船による輸送が出来なくなったので、英国の反攻の目標となっていたビルマを守る兵力と軍事物資を送るために、泰とビルマを結ぶ鉄道の建設が急がれることとなった。ビルマの日本軍は占領当時の四個師団から十個師団に増強されつつあった。

そこで、泰国のノンブラドックからビルマのタンビュザヤに至る四一五キロメートルの鉄道建設が大本営の命令で鉄道第五・第九連隊が主になって始められた。険しい山岳地帯の工事で、多数の作業者が必要なので現地労働者のほかにシンガポールで降伏した英国兵・豪州兵などを使うとされた。捕虜は一九四二年八月から翌年四月にわたり逐次作業現場近くの収容所に送られ、最終的には五万五千名になった。捕虜は収容所で管理され食事を支給され、毎日鉄道隊の作業に駆り出される形となっていた。

鉄道建設は予想以上の難工事で、進度は遅れ、鉄道隊もノルマの達成を俘虜に強く要求せざるを得なかった。ただし土工作業では俘虜のノルマは一日一立方メートル

の掘削で、日本軍鉄道兵の四立方メートル、現地労働者の三立方メートルに比べれば過酷な要求とはいえないが、鉄道建設を利敵行為と考える捕虜にとって望ましくない作業だった。一方、五万名以上を管理する捕虜収容所は、陸軍少将が所長であったが、四百名の事務要員と千名弱の主に朝鮮人軍属の監視要員しかいない弱体な組織であった。このことが、厳しい気候条件と伝染病の流行地帯での捕虜の管理が十分に行えず、多数の死亡者を出した大きな原因となった。また監視員は、えてして捕虜に過酷な体罰を加えた。

捕虜の食事は、日本兵と同じ物が支給されたが、米を主とするので不評であった。そのため、牛肉を一日当たり百五十グラム加給することにし、泰国で牛を買い付けたが、農耕に支障がでるといふ泰側の抗議を受け、十分な量を確保出来なかった。

捕虜の輸送も計画が悪く、雨季には道が泥沼になりトラックがほとんど使えず、捕虜は豪雨のなか、ずぶ濡れで三〇〇キロも歩かされ、作業地に着いた時、ほとんど全員が病人となることもあった。山岳地帯の雨量は極め

て多く、食料の輸送も困難をきわめた。一九四三年五月、現地人にコレラが発生し、隔離された患者が勝手に抜け出したので各地に広がった。予防注射を行ったが一部の捕虜には手遅れになり、約二千名が死亡した。また治療薬キニーネはあったが、体力の弱った多くの捕虜がマラリアで死亡した。

泰緬連接鉄道は難工事を克服して一九四三年十月開通したが、この間、捕虜一万二千名が死亡するという多大の犠牲を払ったのである。

捕虜は鉄道工事の後、日本本土や各地に送られ、労役に服し、終戦後本国に帰還した。英国政府は、日本との最終的合意として、接取した日本の資産を原資にして捕虜に補償金を支払ったが、額が当時の高校卒一カ月分の給料程度だったので、不満は残った。

戦後初めて昭和天皇が英国を訪問された時、公式晩餐会のスピーチで英女王が両国間には不幸なこともありましたがと言われたのに対し、昭和天皇の答礼スピーチは戦争に全く触れられなかった。これは波風を立てたくない官僚の保身本能からのお膳立てだろうが、当事者であ

られた天皇が遺憾の意をあらわす最適の機会を失ってしまった。

その後、捕虜はいくつかの団体を作り、日本政府の公式謝罪と二万ポンドなど補償金の支払いを強硬に要求し続け、日本でも裁判に訴えている。毎年八月になると、英国のタブロイド紙には、しばしば泰緬鉄道建設での俘虜に対する残虐行為の体験談が大きく掲載される。なかには誇張や誤りと思われるものも多い。最近になって日本政府は謝意を表するようになったが、これによって元捕虜の態度に変化は見られない。

日本の降伏後、連合軍は凄惨といえる報復を行っている。鉄道建設隊と捕虜収容所関係者多数が再審上告も許されない裁判にかけられ、三十二名が死刑になり、七十九名が懲役刑に処せられた。その上、二千名もの関係者が未決囚の名目で一年以上監獄に入れられ、多くはわずか一日八百カロリー以下の食事で衰弱きつたにも拘らず看守からしばしば極端な暴行を受けている。この事は、捕虜も大衆も認識していない。捕虜の惨状は、日本軍上層部が兵站など適切な管理組織を設けずに多数の捕虜の

労役を命令したことに起因するが、連合軍はこの面を追及しなかった。

泰緬鉄道で多数の捕虜が死亡したことは、日本の戦後派世代が知らないのに反し、英国では教科書に取り入れられており、多くの若い世代が知っている。元捕虜の抗議活動について多くの英国人は容認してはいないが、抗議の趣旨については理解しているようである。国際関係を考える際に留意すべきである。

シベリア鉄道と日本（二）

大塚 滋

明治、大正、昭和も戦前にかけて、ソ連をはじめヨーロッパ各地への赴任、出張、旅行などはまだ飛行機のない時代とあって、シベリア鉄道が専ら利用された。日本内地、朝鮮、満州やシベリア鉄道、ヨーロッパ各国の鉄道の優等列車には、外交官、高級軍人、恰幅のいい紳士

や着飾った婦人たちが多く見受けられ、飛行機が出現する前の、第二次大戦が勃発する前の、鉄道の華やかな第一次黄金時代であった。

参考までに、そのころの代表的なルートを「汽車時間表」昭和九年十二月号の欧亜連絡のページから拾ってみよう。（国名、駅名は当時のまま、午前（細字）午後（太字）表示は二十四時間制に読み替えた）

一日目 東京発 一五・〇〇 一列車特急「富士

二日目 下関着 九・三〇

下関発 一〇・三〇 関釜連絡船一便

釜山着 一八・〇〇

釜山発 一九・二〇 一列車急行「ひかり」鮮満国境で時

差一時間遅れ

三日目 新京着 二一・〇〇

四日目 新京発 九・二〇 四列車

ハルピン着 一四・四〇

五日目 ハルピン発 八・三〇 三列車

六日目 満州里着 七・一〇

満州里発 一三・一〇 シベリア鉄道ソ

満国境で時差五時間遅れ

十二日目 モスクワ着 一七・〇〇

モスクワからベルリンまでは二日、ロンドン、パリまでは三日かかるから、ヨーロッパ到着は東京を出てから約半月後ということになる。これに対し、日本郵船の横浜・ロンドン間は、船によって多少の差はあるものの、スエズ運河、ジブラルタル海峡を通って四十三日から五十三日かかる。現在、航空機はモスクワまで十一時間、ロンドンまで十三時間で飛ぶ。まさに隔世の感だが、その割にはシベリア鉄道の所要日数は変わっていない。ウラジオストクからモスクワまで特急「ロシア」号は八日かかる。昭和九年当時はこれが十日であった。

ウラジオストクからの他、現在はピョニヤン、北京、ウランバートルからモスクワ直通列車が走っている。このうちピョニヤンからの列車は八泊九日で、定期列車としては世界最長である。

話を戦前にもどそう。アジア、ヨーロッパに戦雲がたれこめてくると、シベリア鉄道の戦略的弱点がクローズアップされてきた。それは二つあった。一つはアムール河の鉄橋である。延長二・五キロメートルのこの鉄橋が日本軍によって爆撃され、破壊されたら、極東への動脈は完全に切断され、極東艦隊への補給、対日戦の準備、さらにはシベリアの開発に致命的な打撃をうける。このために計画、建設されたのがアムール河底トンネルである。

もう一つは、この鉄道が中国との国境に近接して通っているため、万一の場合、中国からの攻撃目標となることが考えられる。この対策として計画、建設されたのが北側の第二シベリア鉄道である。

アムール河底トンネルについては、それがいつごろ計画され、いつ着工されたかは定かではないが、ともかく一九四一年（昭和十六年）に完成した。完成後、このトンネルは最高の軍事機密とされ、橋が使える限りトンネルは秘匿のため、使用されることは無かった。

こうして、トンネルは約三十年間放置されてきた。お

そらく出入り口は目隠しなどがされていたに相違ない。対日戦争が終わっても、米ソ冷戦、中ソ対立が続いたので、依然として秘密を守る必要があったのか、それとも、急造トンネルのため使い勝手が悪かったのか、どちらにしても使われなかったということは、橋が落とされた時の非常用であることを物語っている。

しかし一九七〇年（昭和四十五年）ころになると、シベリア鉄道の貨物輸送が増加し、単線のまま残っているアムール河の鉄橋区間が列車増発の大きなネックとなってきた。複線の間、たとえ短くても単線区間があれば、全線の輸送力が制約を受ける。加えて、一九一六年（大正五年）製の橋梁が老朽化し、徐行を必要とし、輸送に与える影響はより一層深刻なものとなってきた。こうした状況のもと、国際情勢の改善もあって、一九七五年（昭和五十年）ころからトンネルにも列車を通すようになった。しかし、この区間の抜本的な改良としては、鉄橋そのものを複線にすることが不可欠で、すでにその工事が始まっている。計画では、現在の橋を補強、拡張して複線とし、その上に四車線の道路を併設することと

なっているが、工事は資金難もあって順調に進んでいるとは思えない。

このトンネル、橋ともに現在でも警戒は極めて厳しい。冷戦も終わり、中ソ、米ソいずれも友好ムードにあるというのに、その真意が分からない。地図にも案内書にも一切記述がない。現地では橋の両岸にサーチライトの付いた監視所があり、自動小銃を持った兵士が常時立哨している。鉄道関係者の案内で鉄橋の下、複線工事を見学している時でも「監視所から見えるところでは絶対写真を撮らないように」と注意されたし、つい最近も、河岸から鉄橋の遠景を撮っただけで、駆けつけてきた兵隊に連行され、フィルムを抜かれた日本人の話を聞いた。トンネルについても、いまだに出入り口には板塀があって並行する本線の窓からは見えないようになっている。前方がよく見える特別列車で鉄橋を渡った時、この板塀ごとにトンネル口を撮ったが、案内の鉄道高官に「撮影禁止だから、現像は日本に帰ってからするように」と注意された。

（「悠遊」第八号に続く）

紅茶物語

亀井 弘次

クリンビールが「午後の紅茶」を発売してから、今年で十四年になる。

発売当初から人気商品となり、その後も好調な販売を続けている。栄枯盛衰の激しい飲料業界では特異な例といえよう。

しゃれたネーミングと、そのころの紅茶飲料は少し古くなると濁りがでるのが常識だったのに、「午後の紅茶」だけは何時までも濁らないことが受けたといえよう。この点はビールの濾過技術を生かしたものだ。

現在では、ミルクやレモン果汁の入ったものから、無糖のものまで売られているが、発売の時点では、砂糖を加えただけのストレートだけであった。

開発の中心になったのは、社歴の浅いE嬢であった。彼女はある時、新聞記者の取材を受け、こう語っている。

「試作品がある上司にお見せしたところ、その方は、後からミルクやレモンを足さなくちゃならないような商品は売れないよ、とおっしゃいました。でも、私たちは女子大の寮で、いつもストレートで飲んでいましたので、確信を持って発売に踏み切りました」

そして大ヒットしたのである。

この上司とは、実は私のことなのだ。余りにも、あっけらかんとした彼女の言葉に、腹も立たなかった覚えがある。

彼女とのやりとりの数年前まで、私は洋酒の販売に従事していた。その中で、次のような苦勞をした。

合弁相手のシーグラム社から、輸入品のリキュールを、もっと売れと責め立てられていた。

アメリカではカクテル・ベースとしてリキュールがこんなに売れている。それに利益率もこんなに良いではないかと、やいやい言ってくる。

ところが、日本ではカクテルそのものがさっぱり広がらない。先発各社も、家庭用にカクテルのセットを用意したりして努力していたが、あまり成果はあがっていない。

かったようだ。とにかくウイスキーの水割り一辺倒だ。

この経験から、日本人は飲み物を温めるか、冷やすかどうかで、それ以外の飲み方をしないと云う結論を得ていた。

それに、紅茶はミルクやレモンを入れて飲むものという固定観念にとらわれていた私は、彼女に見当違いのアドバイスをしてしまったのだ。

もしもあの時、開発が中止されていたらと考えると、今でも、ぞっとする。E嬢の、若々しい感性と判断に、頭を下げざるをえない。

では、なぜ当時ミルクティーの商品化ができなかったのか？

牛乳のような低温流通が期待出来ない紅茶飲料の場合、そのころの技術レベルでは、出荷後の変質が恐ろしくて、とても出せなかったのだ。

その後、ビン詰めあるいは缶詰めラインのサニテーションレベルが飛躍的に向上し、無菌化がすんだので、ミルクティーやミルクコーヒーのビン缶製品の商品化が可能になったのである。

死にたくない

小林 正憲

左足の痛みで、原因が不明のまま入院した。下半身のどこかのガンだろうという疑いが濃厚なので、不安な毎日をおくりながらの検査だった。

死にたくない、という気持ちで頑張っている、あまりのつらさに、こんなに痛みが続くのなら死んだ方がましだ、という思いが頭をかすめることもしばしばあった。病床にあるとき、江藤淳氏の自殺を知った。子供がなく、奥方を亡くされている境遇は私も同じであり、氏の心情が分かるような気がする。けれども、自ら命を断つには、強い意志と、手立てを行うエネルギーがなければ出来ない。私には無理のようだ。

しかし、その前に、自分は本当に死にたくないのか、死にたいのか、それは何故なのかを考えはじめることになる。

ゴキブリをたたこうとすると、さっと逃げる。他の虫も同じような行動をとる。奴らも命が惜しいのか、と考えてしまいうようになるが、虫たちにそのような思考があるとは考えられない。結局のところ、あまり深く考えないで、生き続けていこうとする本能で片付けてしまう。

しかし、生き続けていこうとする本能が死にたくないということと同じだとすると、理解できない動物たちの行動がたくさん見つかる。サケなどが生殖行為にエネルギーを使い果たして死んでゆく姿。カマキリなどの雄が、交尾のあとで雌に食われてしまう行動が多いこと。その他にも同じような事例が数多く存在する。

そんなときに、セアカゴケモの研究結果を目にした。このクモも、交尾のあとで雄が雌に食われてしまうことが多いが、そのときは雄が食べられやすいような行動をとるというオーストラリアのグループによる克明な観察の報告である。

食べられたときの交尾時間は平均二十五分で、食べられなかったときの二倍以上であり、送り込んだ精子数も二倍以上になる。そして、食べないで交尾した雌が、他

の雄と再交尾する数は九六パーセントであるのに、食べた雌は三三パーセントだというのである。再交尾をする、生まれる子供の大多数はあとからの精子のものになる、という調査も付け加えられていた。

この研究を紹介した日本の学者は、命をすてた性行動として、冗談半分にコメントされていたが、私はもともと虫たちは死にたくないのではなくて、遺伝子を守りたいということが本能なのだと解釈する。そして、人間も動物的には同じである、と結論づけたい。

今、私は人間を動物的と社会的な視点に分けて眺めている。単純な例をあげると、おいしいものが食べたいとか、異性への交渉は動物的願望。社長になりたいとか、勲章が欲しいは社会的願望である。ただし、もう一つ動物社会的というものもあるので、付け加えておく。例は、孫のお受験に夢中になるおばあさん。つまり自分が残した遺伝子を、社会的動物的視点で見守りたい願望である。人間の場合も、死にたくないというのは社会的視点であって、動物的には遺伝子を守りたいという本能はあつ

ても、死にたくないという願望はないと見る。

自分を例にとると、六十九歳になり、身体の大部分を使い果たしていて、復元力はおとろえている。遺伝子を残すことが不可能ではないが、対応は難しく、また何よりも自分が望んではない。従って、動物的にはもういいかという気持ちになる。遺伝子を残さなかった私にとって、動物社会的な願望は無縁である。

一方、社会的にはわずかではあるが貯えもあり、生活機能も一応は整っていて、社会生活を送れる交友関係や環境と知恵や経験がある。だから、まだ死にたくないという未練があっても不思議ではない。

だからといって、名誉や地位が欲しいのではない。願望を拾いだしてみると、動物的なものに近いのである。例えば、近くに女の人がいらない、と考えたとする。そこには社会的要素も入っているが、遺伝子を残したいという本能が、セックスの介在がなくても疑似的に作用していると分析できる。季節がすぎて数が減り、雌雄の交流が乏しくなった蝶が蘭の花にとまる行動に近い。

そして、社会的要素が動物的なものに変換できる、も

お墓

都 甲 昌 利

しくは錯覚かもしれないが変換できるであろうと考えているからである。例えば、おいしいものが食べたいという願望は金銭で満たされ、金銭で得られない願望も知恵や経験と社会的環境などで工夫できる。

ただ、こういった願望は、今までの生活や周囲との比較の問題である。動物的にも、社会的にも、さほど良い経験がない私には、まだ喜びが得られるであろう分野が残っている。このあたりが江藤氏とはかなり違う。

話を整理すると、遺伝子を残したいことへの疑似パターンが、私の願望になっていて、それが社会的要素から変換できると考えている。だから、死にたくないと望むのだ、ということになる。

そんな結論がでたときに、命をとられる病気ではないことが分かり、病氣と仲良く付き合いながら、疑似願望を満たすべく退院することになった。

ある高齢者の会合でお墓のことが話題になった。

ある男が、「私は地方の出身ですが、東京の大学を卒業して東京の会社に勤務して、ずうっと東京で暮らしたので郷里に帰るつもりはない。郷里の家は両親が死んでしまい、荒れ果てて、屋敷の裏にある先祖代々の墓だけが残った。私は長男で墓を守らねばならない。この墓を東京近辺に移したいが、いいだろうか。いずれ自分もここに入れば、子供や孫たちは墓参りも楽だ」と言った。

「墓があるから悩むので、墓など作らず、灰を川か海へ捨てればよい。一切は無に帰するのがよい」と別の男が言った。

そう言えば、インドに行った時、二、三人の男がガンジス川の川辺で遺体を焼いて、その灰を箒で掃くようにしてガンジス川に捨てていた光景を見た。あとは何事もなかったように、男たちは立ち去った。ヒンズー教には

お墓がないのだろうか。あるいはこの遺体は浮浪者だったのか。

日本でも最近、墓に入らず、灰を海や山に撒いてくれるという人が増えたと聞く。中年男女の恋愛（不倫？）を描いた映画「マジソン郡の橋」の影響かもしれない。山が好きだった私の友人が昨年亡くなり、谷川岳に遺灰を撒いてほしいと友人たちに遺言したが、実行されていない。家族のしがらみなどで、案外難しいのである。

お墓っていったい何だろう？

「それは我々のLAST HOTELさ。五ツ星のホテルで眠りたいね」

「俺は超デラックスじゃなきゃいやだね」

「僕はどうせYMCAかペンション・クラスだよ」

「俺は野宿だ。墓なんていらねえ」

みんな勝手なことを言った。

超デラックスの墓は、日本では東照宮や明治神宮だろう。海外ではペトロの墓、つまりローマのサン・ピエトロ寺院やフィレンツェにあるメディチ家礼拝堂の廟墓だろう。自由都市フィレンツェが最も栄えた時代のロレン

ツォ豪華王の墓はミケランジェロが彫刻した大理石の寓意像によって飾られている。もうこうなると、『墓』というより芸術作品と言ってよい。

生前、権力をほしきままにした者は、死後も壮大な墓を建てるのだろう。墓は身分の延長と言えなくもない。このような、超豪華な墓に反して『野宿』の典型はトルストイの墓であろう。

キリスト教的人間愛と自己の現実の生活の矛盾から家を出してシベリアで死ぬが、遺言で、「生まれ育ったヤースナヤ・ポリャーナの屋敷裏の静かな林の中に遺体を埋めて、墓碑その他一切建てるな」と。彼の墓は遺言通り静かな林のなかにあり、土がこんもりと盛られているだけだ。風雨に曝され雑草さえ生えていた。墓だと分かるのは、盛り土の回りや上に、いまだに無数の花束があることだ。

人は死んだ後も、墓によって差別をはかる。死んでしまえば人は平等だということは嘘である。そうしたいを強くしたのは、旧ソ連時代のモスクワでだ。当時、ソ連で最も偉大だったのはレーニンだ。神様といってよい。

彼の遺体は永久保存で、赤の広場のレーニン廟に安置されている。

神様のつぎに偉い人物の遺体は、レーニン廟の後に並んで、カリーニン、スターリン、アンドロポフ、ブレジネフらが埋葬されている。もともと、スターリンの遺体はフルシチョフによって取り外されたが・・・。

その次にソ連に功労のあった人物はクレムリンの「壁」に葬られる。この方は、遺体ではなく遺骨を壺に納め壁面を一部くり抜き中に入れ、姓名と生没年月日を金文字で刻んだ金属板で塞ぐ。ガガーリン、コスイギン、ゴリキーらの名前が見える。ただひとり日本人として「片山潜」の名も見える。

クレムリン霊園に次ぐ墓地はモスクワ川に面した「ノヴォジェヴィチ修道院」の中にある。ここには、フルシチョフ、ミコヤン、グロムイコらが眠っている。階級をなくす共産主義国家が死後に歴然とした階級をつけていたのだ。その体制の崩壊は必然だったのかも知れない。

シカゴにいた時、二十世紀の偉大な犯罪者、「夜の帝王」アル・カポネの墓があるはずだから、捜して欲しい

との依頼を受けて捜した。シカゴの北西、マウント・カール墓地にあった。イタリア移民のカポネ一族の墓に隣接して、横一メートル、縦四十センチくらいの大理石の墓石が地面と同じ高さに置かれていた。「アルフオンソ・カポネ、1899—1947、マイ・ジーザス・マシー」と銘刻され、左端に十字架が刻まれていた。「両親の側で眠りたい」と死に際に言ったそうで、怖いもの知らずの悪の帝王が子供みたいなことを言ったものだと言った。また、「イエスの慈悲のままに」と刻まれているのも面白い。

「両親と一緒にの墓地に埋葬してくれ」と同じことを言ったのはチャーチルである。ロンドン郊外の彼が生まれたブレナム・パレス近くの、少しもいかめしくない静かな教会墓地に葬られている。彼ほど偉大であれば、当然ウエストミンスター寺院に葬られることが可能であったが、それを拒否し、両親の側を望んだ。独特なユーモアで、「死んでまで頭の上を土足で踏み付けられるのはごめんだ」と言ったそう。いかにも彼らしい。

私も、死後は恐らく曹洞宗のお寺にある両親の墓に入

ることになるだろう。墓石に俗名、戒名、没年月日が刻まれるが、やがては人々の記憶からは完全に消えてしまおうだろう。

あえて尊厳生（死）に不真面目に挑む

新山 章一郎

昨年九月のPEN随想で本田克夫氏の「『尊厳生』という考え」を拝見した。このことは従来皆さん考えておられることだが、余り面と向かってお話しにならない。それだけ事は重く、また話してもどうにもならない問題なのだろうが、氏の勇氣ある提言に励まされて、私ごとき者の稚拙な文に引き合いに出される本田さんのご迷惑をも顧みず書くことにした。

本田さんは「自殺は神への冒瀆というが」と前置きし、「尊厳生が保てない場合は自ら命をたつしかあるまい」と述べ、「こんな考えは許されないか」と謙虚に結んで

おられるが、私はもつと積極的に、もつと乱暴に、何の教養も慎みもなく「YES」と申し上げたい。

神が与え給うた命を損なうことは許されないというが、私などは、それならばもう少しましな人生を与えてほしかったと思わないでもないし、その命で苦しみ悩むのは我々自身なのだから、その当事者がもう結構ですというのならお返し申し上げても良いのではないか。

さらに神を恐れず申し上げるならば、その命の終焉前のある期間、当人がかなり苦しみ、またそのことによつて周囲の同じように尊い命、そしてそれが営む生活を持った人々も多大な犠牲や不便、迷惑を被らざるを得ないような欠陥商品を造り出した神様の製造物責任はどうなるのでしょうか。そんな、得体の知れないものを創ってしまった神様に律儀に義理立てして苦しみを永らえることはないと思う。

私自身がどうも神様の労作ではないように思えるから言うのではないが、自分では適当に創っておきながら「後は死ぬまで大切にせよ、返品は認めぬ」とは、そりゃあないですよ、神様。そんなことをおっしゃるのなら

「おしまいまで痛くも、かゆくもなく、元気で死ぬるところまで責任持って下さいよ」と申し上げたい。「甘ったれるな。そこまでの面倒は見切れぬ」とおっしゃるのなら、こっちが途中で放り出すのを認めてくださいと聞き直るのをお許し戴きたくなる。

生命自体の絶対的価値を人は言う。私は命の尊さというのはそれが現に欲びに満ちている、または将来に無限の可能性を持っている限りにおいてのみ意味があるのだと思う。その欲びも希望もなくなつて、あるのは当人の苦痛と関係者たちの犠牲だけというのなら、そして本人がそう自覚するのなら、その命はもはや永らえる必然性がないのではないか。

「最後まで生きようと努力することに意義があるので。絶望的な状況の内にあつてなお敢然として生きようと戦う、その姿が尊く美しいのです。残った人に勇気を与えるのです」などという人もいる。冗談じゃない。体中に管を突っ込まれ、人工呼吸器のマスクの中で喘ぎ、苦痛にさいなまれ、意識朦朧で裸でベッドに放り出されている人間にそんな御託を垂れてもらいたくない。まし

てくたばり損ないの老醜をさらけ出して生にしがみつく姿が後人を勇気付けるとも思えない。

損得勘定からみても医療費はもろろん、本人の精神的苦悩、肉体的苦痛、終末ケアに費やされる膨大な資源と人的、物的エネルギー、そして周囲の人々の犠牲など、その生を維持するためのメンテナンス・コストが、その本人が生きていることから得る欲び、即ち利潤を上回るようになったら、その物は廃棄するのが経済原理からいっても当たりまえだ。

後は本人以外の人の「情」の問題だ。ある人が安楽死をのぞんだ。その娘が反対した。その理由は「あたし・・、なにか・・、親つて何時までも生きていてくれるもんだっていう気がしていたんで・・」よしてくれ。こっちは生まれてからこの方ずっと右顧左眊の世の中を渡ってきたのだ。いまわの際にきてもまだ自分の娘の小児的依存症に遠慮しなければならぬのか。

「生きていてくれさえすればよかった」とか「もう少し看病してやりたかった」などと泣かせるようなことを言う人がいるが、相手は痛くても苦しくても構わない、

とにかくこっちの看病したという気持ちを満足させてくれ、いや看病したという実績または言い訳を残させてくれという、そんなオセンチ野郎の身勝手な自己満足、世間体への思惑などに付き合っつてこっちの苦しみを長くし、屈辱的な姿をさらし承らえることはない。

大体このての連中は焼き場でこっちが完全に燃えちゃったことを確認してからこんな無責任なことを言っているのだ。それが証拠に、この連中は忌中払いではたいたい大声で話し、たらふく飲み食いしているものだ。

人間は、古来自然を克服、利用し発展してきた。しかし、最近は少し自然に逆らい過ぎているのではないか。不老不死を願った秦の始皇帝を始めとして自然から与えられた寿命以上の長生きを望んでいかに膨大な無駄づかいをしてきたことか。今我々が直面している地球上の社会、資源、エネルギー、環境等々の問題のかんりの部分は人間が必要以上に、あるいは許された以上に長生きをしようとするところから起こっていると言えないか。

ある種が生まれ、栄え、やがて衰え、滅びる。地球上の生物すべてに与えられ、また古来繰り返されてきた自

然の摂理だ。それがなければ我々ホモサピエンスの出番は無かったかも知れない。個体であろうと集団であろうと、その自然の摂理を曲げようとするところに無理があり、いろいろな歪みが生じ、問題が出てくる。我々に必要なのは無闇に長生きすることではなく、充実した生を営み、それを最後まで維持したまま終わらせることだと思う。

シンガポール繁栄の陰に

莊 司 忠 志

一九九七年夏の通貨・経済危機で大きく落ち込んだアジア経済は、独立いらい右肩上がりで発展してきたシンガポール経済を直撃した。ところがあれから二年半、ゴ・チョクトン首相も最近では「予想外だった」と発言するほど、東南アジアで回復の先頭をきっている。さもありなん、清潔で能率もよくそのうえ小回りの効く政府、

勤勉なシンガポリアン、世界でもトップ・クラスにランクされる英語によるインターネットの普及、すべてが良い方向に機能してきたのだろう。

町でしばらくぶりに友人と出会う。よもやま話のついでによく聞かれるのは「ところで君はいくらもらっているの？」とあけすけに話し合うことだ。有名な大企業に勤めていることや、名刺の肩書きよりも「収入はいくらか」が一番の関心事なのである。そうしたお金お金で目ごろ忙しく暮している大方のシンガポリアンの陰で、悠然として生涯を趣味に生きてきた老人がいる。

七十五歳になるチャンさんは生まれてこの方、お金のために働いたことがない。人並みに働くことやビジネスを考えたこともあったが、生活には十分過ぎるほどのお金があったし、趣味で忙しく、無理してまで働くこともなかったのだ。チャン夫婦とともに客家で、夫人の長兄は元首相、甥の一人は副首相だし、夫婦双方の家族には著名な弁護士や実業家があり、それぞれの分野で活躍している。そのため「実業」にもつかず「遊民」として生きてきたチャンさんは、若いときは家族・親戚から「あ

いつは変人だ」と非難されたり白い目で見られたこともあった。しかし、いつ会ってもニコニコしていて、人の善いチャンさんを、今では変人扱いしたり疎外する人はいない。

チャンさんの一日は、自宅の裏庭にある蘭園の早朝見回りから始まる。そこには彼が生涯かけて丹精を込め、育ててきた蘭の花々が咲き乱れている。ほとんどは愛好家垂涎の珍しい蘭である。若いころ蘭の美しさに魅せられ、その虜になってしまったことで彼の人生が決まっていたらしい。ふだん彼の頭のなかには、交配によって生まれてくるであろう新しい花の色、大きさ、姿、香りなどであふれているのだろう。家の応接間は品評会からもらったトロフィーや表彰状などでいっぱいだ。こうしたチャンさんの優雅な人生を支えてきた元はといえば、父親が残してくれた莫大な遺産である。その遺産は、不動産屋が本業の弟が堅実に管理し運用してくれている。

チャンさんの父親が、中国南方の客家の村から、一家の期待を背負ってマレー半島にやってきたのは今から百三十年もの昔になる。村には、どこそこの誰それが南方

に出稼ぎに出て成功したらしいなどの噂はあちこちで聞かれた。子だくさんの家に生まれ、丈夫で賢い子だったし、マレー半島に出かけ一稼ぎしようと考えてるのは自然のなりゆきだった。仲間もいたし、とにかく裸一貫でもマレー半島への貨物船に乗るのだ。

マレー半島の中心地クアラルンプールには、ほかの町と同じように、中国人の出身地別に立派な同郷会館があった。客家人が頼れるのは客家会館である。チャンさんの父親は船からおりると、まっしぐらに客家会館に向かった。そこでは故郷の言葉で話せるし、希望も聞いてもらえる。仕事、安い寝ぐら、生活や商売の元手、なんでもいいのだ、熱心に頼み込むのだ。手始めに父親はスズ鉱山の労働者となり黙々と働いた。小金ができると屋台を買ってソバを売った。

大方の中国からの出稼ぎ移民労働者が経験するようないくつかの仕事を経て十年、父親はいつの間にか一軒の中華料理店のオーナーになっていた。知り合いが嫁さんを世話してくれ、子供も生まれる。さらに十年、所有する料理店の数も増え、スズ鉱山やゴム農園に投資し、客

家人や中国人社会に商売仲間も増えてくる。こうして、故郷を離れて三十年、父親は堂々たる実業家となる。客家会館のボスたちの覚えもめでたく、会館の理事にも選ばれる。信用は増し、商売は拡大する一方だし、信頼できる番頭も育ち、富裕な人たちとの付き合いも増えてくる。

金ができ暇ができると、男は何をしたらよいのか。長年がむしやりに働いてきた父親にはこれといった趣味とてない。金持ちの仲間たちはなにををしているのだろうか。築きあげた財産は誰に残すのか。当時の中国やマレー半島の中国人社会では、男が妻のほかに複数の夫人を持つのはごく普通のことだったし、第一夫人、第二夫人などと、おおっぴらに呼ばれていた。十七歳で故国を離れ、異国の地マレー半島でも数人の大富豪の一人に数えられるようになった父親も、八十歳を目前に他界した。父親にとつての最後の旧正月のお祝いは百四十人もの大家族の集まりとなった。なにしろ、十三人の妻・妾、五十九人の子供、多くの孫たちにかこまれ、至福の時を過ごしてからの大往生だったらしい。

チャンさんの息子の結婚式は盛大だった。なにしろ息子には従兄弟姉妹が、数えられるだけでも二百五十人もいるのだ。かれらはシンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアなどに散らばっているし、祖父の故郷中国にもたくさんいるはずである。こうして東南アジアに花開いた客家のチャン・ファミリーにあつて、チャンさんは「遊民」としての人生を楽しみ、異端者と見られながらも、花々に囲まれて幸せな人生を全うするのだろう。

(平成十二年一月)

抹殺された星の国―日高見国―

斉 藤 勁

一、常陸風土記の謎

風土記とは、元明天皇の和銅六年（七三三年）五月、畿内七道諸国に対し

1 郡郷の名に好字（漢字二字）をつける

2 郡内の産物についての品目を録する

3 土地の肥沃状態

4 山川原野の名称の由来

5 古老の相伝する旧聞異事（伝承）

を文書にて報告せよ、との中央官命により諸国が報告した文書のことであり、出雲、播磨、常陸、豊後、肥前の五風土記が現存する。

常陸風土記と他の現存四風土記との大きな差異は、「以下略之」なる表現が見られることにある。この事は現存する常陸風土記の前に未省略原本が存在し、この原本を削除、省略したと考えるのが常識である。

では誰が削除したのか。和銅七年の常陸守は石川朝臣難波磨であり、彼の在任中に原本が筆録されたものと思われる。養老三^{うまかい}年（七一九年）藤原朝臣宇合（藤原不比等の三男）が常陸守、按察使として着任し、養老六、七年ごろまで在任しているので、この時期に現在の風土記が完成したものと考えられる。

一体、藤原宇合は何を削除したのか。幸い原本の逸文が残存しているので調べてみよう。

信太郷（沿革）

……筑波、茨城の郡の七百戸を分ちて信太の郡を置けり。
此の地は、本 日高見の国なり。

信太郡（郡名）

……黒坂命、病に遇りて身故りき。……黒坂命の霊柩
車……日高見の国に到りき。葬具の儀の赤旗ひるがえり
て……、時の人赤幡の垂の国と謂いき。後の世の言に即
ち信太の国と稱う。

黒坂命は現風土記にも記載されており、従つて藤原宇
合が削除したのは、日高見国の表現以外には考えられな
い。

日高見国は古事記にはなく、日本書紀景行二十七年条
に、東国視察を命ぜられて帰還した武内宿弥の報告に
「東の夷の中に日高見国あり……撃ちて取るべし」と後
年の征圧を予想した表現がある。

ここで藤原氏（旧姓中臣氏）の出自を調べてみると、
物部、大伴、蘇我のような大族ではなく、物部氏に付属
する下級神職のト部（動物の骨を灼いて占う職業）であ
ることが定説である。階層社会の下級神職が鹿島神宮

（ヤマト朝廷の東国における最重要拠点）の神官という
最上級職になっていることは、相当な功績がなければな
らず、その功績こそ、日高見国を裏切り、ヤマト朝廷の
征圧に協力した見返り以外には考えられない。しかもこ
の裏切り行為に付随して相当な悪行が行われたものと思
われる。

このことは現地の人々には、余りにも生々しい事実で
あり、藤原宇合としては中臣氏の旧悪をかくすためには、
日高見国そのものの抹殺を行ったものであろう。

次に、この滅亡した日高見国とはいかなる国であつた
のか、私は星を信仰した国と推定している。以下それを
検証してみよう。

二、星神カセオとその神社

日本神話の不思議の一つに星の神話がないことであ
る。星神に関しては古事記、日本書紀の本文になく、書
紀の本文の註と第二の一書に、星神香香背男または
天津甕星の名がある。国土平定の武神、経津主神、
武甕槌神すら平定出来ず、織物の神、倭文神建葉槌に
より服さしめたとの不思議な記載があり、常陸国の上に

この伝承がある。

十七世紀後半、水戸光圀は「大日本史」編纂に際し、倭文神タケハツチが星神カカセオを誅伐した地を、現在の日立市、かつての久慈郡石那坂の大甕山^{おおみか}に比定し、同所の大甕神社の本殿裏にカカセオの荒魂を封じ込め、「宿魂石」と命名した。神社の祭神はタケハツチであるが、事実はカカセオを祭ったものであろう。

また常陸地方には、カカセオを祭る神祠が百近く存在し、星信仰が形を変えて現在までも生き続けていることがうかがえる。

次に全国で六万社ともいわれる神社を「神社名鑑」で調べると、星の字を含む神社は約四百社で、奇妙な分布状態を示している。即ち、約五〇％が栃木県に、高知県は一六％、千葉県は一六％、茨城県は三％と東関東に集中している。なお、カカセオを祭る神社は、前記四県以外にはなく、全国で十二社、栃木、茨城、千葉の三県で十社が数えられる。

星の字を含む神社の祭神は、磐裂神^{いわさく}、根裂神^{ねさく}が茨城、栃木県に多く、天御中主神は千葉、高知県に多い。磐裂

神、根裂神とは、イザナミ神が火の神カグツチを生んで死去した時、イザナギ神がカグツチを斬った際、刀の先についた血が多く、石について生成した神であると、記紀にはしるされているが、その他の事跡は記されていない。天御中主神は、記紀編さんの際に中国の思想の影響を受けて作られた神とするのが定説であり、日本神話に登場する古来の神とは考えにくい。

次に神社の名称から見ると、栃木、茨城県は圧倒的に「星宮神社」が多く、他県は「星神社」が大部分を占めている。

星宮とある以上、星信仰にかかわる神殿の存在を、更には星信仰集団による部族国家の宮殿を予想させるものであり、そのような宮の存在する所は、日高見国と考えるのが妥当な線である。

神名として磐裂、根裂神を用いたことは、星神カカセオを隠すとともに、日高見国の滅亡とその神殿または宮殿の破壊に伴い流された血汐の想いが、祭神としてあまり他に見られない名称として採用されたのではないかと想われる。

常陸の日高見国の滅亡に関しては、いかなる史書にも記されていない。何故隠さねばならなかったのか、真相は歴史の闇の彼方にあり、今ではこれを知る由もない。ただ推理の光のみがこの闇の中から、おぼろげながら真相を浮び上がらせたものである。

マイコレクション始末記

福 井 律

私の「ものあつめ癖」は、昭和十一年に亡くなった母の影響によるところが大きい。当時小六の私は、俳人（俳号、小萩 松瀬青々門下）として、各地の旅のおみやげに持ち帰る郷土玩具に興味を惹かれ出していた。武井武雄著の「日本郷土玩具」（東西二巻）と照合し、東北各地のこけし、富山の獅子頭、金沢の起上り、伏見の人形、土佐の鯨等々をならべて喜んでいたが、おかげ様で地歴の成績はよく旅の興味も倍增した。

戦時色が強くなった中高時代、金もかからず出来たことはポスターとキップ集め。御用済みのものを頼んでもらうこともあったが、暗夜、駅構内の掲示板等から、一銭銅貨で押ピンをハネて、クルクルと巻いて頂戴したものの。キップは同好の士もあって、競争もし、交換もしたが、動物園、美術館、スポーツ、芸能等の入場券は入りさえすれば残るが、乗車券の類は返却がルールだから、残すのはむづかしい。定期券のない場合、いかに渡さず残すかに頭を悩ました。昭和十八年十月陸軍入隊までの数年間、ポスターと切符のコレクションはスリルといわずらを織り交ぜながら、量質とも誇れるものとなっていたが、戦後復員して帰って見ると、戦災は免れたものの、疎開、引越して消滅し、南部駒と鯨船が残されているだけであった。

今でも悔まれるのは、戦意昂揚のポスターのたぐいで、中でも「撃ちてしまむ」の突撃兵士のポスターや「欲しがりません勝つまでは」等は「なんでも鑑定団」にでも出してやりたいすばらしいものであった。

昭和二十年代は食うに精いっぱいこの時代であった。

漸く、もはや戦後でない三十年代になって、マイカー時代、先輩の指導を受けて、ミニカーを始めた。生物学の権威の先輩は、昆虫標本の大コレクションの余技のミニカー集めであったが、世界各国、英仏独伊米等の三千台余り、ほれほれするものであった。デインキー、コーギー、ソリドとこれもやりだすとキリがなかった。美術品でも物故作家の作品は値が出るように、倒産玩具メーカーのミニカーは貴重品となって値上がりすると、日本のマイカー熱と同じく、ミニカー熱もまだこれからだとか、いろいろ教えてもらって集め始め、日本中どの街へ行ってもオモチャ屋を覗く癖がついて「いい大人が」と笑われる始末。それでも地方へいくと昔の売れ残りの珍品（子供は旧型車は買わない。そしてコワシテくれる程、稀少価値が出てありがたい）があつて大喜びしたこともあつた。

大体、不器用に出来ているので、サラリーマン必須科目の、カラオケ、小唄、麻雀、ゴルフは遠慮していたが、五十歳に近くなって、法人営業の関係上ゴルフが必要になり、ミニカーどころではなくなった。それに東京転勤

がミニカーケース（約二千台）を毎日眺める楽しみに水を指したともいえる。

そこへ長男が、南加大でマーケティングを学んで帰国（八一年）したが、ビアカン・コレクションという付属科目（？）まで持つて帰ってきた。BCCA（注）と同じく日本にもBCCJもあるとか、まだ日本では会員は数十名だが、アメリカではゼロが二つ多く、全国年次大会もあり、大体十年経つというデザイン（底に小穴を二つあけ、中身を抜く）は値がつき、切手と同じように国際的に流通しているとか。アメリカで戦争中出来たビアカンは、真つ赤に錆びていても何百ドルもするという。日本でカンビールが出来たのは、昭和三十三年だが、印刷技術も優秀で、美麗、アメリカでも人気があるとか、面白そうな話にすっかり乗せられてしまつて、すぐくらぶ会員となつた。もとより父の代からビール好きの家系、世界のビールを飲むのだから異存はない。ミニカーを探すより、ビアカンを探す方が実用的である。すっかり調子に乗つて会長の北野賢氏にご挨拶にいつて、これは大変なことだと気が付いた。問題は保管と、

家族の理解を得ることだとか。広大なアメリカ、狭小な日本、ガレージと納戸というスペースの問題でいきづまり、家族の怨嗟の的となり断念する人が多いようだ。現に今まで会員は百名に達せず、ジリ貧。最近は三十名ばかりになっている。

「長野五輪」の時、ミラノの一青年から、オリンピック記念のコーラ缶を集めてほしいと依頼があった。BC C J名簿で見たとあったが、全種類を集めるのは大変だから、日本コーラ本社勤務の友人に頼んで集め、ヨーロッパの古いビアカンと指定して交換した。彼二十七歳（当時）七千個のコーラ缶は世界一と自称していたが、コーラ缶でもそんなに種類があるとは！

それはともかく、西宮へ帰ってマンシヨンの各壁面も納戸も倉庫もカンでいっぱいとなってきた。来客の中には「この中身はどうなってますか」と聞く方もある。勿論空缶！ 海外旅行で一挙に大量仕入れた場合は、急遽急飲をお願いして軽くして持ち帰る。それでまた旅の友が増えて楽しい旅が出来る。

我が家族は理解があるから止めるとはいわない。カン

に埋もれてクタバル日を待っているのかと思っていた。その通り、阪神大震災の時は部屋中腰のあたりまでカンが積もった。その後、倉庫もカンとミニカーの箱で満杯となった。大体東京生活十七年のガラクタがプラスされたマンシヨンだからどうにもならない。思い決してアサヒビールの瀬戸社長（当時）に何かお役に立つと思うからとお引き取りをお願いした。同社吹田工場は我が国最初のカンビール製造工場とかで、そこに展示施設をつくるからと快諾を得た。精々千五百個くらいといったカンは、世界三十数カ国六千個に近く、手数をかけたが、立派なワールドカンコレクションとして展示されている。昨年二月、ビール好きの友人を集めておひろめ会をして貰った。その後も新意匠カンは収納して貰っている。大体美術品のコレクションは美術館と化すようだが、非美術品コレクションは終戦処理がむづかしい。カンは処を得たが、母の始めた郷土玩具と、その線で世界三十五カ国の旅で集めた民藝品の類がのさばって来て、この処理が次の問題としてふりかかり、悩みはつきない。

(注) BCCA=Beerran Collectors Club of America.

私の見た十五世市村羽左衛門

関谷 裕彦

十五世羽左衛門は（下町の古老はうぜえむという言い方をした）は五世尾上菊五郎の弟の坂東家橘（十四世羽左衛門）の養子。スラッとして、眼がなんとも美しく、うざ耳という言葉があったほど耳が際立って大きかった。トッポ・ジージョ的な耳である。本郷湯島の生まれ、生家は金箔屋、金の茶釜で産湯を使ったそうで、父は「我が家の遠い親戚なんだ。彼の妹は歌手、せきやとしこだ」と言っていた。なるほど同じせきやはせきやだが、敏子さんのほうは関屋のようで、どうもこの説はいまいち判然としないが、当時はそれほど人が口にしなかった「明治初期の外交顧問、フランス人ル・ゼンドルの血をひいている」という話もよくしていたところを見ると、全く縁なき衆生ではなかったのだろう。

とにかく始めて見たのが「先代萩」の細川勝元、颯爽と長袴で登場したその姿の良さ、口跡の素晴らしさ、た

だひたすらあこがれた。時は大東亜戦争の戦局がようやく我が方に不利に傾いてきた昭和十八年四月、恒例團菊祭の一番目、三か月の病氣休演後の舞台である。二番目の「源氏店」は六代目菊五郎のこうもり安を相手に元若旦那のならず者切られ與三を楽々と演じた。ほっかぶりの横顔のよさ。少しゆがめたような口元からなめらかに飛び出す歯切れのよい台詞。まさに江戸歌舞伎の醍醐味であった。翌五月の二番目で「雪暮夜入谷畔道（直侍）」の蕎麦屋と大口屋の寮。後家人崩れの片岡直次郎の醸し出す、なんともいえない江戸情緒。情人三千歳（十二世片岡仁左衛門）との場面はいささか退屈だったが、蕎麦屋の外での弟分暗闇の丑松（六世市川壽美蔵後三世壽海）とのやりとりが良かった。蕎麦をたべるたびにあの場面を思い出す。

残念なことに、六月から九月までは休演。五か月ぶりの羽左さんとのご対面は十月の近江源氏の盛綱と「鬼一」の虎蔵実は牛若丸。伊達奴の鮮やかな色彩の衣装、主人鬼一法眼の怒りを買いその折檻を待つ姿勢のしおらしさ、美しさ。皆鶴姫が惚れるのも無理はないと思った。

翌十一月の「勸進帳」は羽左（富樫）、菊五郎（義経）、七世幸四郎（弁慶）。子供の眼にも素晴らしかった。記録映画に撮影されたこの二度と見られぬ顔合わせを十一、十二の両月にわたって再度見る機会があったことは

大変幸せであつた。母には「弁慶の跳び六法の引つ込みがすてきよ」と言われていたのが、何と言つても羽左の富樫の水際立った動きと歯切れの良い台詞のほうが強く印象に残っている。山伏についての幸四郎の弁慶との問答の迫力はまさに手に汗握るという感じ。特に後段「して山伏の出で立ちは？」、「頭に頂く兜巾な（は）いかに？」と、ぐんぐん調子を高め、「そもそも九字の真言とはいかなる儀にや、事のついでに問い申さん。何と。な、な、なんと」と問い詰めるその朗々たる口跡は五十七年たった今日も耳の奥に残っている。

十二月には「石切梶原」が出、荒次郎の囚人吞助が酒尽しの台詞で笑わせた後、二つ胴を試そうとしゃしゃりてた俣野五郎（海老蔵後十一代目團十郎）をやり込める梶原平三（羽左）の声は凜々として四辺を圧した。

年が変わり、昭和十九年二月「桐一葉」は初めて二階

上手寄りの席からの観劇となつたが、片桐且元の立場を釈明する羽左の木村長門の長台詞は二階席にいてもピンピン聞こえたものだ。

八か月後の明治座、さすがに七十一歳のせいか、「布引滝」の実盛はやや疲れが見えたように感じたが、「権上」の夢の場の白井権八はまさに絶品。浅黄の囚人衣で裸馬にくくりつけられた姿のしおらしさ、そしてあの後毛が薄青い照明の花道で二階衰れをさそつた。「権八の生まれは因幡の国・」で始まる悔やみの台詞が良かった。夢がさめ、かごから出た艶姿。天地紅の文を読みながら禿に引きずられ、情人の三浦屋の小紫のところへ歩みを運ぶ姿がこの役者の見納めであつたのだ。

七か月後の昭和二十年、終戦の年の五月初旬、新聞の片隅で私はこの名優の死を知つた。実際の逝去は五月六日の昼、十二時十五分過ぎであつたという。行年七十二歳。これだけの役者が勲章一つもらわなかつた。このころは敗戦間近、役者の表彰どころではなかつたのかも知れない。現に我が家も、その月の二十五日の夜、二度目の戦災を受けたのだ。

私がこの素敵な役者を舞台で見たのは、わずか一年半余り、役にして二十余。戦時下の上演品目制限のため、大半が時代物に偏り、世話物は「源氏店」「直侍」程度で、悔しい思いをしたものだ。羽左衛門が去って五十五年、あの明るさ、華やかさ、歯切れの良さ、そして何とも言えぬ哀愁をおびた面影。彼に代わるべき役者は未だ出ていない。私自身、戦後歌舞伎の舞台を見る熱が今一つ失せ、脚本を読むことに興味が移ったのは羽左衛門に對する思い入れのせいなのであろうか？

十五世市村羽左衛門観劇一覽

年月	劇場	演目	場名	役名
昭和十八年四月	歌舞伎座昼	四季	春	内裏雛
			夏	若衆
		先代萩	対決	*細川勝元
		刃傷		*同 右
		世話情	源氏店	*奥三郎
五月	同右	夜	黄門記	兩國廣小路 河童の吉蔵
			奉行所白州	同 右
			紋太夫住居	藤井紋太夫

*本文に記載

					鏡の間	同 右
				六歌仙	在原業平	
			直侍	蕎麦屋	*片岡直次郎	
				大口屋寮	*同 右	
十月	同右	昼	盛綱	陣屋	*佐々木盛綱	
			鬼一	菊畑	*虎蔵 (平若丸)	
				奥庭	*同 右	
十一月	同右	昼	勧進帳		*富樫	
		夜	かさね		*与右衛門	
十二月	同右	昼	石切梶原	星合寺	*梶原平三	
			勧進帳		*富樫	
					*桜丸	
昭和十九年一月	同右	夜	菅原 わり	賀祝		
			島衛酒屋		島蔵	
					同 右	
二月	同右	昼	桐一葉	黒書院	*木村長門	
		夜	五斗三番	泉館	泉三郎	
			双蝶々	角力場	与五郎	
					放駒	
十月	明治座		布引滝	実盛物語	*斉藤実盛	
			権上	夢・仲の町	*白井権八	

生涯の宝もの

— テニスよ、友よ、ありがとう —

吉 葉 芳 彦

仙台の陸軍幼年学校を志願中の愛国少年は、疎開先茨城県の旧制中学で敗戦を迎え、混迷の渦中になげだされた。周囲は豹変し、茫然自失した。

誰かが使ったのか家のおくからラケットがでてきた。数人の友と学校農園を整地してテニスコートを造りはじめた。畑を平らにただけだから、水はけは悪く小じやりもまざり、表面はうねっていた。

授業は浮足だって落ち着かない。先生がたの狼狽ぶりは幼ごろにも苦々しく痛々しく映ったし、急にデモクラシーとか自由や権利とか言われてもさっぱりわからない。どこからか探し出してきた「武者小路実篤・倉田百三・河合栄治郎・天野貞祐」とかの古本を、纏る思いで貪るように回し読んだ。読んでも理解できないから、仲間うちでの議論にさえならなかったのだが。

学校は面白くないので放課後すぐにテニスコートに集まり、ボールの見えなくなるまで打ちまくった。もとより、乱打とかラリーとか言えるザマのものではない。貪るように縋るように走り回っていた。混迷から逃げだす思い、救いを求める思いであつたのだろう。

いつまでもボーッとしている者、与太ってしまふ者、颯爽と左旋回してゆく者たちの多かつたなかで、難解書の回し読みとテニスボールの打ちまくりとが、放心の軍国少年に道を開いてくれた。奇遇というか天啓というべきか、これがテニスとの出会いである。

テニスから学んだものは多い。人格形成のうえでも家庭生活のなかにもビジネス社会においても、みんな深く根つき長く活き続け、「血となり肉」となっている。

○ パートナーと二人で守り、二人で攻める。

広いコートを二人でカバーして、隙をつくらない。お互いのミスを責めない、励まし合う。お互いのウィークポイントは練習を通じて補い合う。

○ ピンチは自分が招き、チャンスは自分が誘う。

くせだまを打つと、相手からも苦しまぎれのくせだまが返ってきてピンチを招く。相手の剛球はソフトに返し、気の抜けたボールは速球を打ってチャンスをつくる。

相手は剛速球に対して得意なのか、ロブに対して強いか。フォアハンド、バックハンドのどちらが不得意なのか。バックの名手のバックを、読み誤って攻めまくり自滅したことがある。

○ 試合中は常時、過ぎ去ったことにはこだわらず、次の展開に備える。

当面する情況に精いっぱい対処したらば、すぐに今後の事態に備えて即応態勢を整える。いつでも前向きに、反省は後刻。スポーツマンシップの肝要な一面である。

○ イレギュラーバウンドもあるし、アンパイヤーの判定ミスもある。

我慢ならないような矛盾もある。さらっと気分一新して次からのボールで挽回を計る。事実、都高体連大会の審判員のアルバイトで、いくたびミスジャッジを犯して若者たちの戦意をそこなわせたことか。

○ ダブルフォールトをしない。

サーブスエースで得点ができ、ダブルフォールトをしなければ完璧である。それはあり得ないとすれば、オールファーストでゆくべきである。ダブルフォールトはパートナーを落胆させ、相手に乗ぜられる。

ファーストサーブはたとえ強烈でなくても相手に脅威を感じさせるとともに、パートナーの守備を楽にさせる。私の信条である。

○ 友はやすらぎであり、誇りであり、宝ものである。

一緒に飲み食いしても遊んでも、仲良くはなれない。ただの気安い仲間に過ぎない。苦勞をとみにし、力を併せて難関を乗り越えることにより、互いに信頼し尊敬し合える。誰もが、きらめきや根性や思いやりのところを秘めている。尊敬の念が根底にあつてこそ親友たりうる。部生活は多くの得がたき親友を与えてくれた。

M先輩に六本木でご馳走になった帰途、「吉葉、お前は板橋だったな。俺は深大寺だ、通り道だから送ってやる、乗れ」。ご命令に服して社長車に便乗した。通り道どころか反対方向にきまつている。お心くばりがあ

りがたかった。

この類の嬉しくありがたい話は先輩・同僚・後輩にわたって語り尽くせない。幸せをかみしめてきた数十年間で、テニスと共に生涯の宝もの。大切にしている。

わが家では家内と娘二人をふくめて、みなで一緒に楽しめることを育てようと努めてきた。テニス・水泳・麻雀と（ラウンドではなく、打ち放し）ゴルフである。娘たちが結婚したので、それぞれの連れ合いの好みによって、麻雀派とゴルフ派に分かれてしまった。やむをえないことである。それでもテニスと水泳は、孫たちもふくめて八人でやっている。

私は軟式と硬式とをチャンポンでやってきてしまったので、グリップがおかしくなり、ボールが前に飛ばない、天に向かって舞う。ひたすら、過去の栄光を「語る」のみである。たった一度の「第三回福岡国体出場」の話が、何度も繰り返し返されるのだから耳障りのはず。ついに娘たちから引導を渡された。「そんな打ち方では恥ずかしいから、学生時代にテニスをやったなんて言わないでくだ

さい」。婿たちの感想も交えているのであろう。

私はほぼゴルファーである。人さまのアドバイスに耳をかさない文字どおりの我流。会社でも仲間うちでも「テニスをした連中はゴルフが上手い」との定説があるらしい。したがって、私はテニスをしたことがあるとは、ついぞ言いだせないで今日に至っている。

家でも外でも「テニス歴」を語ることができないでいる、某大ソフトテニス部のOB会長である。

（二〇〇〇年一月十五日記）

一九九九年極月妄言

水 谷 汎

一九九九年も極月となった。毎年のことながら歳月人を持たずの感を深くする。

「来年は二〇〇〇年だ！」との狂騒曲が世間に絶え間なく流れているのは異常だ。

一九九九年の次は二〇〇〇年になるのは当然で、もしも曆法上、二〇〇一年となるならば、珍事として騒ぐのは当然であるが、二〇〇〇年狂騒曲は聞くに耐えない。

そして「二十世紀はどんな世紀であったか」の論議が横行しているが、論客の多くは自然時間と歴史時間を、同一次元において論議しているので、不毛の論議論争となっている。

合理主義的歴史観に立つて論議を重ねたならば、みのある成果を得られよう。

似而非宗教、似而非学問がはびこり、世に害毒を流しているが、これを防止するには合理主義的世界観の普及徹底が急務であると私考する。

この所論、論議が短絡しているが、合理主義の重要性を提起したための妄言である。

合理主義とは何か？これは来年二十一世紀の課題だ。

秋はいぬ風に木の葉は散りはてて

山さびしかる冬は来にけり 実朝

冬の好日、鎌倉の林間を逍遙すると、この歌が思い出され、承久元年（一二一九年）正月、二十八歳の若さで暗殺された実朝の心事を思うと悲痛だ。鎌倉は血なまぐさい古都だ。

昭和十六年十二月八日のこと。

極寒のモンゴル遊行の後で、十一月下旬からチチハルの満鉄事務所勤務となった。夜勤を終えて十二月八日未明、宿舎に帰り、一睡して十時ごろ食堂に行くと、掲示板に「本日未明、帝国は西南太平洋において米英と戦闘状態に入り……」云々が貼り出されていて、大ショックを受けた。米国と戦えば、敗北必定だから、米国との戦争はないと思い込んでいた私には、正に青天の霹靂、日本は米国の属国になるとの絶望感におそわれ、あわてふためいて勤務先にかけてみると、日本人職員はラジオをとりかこんで「勝った！」「大勝利！」の戦況ニュースに聞き入っていた。

一方で、漢族職員は、われ関せずで、平常通りに平然として事務をとっていた。

この対照的な情景は、強烈な印象として今でも脳裡に焼き付いている。翌年一月、陸軍に入隊の命令をすでに受けていた私は、この戦争で死ぬだろうと覚悟し、一日も早く故里に帰り、親類縁者知友をたずねて訣別の挨拶をせねばならぬと思いたち、十二月十日、チチハルを離れ、朝鮮半島を南下し、釜山から下関に上陸、家族のもとに帰着した。このころ、すでにアメリカの潜艦が朝鮮海峡に出没していた。

この戦争の本質は何であるのかの問題は、今でも常に脳裡に刻まれ、極月になると戦争犠牲者への鎮魂と共に、この問題にのめり込んでしまう。

一九四五年のXマスプレゼント

—銃口と無処罰—

第二次大戦で降伏後も、南方第一陸軍病院（在シンガポール）は英軍の警備下で、医療活動が続けていた。

十二月二十四日の夕刻から翌朝まで私は当直司令の任務についていた。

夜の九時ごろ、パトロール中の英警備兵が泥酔して来

室し、「女を出せ！」とうるさく私に要求した。この女とは、日本人看護婦のことを言っているのだ。あいまいな応答で、言質をとられると大変なことになるから「ノー」を連発した。クリスマス・イブとは言え、軍紀厳正な英兵が、パトロール中に飲酒とは全くあきれはててしまった。

「ノー！」以外を発言しないので、英兵は「十分間の猶予を与える。十分後にまた来る。その時、ノーと言ったら射つ」と捨てせりふを残して出て行った。

再び彼が来たら、銃を取り上げてやろうと、その手段を思案していると、十分がたったが、彼は現れない。

どうしたのかと思っていると、病棟の方で人がわめいているのが聞こえてきた。そこへ、かけつけてみると、あの英兵が、机にジャックナイフを突き立てて、トウジヨ―東條とかヒロヒト―裕仁とか言って、わめいている。先刻の私への捨てせりふは、一言も出ない。

そこで、衛生兵を警備司令のところへ走らせて、司令が急いで来るよう申し入れたところ、司令（曹長）が即座に来てくれて、酔っぱらった兵を連れて帰った。こ

の曹長、実直な人だった。

軍紀厳正な英軍だが、この兵は処罰されなかった。おとがめなしがクリスマス・プレゼントだったのだろう。その後、この英兵は、この一件を恥じたのか、私に顔を見られないように立ち回っていた。

現代「高札」考

木下 洋介

私が利用している私鉄の駅のホームに、こんな看板が立っている。

朝間ラッシュ時（7時30分ごろ～9時ごろまで）この辺の車両は大変混雑いたします。お待ちになっても乗車できない場合がありますので……。

駅としては「朝間」を「ちようかん」と読ませたいのだろうが、ひっかかるものがある。おそらくこれを書いた人たちは、夜なら「夜間」、昼なら「昼間」というか

ら、「朝間」があってもいいじゃないか、といっているのではないかと思える。そうだとすれば、夕方のラッシュは「夕間ラッシュ」となるが、朝間云々、夕間云々というのはなんとなくすっきりしない。それとも、この業界では「朝間」は日常語になっているのか。まさか、当世流行の感字ではあるまいと思いが、念のため電話して聞いてみた。返ってきた答えは「二十年前入社したが、その時から使っていたと思う」だった。「夕間ラッシュ」はどうかと聞くと、滅多に使わないが、用語としてはあるそうだ。つまり業界ことばだったのだ。

この私鉄ではこんなこともある。多くの駅では「……ドアが閉まります。ご注意ください」というところを「ドアを閉めさせていただきます。ご注意ください」という。聞きはじめは奇異に感じたが、もう慣れてしまった。

この駅で、また気になるアナウンスが始まった。

「当駅では喫煙コーナー以外でのおたばこは、禁煙とさせていただきます」という。「させていたたく……」のではなく「喫煙コーナー以外でのおたばこは、

「ご遠慮ください」でいいのと思うのだが。

慣れとは別に、犬も歩けばなんとやらで、人の行くところ、掲示や看板やアナウンスがあり、気になる言葉遣いに出会う。

これは地下鉄新宿駅ホームの掲示である。

「駅構内または車内で不審物・不審者を発見した場合
は、直ちにお近くの駅係員または乗務員にお知らせください」

不審物・不審者は「ふしんぶつ」「ふしんじゃ」と読むのだろうか。

これも地下鉄新宿駅ホームの掲示である。

「エスカレーター工事に伴い、この位置でのお待ちのお客様の人数を制限させていただきます。皆様方のご理解とご協力をお願いします」

「エスカレーター工事のため、ホームがせまくなっておりますので、この付近ではお待ちにならないでください」でいいのではないか。人数制限などと言わなくても。

「貫通路には立止まらないで下さい」

貫通路とは穏やかではないが、これも私鉄のこと。京

王電車でみた表示だ。車両と車両をつなぐ通路のことをいうらしい。西武電車では「渡り板の上には立ち止まらないで下さい」とある。

JRのシルバースートの表示が変わった。

「優先席 おゆずりください この席を必要としていらっしゃるお客さまがいます」とあって

「乳幼児をおつれの方 妊娠している方 お年寄りの方 からだの不自由な方」と説明している。以前の「お年寄りやからだの不自由な方の優先席です」の方がすっきりしていると思える。多くの私鉄は従来通りの表示だ。

JR品川駅のホームにこんな掲示があった。

「京浜東北線③④番線横浜方のトイレはただいま使用不能のためご使用できません」

次は某有名病院耳鼻咽喉科でみたものである。

「鼻の診察をご希望の方はお手数ですが、鼻をかまないでお待ちください」

この二つ、どこかおかしい。「お手数」の方はその後なくなっていた。

これはいかにもお役所仕事と言われそうな掲示だ。区

立の公園の入口に立っていた。

「バット等は危険なので使用しないで下さい ○○

区土木部公園課」

「等」「危険」は子どもには読めないだろうからと、わざわざルビを振るおもいやりがあるなら、「とう」「きけん」も理解できないだろうというおもいやりも欲しい。「バットなどはあぶないので、つかわないでください」とすればよいのに。

ワニがいたという話題になったあの池のほとりに、最近「放犬禁止」の四文字だけの立て札が立った。いやでも目につく。犬を鎖から放すなということに、放鳥をもじったのだろうか、放犬とは少々無理があるようだ。携帯電話のマナーについても賑やかだ。

「携帯電話、PHSの病院内での使用は、心臓ペースメーカーその他電子医療機器に障害を与えます。使用される時は病院建物の外にてお願いします。また、院内への持込みに際しては電源のスイッチを切るようお願いいたします」 (○○病院)

「授業時間中教室内では、携帯電話、PHS、ポケッ

トベルは必ず電源を切ってください」 (○○大学)

「会場内での携帯電話等の使用はお控え下さい」

(ルーブル美術館)

「携帯電話の使用は固くお断りします」

(レストラン○○)

これは、ある喫煙コーナーで見た落書き風の掲示。

「ここでは堂々と喫ってください」

パクスという名のカップル

小島 博志

ミレニアムを前に昨年十一月から、パクスという名の新カップルがパリの街を闊歩し始めた。男女のペアもあれば、男同士、女同士の同性カップルも、まだ足取りは弱い、肩を寄せ合い手を取りあって歩いている。

パクスとは耳新しい言葉で、「連帯に関する市民契約」といった意味のフランス語の頭文字をつらねてつくられ

た。結婚を嫌って増え続ける内縁・同棲関係に法の網をかぶせようと考え出された「第三の家族」の形といえる。成人二人が同性同士であれ異性であれ、共同生活を宣言して裁判所に登録すればパクス・カップルと認められ、結婚に準じた法的保護が受けられる仕組みである。

パクス・カップルは共同生活三年目からは結婚夫婦と同じような税制優遇が受けられるので、個別に課税される内縁関係よりはずっと得。自分が社会保険加入者でなくてもパートナーが加入しておればその恩恵を受けることができる。パートナーが亡くなれば相続人となって遺産に控除が認められる。このほか、住居の賃貸借契約はパートナーが死亡しても継続され、公務員の場合は、夫婦関係と同様に、異動に際して地理的接近の配慮がなされる。外国人がフランス人とパクス契約を結べば、滞在資格や国籍取得に有利になる。

国立人口研究所の年次報告（昨年十二月発表）によると、フランスの結婚カップルは九〇年代に年々減り続け、九八年は千二百四十万組になった。一方、「自由結合」といわれる同棲・内縁組は二百四十万組と全カップルの

一六パーセントを占めるようになった。九〇年調査と比べると、この八年間に結婚は二・六パーセント減り、内縁は六二パーセントの急上昇ぶりである。従って婚外児は増えて新生児の四割に達し、第一子を生む女性の五三パーセントが非婚または未婚での出産である。こうした中で、どれだけパクスに取り込めるのか。人口研究所の予測によると、十五万から二十万組、さらにホモ関係者からも一万組程度がパクス契約に向かうだろうという。もっとも三、四万組という低位予測もあって、全く霧の中。

パクス法は約一年間、フランス国民議会の内外で保守両派が激しい論争を繰り返してきた。結婚と内縁関係の保護で現状はカバーできており、三万組のホモ関係者のため、いま急いで法をつくる必要はないというのが右派の主張である。シラク大統領も「パクスは家族の要求を満たすには不適當である」と再三牽制していた。しかし、国民議會は昨年十月十三日、賛成三百十五票（社会党・共産党・緑の党）、反対二百四十九票（仏共和国連合・仏民主主義連合など）で可決した。右派は直ちに憲法評

議會に持ち込んだが、結果は合憲。一ヵ月後の十一月十五日に公布された。合憲というものの、法文にはあいまいなところが多く、評議會から数々の留保条項がつけられた。このため施行令はまだ検討中で、実施を急ぐエリザベート・ギー法相は全国約四百七十の小審裁判所にパクス申請は直ちに受理するよう通達、受け入れ体制を整えた。遅れを恐れた法務省は手回しよく片肺のままスタートさせたわけだ。

中世このかた、キリスト教会は結婚を神の思し召しによる男女の終生的結合として教会裁判所が管轄し、同性愛は禁じ刑罰の対象としてきた。宗教改革、自然法思想を通じて結婚は世俗事項との認識が普及し、フランス革命以来ようやく法律婚の時代となった。そして最近では、同性婚を認める法がデンマーク（一九八九年）をはじめノルウェー（九三年）スウェーデン（九四年）オランダ（九八年）と北欧諸国で相次いで成立している。しかし、同性愛は異常ではないとする精神医学上の通説にもかかわらず偏見、差別は現在も根強く残っている。

虹の旗が翻るゲイの拠点、パリのマレー地区では法の

成立を聞いて「これで平等の権利が得られるとは思わないが、第一歩だ」と比較的冷静にうけとめ、「これまで友人が重い病気にかかったり、死期が近づくと、親族がやってきて、彼の財産をもつていつてしまったが、これからは彼のパートナーが相続人になるだろう」と話していた（フィガロ紙）。また五十一歳と五十二歳のトーマスとシャルルは十一月二十二日にパクス登録を済ませ、ルモンド記者に「二十一年間いっしょに暮らしてきて、いまさら一枚の紙で何が、とは思う。でも、これがあれば心強いし、法の力を信じる」と言っている。法の成立から年末までの一ヵ月半のパクス登録数は、全国で約六千二百組だった。このうちホモ関係はパリでは七割、地方では四割ぐらいだったとみられている。

パクス登録簿はプライバシーに関する情報も含まれるため公開が問題になる。施行令案で政府の諮問を受けた「情報と自由に関する委員会」が登録簿へのアクセスは制限すべきで、とくに住宅賃貸人や銀行などの債権者は規制すべきだと答申している。一方、第三者保護の立場からは公開が原則であり、こうしたことも今後の登録数

に影響することだろう。

さらに気がかりなのは、パクス契約の一方的な解消である。いやになればいつでも相手方にその決心を伝え、そのコピーを登録済みの裁判所に送れば終わりである。合意を伴わない離婚には六年間の別居が必要というのに比べれば、いとも簡単である。今後、契約と解約が簡単に繰り返されないとも限らない。複雑化する家庭環境、そのなかで育てられる子供への影響はどうであろうか。女性の社会進出がすすみ、社会保障が充実してくれば結婚の絆が緩んでくるのは、洋の東西を問わない。わが国でも近年、女性の晩婚化、少子化が進み、バラサイト・シングルも珍しくなくなった。一方、離婚も“成田離婚”から“定年離婚”まで年齢を問わず増えており、結婚と家族の関係に新しい波が押し寄せてくるのは遠い将来のことではなからう。



短歌サロンの状況

細川 謙三

短歌は自分の内心の感動をありのままに三十一音のリズムと語音の調和（言葉のひびき）にあわせて詠うもので、万葉以来、日本人の心の中に生き続けた詩型式ですが、このありのままということについて拘る人たちがあ

り、さまざまな議論があります。

例えば、万葉集の有馬皇子の歌

家にあれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に

盛る

と、藤原定家の歌

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の

そら

を並べてみてみて、その優劣を論じてみても、一方に

は死に臨んでの飾らない痛切な心の哀韻のひびきがある

のに対して、他方には源氏物語などの故事をふまえた言語美の構成が見事だ、という意見があります。つまりは真率なまごころか、構成された言語美か、ということになるのでしょうか。

私は個人的には真率なありのままの感情表出が短歌の本質だと思いますが、人によっては万葉よりも、古今、新古今だという方もあるのです。

OBペンクラブの短歌サロンも段々歴史を加えて来ましたが、そろそろこのような本質的な部分を論議すべき段階に來たようです。

以下、昨年一年の皆さんの作品を五首ずつあげておきます。

アブドルカーダー・栄子

秋の日になお咲き残る朝顔のブルーが淋し線路わきみち
松杉の青を抱きて四方よもの山いまはの際を燃えさかりをり
すすき野も紅葉色して燃えてをり人の恋しく人の疎うとまし
き

煌々と輝きわたる雲海やその果ての地にわが娘訪ねむ

飛行機の窓をしぐれのたたきけりジュネーブ空港に娘と
別れ来て

北 田 純 一

モノクロの夢あわあわと若き日の霜光る野に立ちいしは
誰ぞ

無国籍のフジコ・ヘミングウエイ酔いしごとリスト弾き
おりリズム自在に

進むより退くが勇氣とヒマラヤを征せし田部井淳子語り
ぬ

幼らは花に埋もれし曾祖母の額撫ぜおり棺閉ずるまで
般若経低く流るる納骨の墓石に著し地震の疵あと

三 枝 亭

滔々と黄砂を貫くアムダリア河畔に立てば砂暖かし
若き日に読みたる英書「アップル・トリー」恋しくなり
て書架に探す

今日もまた変わる事無き葛飾の梨の畠を歩み行くなり
薄水の枯葭そよぐ涌水にはや萌出づる芹の青しも

艶やかに咲く石楠花の庫裏の道背の丸き尼僧掃き清め行
く

深 尾 榮 助

近江路の水田はいま黄金の穂四季足早に移りゆくなり
京都御所の蛤御門くぐりゆく和装の少女京の夕暮

関越道北陸道を走り来て荒波あがる能登金剛は
朝焼けの輪島のまちの朝市に蟹売る老女いたくたくまし

奥能登の狼煙灯台訪ね行き明治の英人設計士を思う

藤 岡 豊

頑なに筋を通しし亡き母の面影しのぶ日溜りの墓地に
北陸線の車窓に続く蒼き海能登半島は遠く霞みて
安らかにこの世を去りしわが母の好みし菊を墓に手向け

ぬ

恙なく母の納骨終えし妻安らぎて見ゆ香をまといて
高野山に遍路幾組歩みつつ梵鐘の音谷に消えゆく

西川 知世

十三年わが子の如く家にゐし犬身罷りぬ土曜日の朝
子を持たぬ夫婦なれども犬のゐて笑ふこと多き日々賜り
し

抱きあげしこと多かりし犬なれば掌に感触のいまだ残る
も

一日に幾度も犬の名を呼びてゐたことを知る犬逝きたれ
ば

黄落の始まりゐたる駅前の桜並木を足早に過ぐ

以上のごとく、私が選べば、古くさい言葉ながら、歌
はまごころということになつてしまふのですが、どうで
しょうか。

ペン俳句の一年

Ⅱ 会を重ねての成果Ⅱ

平 間 真木子

句会報は十二月にて七十七号を数えるに至った。満六年の地道な成果をうれしく感じている。木下洋介・本田松魚さんの新たな参加を得、その清新な作風は好もしく、快い刺激を与えられた思いである。桜吟行は愛宕山の放送博物館を訪ね、秋は隅田川の水上バスに乗り浜離宮の吟行を楽しむことが出来た。吟行の楽しさを覚えて下さったことは大きな収穫である。忌日俳句に取り組み、苦闘した思い出など、この一年の成果を顧みて次なる一年に繋げてゆきたいと思っている。

あらたまの光りの中のシクラメン 浅野 正春

冬牡丹をきざはしに見る実朝忌

春風となりし北窓開け放つ

梅雨寒の笠間の徳利出しにけり

移る世や額紫陽花の数増えて

冬の旅 平 間 真木子

スメタナの国の山河の凍ててゐし

冬帽や踏みてプラハの石畳

霧氷林尽きしところに革命碑

ペチカ燃えをり国境の検問所

霧の夜のマリオネットを購はむかな

凱旋門見しあとにして牡蠣を食ふ

ダイアナ妃ここに死にきと冬の薔薇

漱石忌・実朝忌・河童忌など忌日俳句の回を重ねて、

その難しさを啣つことが多かったが、その人物とその時代背景など勉強し得るところがあった。正春さんのこの句、冬牡丹という補助季語を選んだところが何よりである。笠間の徳利に象徴される正春像は楽しい。

みづみづしく生きたく候西行忌

アブドルカーダー

ペランダを濡らして春の雪降れり

栄子

モナリザの微笑のほどに山笑ふ

風涼しハーブを摘みし指匂ひ

背戸よりの風を感じて簾寝椅子

岩手県におられるので、直接お会いすることがなく、投句だけではもどかしい思いをお互いに抱いている。句会という場で、じかにものを言い合うことの幸せを痛切に感じている。第一句のこの感性を大切にして頂きたい。大きく伸びられる方と信じている。

人日の霽へる日比谷通りかな

池田 耕治

老幹の松に弥生の月丸し

縁先に虫の音帰国第一夜

露けしやお狩場跡の鴨之塚

シネマ見て萩須展見て文化の日

退任後の自由な生活になられ、句の傾向が自在になつたように思われる。日比谷通りを歩き、シネマと萩須展を見るなど、ゆったりと人生を楽しむ姿が洒落っていて、のびやかな句風がたのしい。少し文人派の気配があるが、小さくまとまることなく進まれることを期待したい。

春を待つ庭に無人の半仙戯

石川 正達

くさや干す浜に五月の風流れ

日焼せるナポリの少女胸まぶし

籐椅子のほつれや思ひ定まらず

冬構へせし裏庭にかくれん坊

「半仙戯」という語をご存知であることに驚かされた。さすが、の思いである。この春の句、実にさり気なく、しかもある庭の情景が描かれている。くさやを干す浜の五月の景、ナポリの少女の胸に当てた視線は若々しいばかり。この明るい作風は何より好ましい。

亀井 弘次

ラグビーの終りの笛の非情さよ
春宵や二つの星の相寄りて
河童忌の黄ばみし本を取り出す
月食や点滴のなほ終らざる
ペンシヨンの煙突修理冬構

その青春はラグビーと共にあったようで、いつでもラグビーの話に花が咲いている。「終りの笛の非情さよ」とは実体験の裏付けのあつての言葉に違いない。「二つの星の相寄りて」の浪漫もあり、ペンシヨンの煙突修理という現実的な作品にも魅かれるものがある。

春の雲ローランサンと共に来し

北田 純一

フランスへ発つてふ姪の白日傘
消印はコペンハーゲン夏便り
耳少し遠くなりたる冬帽子
母許や昔ながらの牡蠣雑炊

俳句の俳諧性を一番身に付けられたのは北田さんである。本来のものなのであろうか。いつも目が離せない思いで注目している。ここに選んだ五句にはその傾向がなく、さわやかな明るさに満ちた作品で、北田さんの多面性を感じられる。さてこれからどんな俳句を見せてくださるのであろうか。

火伏なる神在す花の愛宕山

岸本 義生

腕組みをしてはほどきて梅雨に入る
河童忌やいつも無口な古本屋
盆芝居悪は素直に討たれたる
端溪の硯を洗ひ年用意

愛宕山吟行はことに気に入られたようで、吟行句の実感が籠っている、と書き添えて下さった。俳句は足で作るものと言われていることの証であり、うれしい一語である。今後も年に二回の吟行はして行きたいもの。その積み重ねは大きいと思っている。

木下 洋介

手の甲の汗を見つめて母のこと
もの忘れまたかとひとり黄落期
柚子一つ卓に載せあり妻の留守
菜園に冬構へして昼の月
庭焚火煙りゆつくり闇に消ゆ

新しく入会され、皆さんの注目を浴びておられたところ、都合により暫時休会となってしまうところがある。これはたのもし、と期待される。作品には少し翳げりがあり、多少苦渋のあとあつて、今後の展開はいかがだろうか。

三枝 亨

終バスの客は寡黙に春寒し
カヌー漕ぐ新樹の谿の深くして
カンナ燃ゆかの大学の時計塔
八朔や遠忌となりし父母偲び
人参に掛声高し耀市場

「カヌー漕ぐ」のこの作品が好きである。どこの、どんな谿なのであろうか。作品の世界の大きく広がるところが楽しいのであって、説明ではない。五句いずれも平明・明快・少しのてらいがない。実景をしつかり取りつつ示す、それで充分である。

西川 知世

火の気まだなき元日の厨かな
新樹に降る雨の緑のまぶしかり
検札の車掌の若し夏帽子
河童忌や図書館を占め日焼の子
九十齡過ぎし健啖生身魂

「九十齡過ぎし」健啖のお二人を看ながら日々健闘の知世さんである。結社の勉強会に参加し、俳壇の公募に応じて作品を出された由、その結果の待たれることである。若さのあるみずみずしい作品は、やはりその年齢でなければ出来ないもの。忙しさの中から生まれる俳句を大切に育てて頂きたい。

睡眠薬一粒を掌に我鬼忌なる
散骨のことまだ告げず盆の月
図画いつもこの思ひ出美術展
煙管もて庭師の指図冬構
冬空や小江戸にひびく時の鐘

本田
(松魚
克夫)

平成十一年の後半よりこの俳句会に参加された方。充分勉強されておられるようで、あぶな気のないしかも風格のある作品を出されている。この会の中核として活躍して下さることであろう。句会の論戦の中に、静かな一語をもって締め括って下さる方でもある。

企業OBペンクラブのあゆみ

Ⅱ平成十一年（一九九九年）Ⅱ

年 表

（原則として敬称略）

一月例会（二十日）

・入会 田中 淳三 新山 章一郎 山本 格

木下 洋介 宮川 政一

・会員講演

深尾 榮助

「販売戦略としてのリサイクリング—ドイツの場合—」

合—

・本の紹介

三宅 劭 「太古へ—ニュージーランドそしてブータン」

ータン」

・会の今後の基本方針発表

二月例会（十七日）

・入会 大塚 卓夫

年 史

一・役員人事（任期二年目・前年度と同じ）

会 長 北田 純一

副会長（会計担当） 上澤 準一

副会長（事務局総括） 亀井 弘次

副会長（運営委員長） 中川路 明

理 事 櫻井 清治

事務局長 藤岡 豊

運営委員長補佐 都甲 昌利

監 事 遠藤 俊也

運営委員は二十二名

二・新年度の基本方針

引き続きアウトプットに重点を置くが、時代の趨勢に即応すべく、その具体的方法につき検討を進める。

・会員講演

中野 隆夫

「経営の裏話」

・本の紹介

玉山 和夫

「THE JAPANESE INVENTION」

三月例会（十七日）

・入会 小島 博志

・ゲスト講演

松田 修

「今どきの若者というけれど」

・本の紹介

北田 純一「経済学の終わり」「聖書神話の解説」

・「悠遊」第六号完成、配布

四月例会（十四日）

・会員講演

今川 確郎「最新のイタリア事情」

・本の紹介

三．新規施策

・Eメール利用を強化し、電子出版の実現を目指す。
・前年度に続き、月例会の講演は会員講師を主体とする。

・何でも書こう会を強化発展させ、その有効活用を図る。

・創立十周年の記念出版を実現させる。

四．会員数

新入会員は十六名、退会者は二名で、九十九年末現在の会員数は九十九名となった。

五．出版・プロジェクト

（一）同人誌「悠遊」第六号が三月十七日に発行された。（編集世話人 石川 正達・中川路 明）

（二）クラブ創立十周年記念として、単行本「年金経済学」（仮称）の出版を計画、執筆を完了した。

（プロマネ 北田 純一）

（三）K&Kプレス「月刊 日本」の二百字提言・議論・談論への投稿を開始した。

（プロマネ 北田 純一）

（四）アジア調査会出版の月刊誌「アジア時報」への

都甲 昌利「エリーゼ宮の食卓」

・退会 山本 格

五月例会（二十五日）

・入会 増岡直二郎 真野 正 柴垣 復生

・会員講演

森田 茂「地球環境とエネルギーの選択」

・本の紹介

三宅 劭「見えない国 見えないルール」

六月例会（二十二日）

・会員講演

大塚 卓夫「日本人とお酒」

・本の紹介

衛藤 甲子郎「戒老録」

・退会 林 洋

七月例会（二十八日）

・入会 杉浦 右蔵 刀祢館 正久

・会員講演

寄稿（プロマネ 石川 正達）〔六月に終了〕

（五）「ホントの話」原稿執筆を完了、その一部が雑誌「ボン・コバン」に掲載された。（プロマネ 北田 純一）

北田 純一

（六）TKCの月刊誌に「エグゼクティブの国際マナー」を投稿。（プロマネ 北田 純一）〔二月に終了〕

（七）新プロジェクト「ものの始め、ことの始め、会社の始まり」（仮称）の原稿募集を開始。（プロマネ 都甲 昌利）

都甲 昌利

（八）雑誌「ロゼッタ・ストーン」のコラム「最近腹のたつこと」への原稿募集を開始した。（プロマネ 大野 昞）

大野 昞

六．ミーティング・勉強会

（一）内外情勢勉強会（マネジャー 上澤 準一）

「信用収縮」「ヘッジファンド」「デリバティブ」を始め内外の主要トピックスをもとに勉強会が行われた。

（二）何でも書こう会（マネジャー 浅野 正春）

会員が寄稿した短編随筆をベースとして会員による

定直 正光「コソボ紛争」

・本の紹介

北田 純一「宇宙誌」

八月例会（休み）

・入会 本田 克夫

九月例会（二十八日）

・入会 折戸 常司

・会員講演

木下 洋介「放送（ラジオ）のことあれこれ」

・本の紹介

石川 正達「日本語練習帳」

十月例会（二十六日）

・会員講演

関谷 裕彦「歌舞伎あれこれ」

・本の紹介

小島 博志「思考のレッスン」

・同人誌「悠遊」第七号のテーマ

率直な相互批評や討議を行い、もって会員の文章力向上を目指した。

（三）サロン21C（マネジャー 北田 純一）

「宅地倍增政策で日本再生」「宗教を考える」「右肩下がりの経済学」「グローバル市場経済のこれから」「ミレニアム考次第」等をテーマとして勉強会が行われた。

（四）小説研究会（マネジャー 八木 大介）

小説を書くことにより表現の仕方を学ぼうとするもので、回を追う毎に盛会となった。

（五）Eメール勉強会（マネジャー 多田 修）

インターネットを利用してクラブ活動の幅を広げようとする勉強会で、二年目を迎えた。会員の数も飛躍的に増え、活況を呈している。最終目標である電子出版に向けてスタートし、エキスパートを招いて話を聴く等、着実に歩を進めている。

（六）公募をしよう会（マネジャー 中川路 明）

「公募ガイド」誌をベースとして、ネーミング、標語、作文、体験談、エッセー等の公募テーマに挑戦しようというもの。新年度からはプロジェクトとし

「ミレニアム」に決定

十一月例会（二十四日）

・会員講演

上澤 準一「最近のロシア事情」

・本の紹介

三宅 劭「どこまで続くヌカルミぞ」

十二月例会（十五日）

・入会 池松 三郎 上原 利夫

・会員講演

古寄 清巳「シルバー・ボランティア―中国から
帰って―」

・本の紹介

森田 茂「旧約聖書を知っていますか」

・忘年パーティー

恒例の忘年パーティーを丸ノ内養和クラブ第一・二
集会室で開催。

でスタートする。

（七）短歌サロン・俳句教室

細川謙三、平間真木子両先生の指導のもと、感性と
表現力の向上を目指すもの。指導と相互批判を通じ
て、作品の質は大きく向上している。

（八）会員ニュース

・林洋が朝日新聞社出版の「論座」二月号に、「宅
地倍增政策で日本再生へ」と題して論文を発表
・櫻井清治が東京経済大学で農業問題を主題として
講演（一月）、輸入食料協議会報に「グローバリ
ゼーションのこれから」と題する論文を発表（九
月）

・岩崎洋一郎著「交渉の英語」（仲谷栄一郎と共著）
が日興企画から出版（二月）

・新井 進が新日本美術院主催の第五回マスターズ
大賞展に洋画を出品（七月）

八、新役員人事

十二月末にて現役員の任期が終了、新たに来年度か
らの新役員が次の通り決定した。

会 長

北田 純一

副会長	中川路 明
理事	多田 修
理事 (事務局総括)	藤岡 豊
運営委員長	都甲 昌利
事務局長	中村 爽
運営委員長補佐	大野 晃
監事	児玉 忠雄

九、まとめ

一九八九年十一月に当クラブが創設されて以来満十周年を迎え、会員の数も一〇〇名に手の届くところまで増えた。しかしながら出版業界の不況は募るばかりで、当クラブも引き続き厳しい環境に置かれている。このため今後のあり方について真剣に取り組む必要があり、理事会・運営委員会で討議が繰り返し行われた。この中において、月例会における会員の講演をはじめ、各種勉強会では熱心な活動が続けられた。

ものを書く集団としては、時代変遷のはざまにあつて新しい進路を模索する年であつた。これは必ずや当クラブ発展の足がかりとして、新しいミレニアムに繋がるものと思われる。

執筆者名簿 (五十音順)

氏 名	(カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
浅野 正春	あさの まさはる	日立製作所	1934
芦刈 克	あしかり まさる	住友生命 ニッコン	1931
アブドルカーダー 栄子	アブドルカーダー えいこ	ニューサウスウエルズ州立コレス ボンダンススクール日本語教師	1933
新井 進	あらい すすむ	伊藤忠商事	1931
池田 耕治	いけだ こうじ	第一勧業銀行	1927
石井 正紀	いしい まさみち	千代田化工建設	1937
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞	1921
今川 確郎	いまがわ かくろう	兼松	1926
今村 亮	いまむら りょう	京セラインターナショナル	1931
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
衛藤甲子郎	えとう こうしろう	住友商事	1924
榎本喜三郎	えのもと きさぶろう	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅	1924
大島 義	おおしま みよし	エヌ・イーケムキャット	1931
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
大野 晃	おおの ただし	三井物産	1933
岡 政昭	おか まさあき	東京銀行NBD	1926
折戸 常司	おりと じょうじ	三井物産	1925
上澤 準一	かみざわ じゅんいち	三菱商事	1927
亀井 弘次	かめい こうじ	キリンビール	1928
岸本 義生	きしもと よしお	兼松	1927
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事	1928
木下 洋介	きのした ようすけ	文化放送	1933
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日本製鉄	1927
小島 博志	こじま ひろし	毎日新聞	1931
児玉 忠雄	こだま ただお	三菱銀行	1932
小林 正憲	こばやし まさのり	大和毛織 国際工機	1930
三枝 亨	さいくさ とおる	三井物産	1927
斉藤 勁	さいとう つよし	呉羽化学工業	1925
櫻井 清治	さくらい せいじ	三井物産	1926
志田 涉	しだ わたる	伊藤忠商事	1919
(山辺 武麿・やまべ たけまろ)			

氏 名	(カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
柴垣 復生	しばがき またお	神戸製鋼所 神鋼電機	1925
莊司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業	1932
杉浦 右蔵	すぎうら ゆうぞう	NTT 三菱電線工業	1932
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロイド・ラインズ	1932
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅 松竹	1936
竹内 京一	たけうち きょういち	トープラ	1931
多田 修	ただ おさむ	横河電気	1929
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省 日英協会	1919
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929
中川 十郎	なかがは じゅうろう	ニチメン	1935
中洲 靖雄	なかす やすお	三菱レイヨン	1927
中村 爽	なかむら そう	日本工営	1933
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米軍海軍基地統合人事部	1930
西川 永幹	にしかわ ながみき	さくら銀行	1941
西島 力	にしじま つとむ	住友商事	1930
野村 嘉彦	のむら よしひこ	三井物産	1917
平間真木子	ひらま まきこ	日本機械輸入協会	1925
深尾 嵐山	ふかお らんざん	富士銀行	1931
(深尾 榮助・ふかお えいすけ)			
福井 律	ふくい たかし	明光証券	1924
藤井 長治	ふじい ちょうじ	三井物産	1919
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事	1932
細川 謙三	ほそかわ けんぞう	東京銀行	1924
本田 克夫	ほんだ よしお	毎日新聞	1927
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事	1939
水谷 汎	みずたに ひろし	満鉄・友愛信用組合	1917
宮川 政一	みやがわ まさいち	蝶理	1925
三宅 劭	みやけ たかし	信越化学	1927
森田 茂	もりた しげる	出光興産	1930
八木 大介	やぎ だいすけ	三菱商事	1926
(木本 平八郎・きもと へいはちろう)			
吉井米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産	1926
吉寄 清巳	よしざき きよみ	関西ペイント	1925
吉葉 芳彦	よしば よしひこ	出光興産	1931
西川 知世	にしかわ ちよ	企業OBペンクラブ事務局	1948

企業OBペンクラブは会員数が百名前後と大きくなって、悠遊第七号への寄稿エッセイも六十編を数えました。特集は「ミレニアムに思う」と漠然としたテーマでしたが、自由テーマと同数の三十編が寄せられました。第六号は四十九編（特集十九編、自由三十編）でしたので、十二編の増加。ページ数が増えて予算をかなりオーバーするのではないか、と嬉しい心配をしています。このため二四〇〇字を大きくオーバーした作品は、やむなく一部を割愛させてもらったものもあります。ご寛容ください。

内容は、出身が多彩だけに個性豊かな作品が揃いました。一方、わたくしを含めて「金剛石も磨かずば」の思いも強くなりました。「何でも書こう会」などで筆を磨きましよう。

表紙の絵およびカットは新井進さんと吉井米三郎さんの作品です。ありがとうございます。

〔編集世話人〕 石川 正達

小島 博志

〔事務局〕

西川 知世

事務局から

西川 知世

いよいよ二〇〇〇年になりました。いつもとかわらぬ新年のようでもあり、心新たな記念の年明けでもあるように感じます。この事務局だよりを書くことも七回を数える私の心情とも重なります。企業OBペンクラブは昨年十周年を無事終えました。今年は、若返りをはかった新理事体制のもとにスタートをいたしました。新事務局長の下で私も気を引き締めて頑張りたいと思っています。が、なにせ主婦のアルバイトです。お気付きの点はなんなりとご指摘ください。会員数は百名になるうとしています。実は事務局を預かっている立場から言いますと、今のコピー機は九九枚までしか連続して印刷できません。百名を越えるところとめんどろです。

しかしながら、それにも増して会員数が増えることは嬉しいことと歓迎いたします。悠遊の発刊を軸に、着実に歩を進めて行かれる企業OBペンクラブに敬意を表して、さらなるご発展をお祈りいたします。

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第七号

二〇〇〇年三月二十九日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 北田 純一

印刷所 株式会社毎日整備産業

東京都千代田区一ツ橋一―一―一

TEL 〇三―三二一六―五四八九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 中村 爽

茅ヶ崎市高田三二二二一（〒二五三〇〇〇二）

TEL 〇四六七―五四―八四〇九

口座 第一勧業銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ
(普通 1633830)

頒 価 一、〇〇〇円